

「雪の日」が一葉の初期の心境小説である如く、「たけくらべ」は、彼女の後期の心境小説である。美登利が無邪氣な少女時代から急變して、新しい計り知れない人生へ出掛つた如く、一葉も習作時代を経て、これから文學の大海へ出掛つてゐたのだ。文學愛好者に惜まれる所以である。

主觀的作家であるとしても、一卷の一葉集を通讀して、作者の日常懷抱してゐるある人生觀、ある理想が讀者の胸に映つて來る譯ではない。貧窮の境涯にゐて苦闘してゐた彼女は、日記のうちにも屢々衣食の缺乏について歎息を洩らしてゐるし、「さるにても意地悪の世や〜」などと小説のうちでも零してゐるが、しかし、作家としての心眼に映る人生に對して決して悲觀的でも絶望的でもなかつた。むしろ健全性を具へて常識的であつた。「うつせみ」は、失戀の狂女を描いたもので稍々筆の馴れた後期の作物であるが、かういふ題材は面白からうと思ひついて書いたゞけで、すべて型の如く、常套を脱したところはない。「われから」にも、多くの眞實性が認められない。いくら聰明で批評の目を備へてゐた才女があつたにしても、二十を過ぎたばかりで、異性に對する體驗もなかつたらしい彼女に、人生の深いところの分らう筈はなかつた。「いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさう」と思つた「われ道」のお京には、作者の實感から出た共鳴があつたであらうし、美登利の心理は、

作者自身の實驗した心理によつて裏附けられてゐるのであらうが、他は多く云ふに足りないのである。伶俐な少女の小説たるに過ぎない感じがする。

藤村が詩に於て、樗牛が美文と評論に於て、明治二十年代の青春の悩みを唄つた如く、一葉の小説の形を借りて、あの頃の女子としての青春の悩みを唄つたものとして、永へに後人の情緒をそゝるので、今日の文壇があゝの時分に比して、人生描寫社會觀察に於て遙かに進んでゐることは否定出來ないのだ。

私は、久振りに樗牛一葉の遺著を讀んで、作品の内容には、左程重い價値を置かないのに關はず、久振りに青春の書を読んだ感じがした。

次に、長谷川二葉亭の「浮雲」を通讀した。第一編を讀進むと、これが明治二十年頃に現はれたのかと驚かされた。これは單なる青春詠歎の書ではない。悠々たる人生がそこに現はれてゐる。當時の社會相が、多少の稚氣があつても、そこに活寫されてゐる。第二編も引續いて面白かつた。しかし、第三編になると、前とは打つて變つて氣抜けがしてゐるのに驚かされた。クド〜とだら

しないこと甚しい。この間の消息は、内田魯庵氏が「思出す人々」のうちに詳しく書いてゐたやうに思ふが、兎に角、「浮雲」は明治文學中の不思議な産物である。第二作「其面影」は凡庸である。その書出しが、「浮雲」の第一とソツクリ同じいのが、何か深い意味があつてわざとさうしたらしくもないので、呆れた。二十年目に創作の筆を執つたのに、第二作は第一作の焼直しのやうである。「平凡」だつて左程取立てて云ふべき作品ではない。二葉亭は人物として明治の文學者中最も尊敬すべき人で、その一生の行動には學ぶべきところが少くないが、作家としての才能は甚だ乏しかつたのではないかと、私は以前から疑つてゐたが、今度ますますその疑ひを深くした。

獨歩全集をも今度とところ／＼讀返したが、獨歩の小説は、今なほ見褪めがしない。無器用なところや生硬なところは目につくが、決して陳腐な感じはしない。「牛肉とジャガ芋」や「悪魔」のやうな、獨歩式人生觀から割出した理窟っぽいものは、今の私には興味がないが、「酒中日記」、「女難」などは相變らず面白いし、「竹の木戸」、「老人」、「疲勞」など晩年のものはことにいい。一葉は天與の才能を伸ばしかけた頃に死んだのだが、獨歩はその作品にますます深みを加へかけて、惜しくも逝去した。

明治文壇の秀才の多くは、それ／＼に持つてゐた藝術的天分を充分に發揮しないで死んだのである。彼等の早世の重なる原因は貧乏であつたことだと思ふ。

島崎藤村氏は、幸ひに、貧乏といふ恐ろしい重石のためにも押潰されないので、進み得られる限り自分の道を進んで來た。一葉や樗牛などと調子を合せて青春の悩みを唄つた時代から歩を進めて、いろ／＼な作家や思潮と道連れになつたり離れたりして、ついに「新生」にまで達した。

私は「若菜集」以來氏の著作の愛讀者であつた。現在の日本の文學者のうち、藤村氏に對してはつねに仰見るやうな感じをもつて見てゐる。明治以來のすべての文學者について云つても、藤村氏には最も頭の上がないやうな感じがしてゐる。これは私の有つてゐる迷妄の一つであらう。私は氏は反對の道を歩いてゐる人間であらうし、氏の作品に必しも一々感心してゐる譯ではないのだから。……私は、この「時評」の筆を執つてゐる間に、藤村全集中の重なるものだけでも、年代を追うて讀返してよく考へて見よう。

私は、先日、小諸へ遊びに行つた。新聞に噂の出てゐた藤村氏の「詩碑」を見ようと思つて、古

城趾の懐古園へ上つたが、「詩碑」はまだ立つてゐなかつた。それで、干賊のために細々と流れてゐる千曲川を俯瞰したり、淺間山を顧みたりして、輕井澤の假寓へ歸つたが、不在中に、山崎斌氏の新著「藤村の歩める道」が届いてゐた。これが一日早く手に入つてゐたら、小諸の田舎町が詩趣を帯びて、もつと面白く見られたであらうと思ひながら、寄贈の書物を一讀した。これは藤村全集十ニ卷の忠實なる解説である。作者自身が小説の形を取つて、自傳を書き續けてゐるのだから「藤村傳」は、他の作家の傳記よりも書易いに違ひないのだが、山崎氏は私心を挿まず、要點をよく取入れて、なだらかに書流してゐる。著者の筆使ひも藤村氏に甚だ似通つてゐる。しかし、原作者の著書を根據とした忠實な解説ではあるが、あまりに平面的で、底が淺い。原作を浮上らせる影がついてゐない。この「藤村傳」は著者の目的がそこにないのであらうから、この新作はこれでいいとしてもつと時代の背景を濃厚に描いて、かういふ作家かういふ作品の現はれた所以を討究し、個々の作品についても、もつと進んだ批判を加へたものをも私は讀みたい。

### 青野氏・岸田氏・谷崎氏

ある一部の批評家の藝術觀を代表してゐるらしい青野季吉氏の「解放の藝術」を讀んだ。詩もなく警句もなく、自己の體驗の浸出たところもないが、文章はキビくしてゐて、一通りの條理は立つてゐる。しかし、所論が單調で、骨と皮ばかりで、豊富な肉がついてゐないから、いくつものに分れてゐる題目を讀續けるのが困難であつた。同じく文藝批評家といふ部分けに屬するにしても、高山樗牛などとはまるで柄が違ふ。

私は、樗牛の評論を青野氏に比較して、時代思潮の著しい變遷を感じた。樗牛は明治三十年前後の文學者に對して「時代精神」捕捉の必要を強調し、青野氏は我々現今の作家に對し「時代の苦悶」の著目の必要を指示してゐる。用語の上から見ると、明治大正兩期の二人の批評家の立論が符節を合せた如くであるが、内容は餘程相違してゐるらしく思はれる。「時代精神」と云ひ、「時代の苦悶」と云ひ、批評家自身は何を意味してゐるのか、甚だ茫漠としてゐるのであるが、私が努めて討究した

ところによると、樗牛の狙つてゐるところはかういふことであるらしい。

彼れ曰く、「吾人は敢て今の小説家の多くを目して時代の精神を解せずと言ふ。吾れ時代を解せずして、却つて時代の吾れに背けるを詆る。抑々何等の厚顔ぞ。沙翁ゲーテにして是を言はば、吾人尙ほ是を恕せん。誰れか今の紛々たる小説家の口より是の如き大言を聞くに忍びんや。試みに今の時代を見よ。吾人が活動の氣勢は日に昂り、國民思想を擧げて方に一回轉の機運に迫れるの事實を見る。所謂元老は政治界に於ても、學藝界に於ても、漸く凋落し去らんとする也。政治教育の社會に於ける日本主義と國家主義との争ひは、國民道德の變遷に伴ふて將に一生面を開かんとしつゝある也。社會道德にありては、法治機關の充實によつて促されたる權利思想の發達が、從來の倫理と漸く乖離の實を表はし來れるを見る也。宗教と國家との關係は、改正條約の實施と共に將に新面目を見むとする也。哲學界には、純理哲學的傾向漸く退滅して、社會的教育學的的研究漸く増進し來らんとする也。凡そ是等の事實は、將來の國家的人文に向つて、如何の革新を豫約せんとする。明治の歴史は改革の歴史なり。而して今や三十年にして再び大飛躍の時機に際會せるの觀あるを見る。知らず我が小説家は這般の事實に對して如何の考察を遂げたる乎。是の社會風潮の急轉過渡に際し

て、何ぞ獨り文學界の冷々淡々として相關せざるの甚しきや。文壇衰頹の原因實に茲に存す」

樗牛のこの所論には、當時の時代相の一斑が概括されてあるが、それによつて見ると、彼れは、日本主義と國家主義の争ひを描けと云ふのであらうか。權利思想の發達を描けと云ふのであらうか、青野氏などは、「日本主義と國家主義の争ひ」のかはりに、「資本主義と社會主義の争ひ」を取扱へよと云ふのであらう。時代の思潮は變遷してゐる。しかし、樗牛は評論に於てかういふ要求を出して、作者に迫りながら、彼自身小説の形に於て筆を執つた時には、年少の頃の「瀧口入道」の如き、稍々長じてからの「わがそでの記」「清見瀉日記」などの如き、今なほ青年讀者の胸に觸れるやうな感傷的純情的心境を露出してゐるのである。彼れの高唱した「時代精神」は、それ等の作品には少しも現はれてゐないのだが、しかしそこには詩があるのである。彼れの持つて生れた藝術的天分が自由に現はれてゐる。

ところが、青野氏には、全く詩を缺いてゐる。樗牛ほどでなくても、人類發生以來、男女とも青年時代には心す多少は有つてゐる筈の詩を缺いてゐるやうである。私は青野氏の文章は、今座右に置いてゐる「解放の藝術」以外には、一二の論文を讀んだのに過ぎないので、他に氏の名を帯びた

どんな作品があるか知らないが、この一巻を読んで、氏には、私が数十年の間に觸目し翫味した古今東西の藝術家が、それ／＼に有つてゐたやうな詩魂を少しも持つてゐないことを推察した。氏がかういふ論文以外に、傑れた藝術品を産出してゐないことは、讀まずとも推して知られるのである。私は必しも氏の人間的價値を低下せんためにかう云つたのではない。傑れた藝術品を作り得ないと云はれても、氏は決して憤慨しないで、却つてそこに誇りを感じるであらう。萬一私の斷定に憤慨するやうであつたなら、氏はまだ不徹底なのである。傳統的の腐つた殻がついてゐる譯なのである。

私が「解放の藝術」について、多少の感想を述べようと思つたのは、この最近賣出した評論家の持つてゐる眞面目な意氣込みに心を惹かれたのと、私が多年ひそかに持つてゐたある淋しい思想に何處となく觸れる氣持がしたからであつた。「詩を作るより田を作れ」といふ諺があるが、それも一面の眞理である。由來、宗教慾と藝術慾とは、古來人類の心に深く萌してゐる迷妄とも云ふべく、宇宙人生の眞相をありのままに見ることを妨げてゐるやうに思はれる。私は、かういふ迷妄から脱却して、美しい霞を拂拭して、森羅萬象を見たいと思ふことがある。……藝術蔑視觀、文學無

用論がたび／＼萌して來て、わが過去の文學生活は愚かなる努力であつたと、心淋しく感ぜられることがある。青野氏の如きは、私ほどにも宗教と文學との迷妄に捉はれてゐないらしいので、その所論を押し進めると、どうしても、文學無用論に走らねばならないのだ。私の如く長い間迷妄に彷徨してゐたのでもなく、また天性藝術慾の薄いらしい氏は、無用の長物である筈の文學などには唾を引掛けて、自己の天性に適した他の方面へ向つたらいいやうに思はれる。自己批判の目のあるらしい氏が、さう痛感しないのは、不思議である。實際運動家が「藝術運動なんて騒いで見たところ、何になる。要するに紙上の革命の類ではないか。そんなものが階級闘争の實際戰場で何の役に立つものか云々」と云ふのを氣にして、藝術評論の仕事を棄つるに躊躇する申譯をしてゐるが、私はこの未練くさい不徹底さを不思議に思つてゐる。氏もまた文學青年らしい夢から脱しないのであるか。諸種の生産事業を起すに當つて、資本家が頭を使つていろ／＼割策して、労働者を驅使して激勞させ、利益の大部分を自己の懷中に收めるのは陋劣であると憤つてゐる氏等が、藝術運動の易きにくのはどういふ譯であるか。

氏は、「藝術は、少くとも起るべき「藝術」は、「享樂階級の所産」でなく、「階級的麻睡の役に立つ

もの」ではない。「享樂と麻醉の籠つた」何とかでない」と未練らしい言譯をしてゐるが、由來藝術は有閑時の所産であつて、假りに氏等の抱ける空想的新時代が現出したら、楽しく唄ひ楽しく踊り、原稿料を目當てに油汗を出して文を作つたりしないで楽しんで筆を執り、衆と共に藝術を享樂すべき筈のものではないか。今日にしても藝術に享樂分子の添つてゐるのは當然である。そして、古來の傑れたる藝術には多少麻醉的文字の含まれてゐないものは絶無である。原始時代にでもいい聲で唄を唄はれると、聽者は恍惚としたに違ひない。野蠻人にいい唄を聞かせるとそれに聞惚れて、首を加ねられても恐れないと、マコーレーがミルトン論に書いてゐるのを、學生時代に早稲田の講堂で學んだことがある。美しい詩歌、巧な文章、あるひは名畫音楽に接した時には、現代の人間でも麻薬にかかつたやうに、心酔し恍惚とし夢心地になることが多い。

青野氏がそれを否定するのは、藝術的迷妄を持つてゐない證據ともなすべきもので、その點で私は、氏に對して興味を感じるのだが、しかし怪しくも、藝術論の作業に執着を持つてゐるらしい氏は、「それは自分などが時々刻々忘れる暇もなく待設けてゐる新時代が出現した時には、藝術も享樂であるべきであらうが、目下奪鬪混亂の時世だから、それどころでない」と云つて、「時代の苦悶」

「人間の苦悶」を藝術に結びつけるであらうが、いろ／＼な苦悶も、藝術で取扱ふ時には、麻酔的魅力があるのだ。ストリンドベリーの男女暗闘の悲劇を見ても、チエホフの絶望の淋しい芝居を見ても、あるひは、トルラーやカイゼルの傑作を見ても、自己の影周囲の姿をそこに見て暗然として溜息を吐いても、觀客の心は、棘々した階級闘争の感を起させられイラ／＼させられるのではなくつて、藝術的感激——麻酔力を感じしめられるのである。

二葉亭四迷は、輕卒に時代の流行に雷同せず人の煽てに乗らず、絶えず自分から省み自から思ひを凝らす人であつた。そして、「文學は男子一代の事業とするに足らず」と云つた。彼れは深く古來の文學に通じてゐた人であるに關らずさう云つた。彼れの談話に曰く、「私はまあ懷疑派だ。第一論理といふことが馬鹿々々しい。思想の法則は人間の頭の上、思想を整理するだけで、それが人間の眞生活とどれだけの關係があるか。心理學上人間は思想だけぢやない。精神活動力の現はれ方には情もあれば知もある。それを思想だけ整理しても駄目ぢやないか。……だから識覺の上のほつて來る思想だけぢや、到底人間全體の型は付けられない。……たゞ手探りにやつて見るんだ。……人生々々といふが、人生とは一體何だ。一個の想念ぢやないか。今の文學者連中に聞きたいのは、よ

く人生に觸れなきやいけないといふその人生だ。作物を読んでこりや何となく身に浸みるとか、こりや何となく急所に當らぬとかの區別はある。しかしそれが直ちに人生に觸れる觸れぬの標準となるんなら、大變輕卒なわけぢやないか……」

その頃批評家仲間に流行してゐた「人生に觸れる」とか「觸れぬ」とかの藝術的迷妄に、彼は捉はれてないで、おのれの途を進まうとした。青野氏の如きも、男子一代の事業を文學以外に求める氣になれないのであらうか。

二葉亭も今日に生きてゐたら社會運動に左袒してゐたかも知れないが、しかし、彼れは藝術上の虚名に物欲しげな目を向けてアクセクしなかつたであらう。

私が青野氏の所説と一味相通じてゐるのは、文學無用論であつて、それについては語りたと思ふ。

私は、岸田國士氏の翻譯は、ルナルの「葡萄畑の葡萄作り」など二三を読んで、現代佛蘭西文學の一端を味つた。氏の翻譯は巧妙である。「命を弄ぶ二人の男」その他二三の脚本をも読んで、氏

獨得の輕快味を面白く感じた。氏の作品は、ある一部の若い讀者に喜ばれてゐるらしい。私は、今回「解放の藝術」を読んだあとで、岸田氏の「言葉、言葉、言葉」を読んで、同じ時代に生まれて、年齢も似通つてゐるらしいのに、二氏の心のあらはれが、かうも違ふものかと、二つの書物を机上に並べて興味を感じた。永井荷風氏の佛蘭西物語などに見られるやうな情熱が通つてゐなくつて、濃厚なる描寫もないが、輕快で淡白な詩趣はある。思はせ振りの氣取りが鼻につくところもあるが一部の青年にはかういふところが悦しがられるのかも知れない。私は「役者の妻」などの佛蘭西役者物語、邑里劇壇の話、「傳説より」などを喜んで讀んだ。

谷崎潤一郎氏の「赤塚氏の話」(改造所載)を讀んだ。未完ではあるが、前編だけでも作者の本領はよく解る。女子の肉體の研究とその描寫とは、氏の作品に於ては珍らしいことではないが、今度のはことに丹念である。頭のとつぺんから足の裏まで、全身を残る隈なく索つた上に、甜めずり廻つたやうな感じがする。人生に關する諸般の研究のうち、異性の研究は最も面白いものの一つであらう。餘計は精神的迷妄に累はされないので、肉體のみ翫味して足れりとしてゐれば、人間はそ

れでいい譯であるが、谷崎氏のこの作品などには、以前のものに比して、暗い影が切實に差し加かつてゐる。後篇では一層それが濃く現はれて來るのではあるまいか。……作者自身の肉體が衰へたためであらうか。年齢のせいであらうか。花鳥、風月、山川、草木の享樂は、年とともに趣味をまし風流の錆びの添はつたりするものだが、人間が人間を翫賞するには、不變の興味をのみは許されない。ままたらぬ浮世である。

「新潮」合評會も、八月號所載の分は、この頃になく出來榮えがいい。いくつかの戯曲についての諸氏の意見には聞くに足るものが多い。戯曲が小説よりも劣るとは、今なほ文壇の定論のやうになつてゐるが、この頃の有様では、必しもさう斷言は出來ないと思ふ。

### 輕井澤所感

私は六年前、大正九年の夏季三月間を輕井澤で過した。六月一杯滞在してゐた伊香保から移つて來たのであつた。その前年の秋に東京を引揚げて歸省して、半年あまり内海に沿うた漁村に蟄居してゐたのだが、新緑の頃、故郷の家の住みにくさに堪へかねて、またも東京へ出ることにした。借家拂底のために住居を東京に求むることが難かつたので、止むを得ず山上の生活を營み、輕井澤には、十月のはじめまで腰を据ゑてゐた。私はその時この土地で「毒婦のやうな女」を、一月半もかかつてコツ／＼書いた。山上の燈火が一つ／＼消えて、避暑客のすべてが高原を去つたあと、尾花に圍まれた小さな家の中で、弱り行く蟲の音を聞きながら、毛布などにくるまつて、茫然として過した夜が多かつた。

私は、何時までも野中の一軒家にゐる譯には行かなかつたので、東京へ下つて住家捜しに取掛つた。その時C社を訪問すると、暫く耳にしなかつた文壇の雑事が自から話題となつた。



「この頃は、新作家が幅を利かせ出して、原稿料も大分せり上げるやうになつたんですね」と、私は云つた。

「しかし、この頃の若い方は、あなた方がはじめ文學をおやりになつた時分とは、意氣込みが違います」と、××氏は、新作家の全心的努力を推稱した。

果してさうであらうかと、私は疑つたが、兎に角、文壇は一變化したらしく、幾人かの新作家の名は雑誌の上に輝いてゐた。そして、一年足らずの私の不在中に、原稿料が少くも以前に倍加するやうになつてゐた。昔から貧乏文士の綽名をつけられて、緑雨の所謂「箸は二本筆は一本」の歎息を洩してゐた我々の仲間も、やうやく世間並の生活を営み得られるやうになつた。

爾來六年、雑誌の数はますます殖え、出版書類も、世の不景氣に關はらず、ますます數を増してゐるやうであるが、新たに頭を持上げて萬人の注意を惹くやうな作家は、殆んど現れなかつた。時代は徐々に變遷しつつあるのだが、文學藝術の方面では、紅葉の出た時の如く、一葉や樗牛の出た時の如く谷崎潤一郎の出た時の如く、あるひは、六七年前に有島武郎その他の數氏の出た時の如く、新人が突如として華々しく舞臺に現はれて、觀客をアツと云はせるやうでなければ面白くないので

ある。古來文學藝術に傑れた人々の多くは、自己の華やかな名聲に歡喜した。志を立てて文藝の道を進む人間は、由來常人よりも名譽心に富んでゐる筈である。……しかし新代の日本の青年作家は、過去數千年間の東西の文學藝術の士とは天性を異にし、かかる名譽心を眞に空虚と觀じてゐるのであるか。商業雑誌」などを眞心から尻目に掛けてゐるのであらうか。

私の高原獨居の感想は果てしが無い。豫定の紙數が超過したから此處で筆を擱く（八月一日輕井澤に上）

## 追加「自己辯護」

先日、寄贈された國民新聞の切抜きを讀むと、それには近松秋江氏の「光秀と紹巴」評が出てゐた。史實の相違などを舉げて、私の作品を非難してゐた。私があるを書いた時には、近松氏の批評の下されることは豫期してゐたので、小山内氏などから寄せられた好評はむしろ意外とするところであつた。

私は、これまで三種三様の違つた態度で小史劇を試作したのに過ぎないので、どれに對しても不満を抱いてゐた。「勝頼の最後」について、上司小劍氏は、今の史劇作家の空想の貧弱なことを冷笑し、昔の歌舞伎作者は、勝頼を水際立つた美男の花作りなどにしてゐると、その突飛な思付を激賞してゐた。私が見た團十郎晩年の演技中最も感心した一つである。「愛宕の旅館」では、光秀はおどおどしてゐる松助の紹巴を一刀に切棄てた。

で、國民新聞の切抜きを讀んだ時には、當然現はれるべき批評として、たゞ見て過ぎたのであつ

たが、今日、大磯から廻送された中村吉藏氏主宰の「演劇研究」八月號を見ると、秋江氏は先日と同様の筆法で、「光秀と紹巴」評を寄稿してゐる。私は二度續けて意見を聞かされたので、何とか返答をしなければならぬ破目になつた。

私は、小説であれ戯曲であれ、自己の作品について、隔靴搔痒の物足らぬ感じを、つねに有つてゐるので、大抵の非難は甘受するのだが、しかし、自己辯護を企てたなら、どんな愚作でも、徹頭徹尾辯護し得られないことはない。

私は秋江氏の據つて立つところの「野史」は讀んでゐないが、この歴史は、日本外史などの種本となつてゐるほどの比較的信頼すべき書物であるらしい。私は、「嬉遊笑覽」に引用された、貞徳の「歌林雜話」の一節を讀んで、紹巴に對する一面觀を知つた。それには、彼れを「剛情な男」として略々「野史」に似た人物評を下してあつたと、今記憶してゐる。私が歴史を書く氣であつたら、「野史」や「歌林雜話」を根據として、紹巴を取扱つたであらう。それどころか、光秀は愛宕の連歌興行を終へると即日龜山へ歸城したのが、史實として確からしいので、その點から云つたならあの戯曲は最初から成立の可能性を有つてゐないのだ。しかし、「改正三河後風土記」にある、光秀と

紹巴が愛宕に同宿したといふ一説に興味を感じて、そこに創作的空想を起すと、あとは作者のものである。作者は紹巴を提げてともに冒險的戯曲の途を進むのである。私は連歌師紹巴をある藝術家氣質の一人として、その眼光や態度を取扱つた。「野史」に概括的に記された紹巴の「資性勇猛」の説は、多分正しいので、彼れについては記録に徴すべきものが甚だ乏しいやうだから、私の紹巴は私の空想裡の紹巴に過ぎないかも知れない——創作としてはいいといふ説は立派に立つのだが——しかし、「後風土記」の記事、あるひは「川角太閤記」の記事を、興へられた暗示として、連想を逞らすると、「野史」などの表面的人物評とは違つた生きた紹巴が、私の戯曲によつて髣髴として描かれてゐるのでないかと思はれる。最も信頼すべき史料である「川角太閤記」によると、紹巴は光秀滅亡のあと、秀吉の怒りを買ひ、それを恐れて三井寺の山林へ逃げて蟄居してゐた。資性潤達な秀吉のことだから、あとで怒りを解いて、紹巴を召寄せた。それは紹巴が曾呂利式部問として遊び相手とするに面白かつたためであらう。甫庵の「太閤記」によると、法眼の肩書を貰つてゐる紹巴は、秀吉の吉野の花見に扈從して、衆とともに和歌をつくつたりして主君の御機嫌を取つてゐる。秀吉を恐れて三井寺の山林へ逃げた紹巴を捉へて、光秀を恐れて丹波の山林へ逃げさせるのは、創

作上の取扱ひとして、彼れの人間の人性を無視した譯にはなるまい。紹巴が本能寺の變事の際に、二條城の側を通つてゐたとか、あるひは、小栗栖で紹巴が顔を出すのは變だといふやうなことは、（これは秋江氏が云つてゐるのではないが、飽くまで史實に拘泥すれば、これは最も大いなる出鱈目であらうが）此處で眞顔で辯解する必要はあるまい。かういふ史實と史劇との關係觀を押しに行つたら、日本の舊劇は云ふまでもなく、皮相で、しかもその皮相の點でさへ極めて不確實な團十郎の活劇でも、シヨウなどによつて時代無視の作品として蔑視されゐる沙翁の史劇でも、そればかりでなく、シヨウ自身の史劇、最近の「聖ジュアン」でも、史に托して自己の胸臆を描いたストリンドベリーの傑作史劇「グスタブワサ」でも、古今の史劇といふ史劇はすべて雜倒されるべきである。秋江氏の讚美してゐる岡本綺堂氏の作品の中では、「小栗栖の長兵衛」には、私も猿之助の所演を見て興味を感じたのであるが、あれだつて、嚴正なる史實の上から批判したら、私の戯曲以上の出鱈目であらう。「描き足りない」とか、「光秀の懊惱に力が足りない」とか云ふやうな、戯曲の出來榮えに關する秋江氏の非難に對しては、私は一言の申開きも出來ない。作者自身、決して描き足りたとしてゐないのである。

私は試みにあの三様の史劇を書いたので、史劇について、いくらか自得するところがあつた。他日、改めて新たな史劇に着手することがあるであらう。なほ、私は、この「時評欄」を受持つてゐる間に、わが戯曲観を書きたいと思つてゐるので、秋江氏などの所説についても、その時に論及することしよう。旅中參證すべき書物が一冊もないので、ここでは單に紹巴に關連した斷片的辯護を試みるに留めて置く。(八月六日、輕井澤にて)

## 島崎藤村氏について

私は輕井澤へ着いて間もなく、近所の空別莊を見て歩いたが、それ等の別莊のガラス窓には、古新聞が貼られてあつた。風雨に曝されて黄ろくなつてゐる古新聞の日付などを見てゐるうち私はふと長野のある新聞の文章に心を惹かれた。それは近所の小諸の事を書いたものであつたが、その中に、「小諸といふと、我々は藤村氏の筆で現はされたその土地を心に浮べる。我々は知らず識らず藤村氏の目を通して小諸を見せられるやうになつてゐて、有りのまゝの小諸といふ土地は、最早見られなくなつてゐる」と書いてあつた。

私は、そこに傑れた藝術家の偉力を感じた。土地の印象ばかりではない、ある藝術家の筆に動かされて、我々はその傀儡となつて、人生世相を見ることが多い。藤村氏の如きは、さういふ魅力を以つて讀者に働きかける作家の一人であるらしい。あの勿體ぶつた重苦しい執拗な人生鑑賞に、私などは引摺られた經驗を有つてゐるが、先頃、山崎斌氏の「藤村の歩める道」を讀んで、現代の青

年にも、藤村宗信徒の少くないことを察した。

今度久振りに「若菜集」「落梅集」などの含まれた「藤村詩集」を讀返した私は、新たに「千曲川のスケッチ」を讀んで、作者がこの山國の自然と人事とを、濃淡さまざまの繪として描いてゐるのを見た。この文集には、散文詩と云つていゝやうなものが多かつた。氏の小説の材料をいくつもそこに發見することも出來た。

引續いて、私は、「春」と「家」と「新生」とを、三日がかりで讀んだ。氏が詩から散文に移つた時の最初の長篇で、明治文學史上劃時代的作品とされてゐた「破戒」は、着想にも文章にも以前の文學に見られない清新なところがあつて、相當に面白い小説であるに關はらず、まだ作者が自分の藝術についての方針の定まらない時分のものであつた。新時代の文學者としての藤村氏の事業は「春」からはじまると云つていゝのである。態度があしこで極つた。しかし「破戒」あるひは、その前に作られた「水彩畫家」などの短篇の方が却つて、「春」よりも藝術として傑れてゐるばかりでなく、あの調子で創作の道へ進んで行つた方が、「春」によつて極められた道を取つたよりも、詩人藤村氏の天分を充分に發揮するに相應はしかつたのではないかと、今の私は思つてゐる。

……兎に角、「破戒」と「春」との間に、藤村氏の藝術觀は一變化したらしいが、そこには、「蒲團」などの短篇や幾つもの力の籠つた論文によつて、「自己解剖」「現實暴露」「無技巧」などを、文壇の問題として持出して、人々の視聽を集めた田山花袋氏の感化があつたのではあるまいか。單に花袋氏の感化とは云へないにしても、時代の風潮が藤村氏をも動かしたのであらう。

あの夢のやうな詩を振棄て、有りのままの現實を見詰めようとした藤村氏の努力の苦しさを、私は氏の一生に於て見つけた。氏は、藝術に於ても人生に於てもつねに「艱難の道」を辿つて來たやうに、ともすると詠歎してゐるが、それは、氏が飽きもせず書續けた自傳小説を讀むとよく察せられる。氏は事物を苟くもしない人であるから、自國の傳統をも人一倍重んじてゐる。芭蕉西行一茶などは云ふまでもなく、「文學に現はれた國民性（飯倉だより参照）」によつて知られる如く、前代の人々の所行に一々敬意を寄せて、そこに深い意義を見ようとしてゐる。源氏物語をも推稱してゐる。外國の作家についてもさうであるし、私は氏の感想を讀んで、氏が内外の文學者から受けた重荷についても考へさせられた。書物を讀んでも、讀んだものが筒抜けに消えてしまふやうでは詰らないであらうが、藤村氏に於て見る如く、重く苦しく心に停滯してゐては苦しいだらうと思ふ。

中澤臨川氏は、「家」の序文に於て、作者をツルゲネーフに比較してゐる。「生活の状態から感情の發露までよく似てゐる。作風について見ても、兩者ともリアリストでありながら、心底は詩人である。その作物は努めて平明に實人生の描寫を狙ひ、九分までは眞を以て讀者をうなづかせるが、残りの一部は感情で補つてゐる。それが缺點でもあれば特徴でもある。一方から云へば徹底しないといふ譏りがある」と云つてゐる。これは、當を得た批評のやうであるが、「眞」と「感情」とを別にしたところに、異論を挟み得られるし、「家」以後の藤村氏は、ツルゲネーフとは餘ほど色彩を異にしてゐるとも云ひ得られる。淺間の山麓で教鞭を執つてゐた時分の氏は、「獵人日記」などによつて、自然を見る目を開かれたらしいことは察せられるし、「破戒」の着想が「罪と罰」に負ふところのあることは、明かに分つてゐるし、「春」の書出しは、ツルゲネーフの「處女地」の開卷の描寫からヒントを得てゐるやうに思はれるが、「家」は、作品その者の價值批判は別として、まぜり氣のない島崎藤村の作品である。氏は、「破戒」や「水彩畫家」から進んで行かれる道を通らないで、外界の瑣末な事實に拘泥したやうな自傳體小説の道を通つたが、「家」を完成するに及んで、兎に角、眼界の廣い山上の一端に達したのだ。

「春」も、明治二十年代の、多感多情の青年の一むれを描いたものとして、相當の價值を持つてゐるし、ことに、北村透谷の一面が現はされてゐるところに、私は興味を寄せて讀んだのだが、しかし、あまりに淡々として水の如く、作中の人物をモデルの實名に引直してゞも考へなければ、讀者に生きた印象を與へないほどに、人間が活躍を缺いてゐる。叙事的平面的で、作者の持つてゐる詩によつてところ／＼味付けられてゐなかつたなら、退屈で讀むに堪へられないだらうと思はれる。若い夢を見てゐる青年を描いても、ツルゲネーフのものは、情味横溢してゐる。詩趣が流れてゐる。

この「春」は、朝日新聞に連載されたのだが、當時は、かういふ非通俗の作品があらこちらの新聞に現はれてゐたのだから不思議だ。藤村氏のもものは、たとへ一般向きでなくつても、作者の文壇的盛名によつて讀まれるであらうが、長塚節の「土」が、腰斬の憂き目に會はないで、最後まで新聞に出されたのだから不思議だ。

「家」の前半は讀賣新聞に連載された。當時文藝部を擔任してゐた私が、主筆の命を奉じて、作者を新片町に訪問して寄稿を依頼したのであつたが、幸ひに作者に腹案があつたらしく、容易に承諾

して貰へた。私も讀んだり讀まなかつたりで、無論讀者受けはしなかつた。その前に連載した花袋氏の「生」ほどにも受けなかつたらしい。しかし、主筆の方からは一言の苦情も出なかつた。この長篇連載中、老社長が逝去して、當時駐露大使であつた本野一郎が後を嗣いだ。新社長は、佛蘭西文學に通じてゐるとかで、得意になつて歐洲文學を語つてゐたが、新代の日本の文學については全く盲目であつて、言文一致の懸賞文を募集しようぢやないかなど、時代錯誤の事を平氣で云つてゐた。それで、「家」などの文章は、言文一致として甚だ面白くないものと思つたらしく、新聞を引寄せて、「……三吉はかう云つて」と、一節を私に讀んで聞かせて、自己の言文一致觀を云つた。會話に挿む地の文に、「××はかう云つて」、「かう、××は云つて」と、近來書くやうになつたのは、藤村氏が元祖なのである。

新聞には「家」の前半が出たゞけで、後半は中央公論に「犠牲」と改題されて、二度に分つて掲げられたのだが、それは、作者の方で一時休息するために新聞を斷はつたのか、新聞の方から作者を斥けたのか、當時文藝擔任を免ぜられてゐた私は、その間の消息を審らかにしなかつた。

私はそんなことを思出しながら、今度改めて「家」を通讀した。田山氏とは違つて、藤村氏の

作品は、概して取りつきにくい感じのするもので、「家」も、はじめの方は随分讀みづらかつたが、讀込んでゐるうちに、次第に作中に惹込まれた。をりく退屈して、一目十行の速讀をしたところもあつたが、大體に於て作者の歩む道を、私も隨いて行かれた。いろいろの男女、それ等の人々を環の如くつなげ因縁を保たせる有形無形の家といふもの、暗々裡に變遷しつゝある時代といふものの背景。私は、作者とゞもにそれを見ながらページからページを進んだ。そして、讀終るとゞもにこれは、量に於ても質に於ても、明治以來の大作の一つであると、斷定せざるを得なかつた。……私はこの一巻を机上に置いて、讀んだあとを回顧したが、いろいろの問題が自から私の頭に浮んだ。私自身の過去半生を、この一巻に現はされてゐる人世に見つけようとしたりした。

「家」は、それまでにこの作者の書いた幾つもの短篇を、順序正しく一纏めにしたものと云つてもいい。作者の自傳として「春」に接續して、四十歳前後の壯年期に及んでゐるのだが、内容は前作よりも甚だ複雑になつた。夫妻間の暗闘、生存の苦闘、幾人もの子供の死、親類關係の煩累など、主人公の上についた雑多な事件が、要點を逸しないやうに取扱はれてゐるのだが、全篇から受ける氣持は甚だ陰鬱である。はじめからしまひまで貧乏が附纏つてゐて、金不足のために、「家」の人々

が冴えた生活の送られないのが、一篇の色調を陰鬱にした原因の一つであるが、材料を取扱ふ作者の態度や筆使ひが、我々を陰鬱にする大なる原因になつてゐると、私は思ふ。獨歩や花袋氏の作品には、暗澹たる材料が取扱はれてゐても、こんな重苦しいねばつこい感じが漂つてはゐない。獨歩は筆が冴えてゐる。サラ／＼としてゐる。底が見えないといふやうな感じの作品はない。彼れは自傳小説は書いてゐないのだが、彼れの面目はその作品の上に見え透いてゐる。自然主義勃興當時の幹部のうちでも藤村氏は餘ほど柄が違つてゐる。

氏はかつて、ツルゲネーフの小説には、書かれてある者よりも書かれてゐないところに大切なものが潜んでゐると、これを水面に一端だけを現はした海底の巨巖にたとへたことがあつた。ツルゲネーフにそんな趣きがあるか否か、私は疑つてゐるが、藤村氏には確かにさういふところがある。筆を抑壓して説盡さず、底にいろ／＼なものを潜めてゐるのが、「家」の作風である。この作者は忍耐が強い。

この「家」を形づくつてゐる人々と同じやうに、私なども舊家に育つて、田舎の舊家に付纏ふ因習には接觸したのであるが、私は境遇と性癖とから、「家」にあるやうな煩はしさから免がれることが出来た。

「あなたにしろ、私にしろ、われ／＼兄弟の一生、……いろ／＼人の知らない苦勞をして……その骨折が何に成つたかといふに、大抵身内のものゝために費されてしまつたものです」と、三吉は兄に向つて歎息してゐる。それから、彼れはまた沈んだ眼付をして、「橋本の姉さんがあゝしてゐると、あなたがこの宿にゐると、私がまた、ある二階で考へ込んでゐると、それが、座敷牢の内にもがいてゐた小泉忠寛と、どう違ひますかサ……われ／＼は何處へ行つても、みんな舊い家を脊負つてゐるんぢやありませんか」と、痛切な語を吐いてゐる。

舊い家の桎梏を破つて新しい世界へ出ようとする努力は、隨所にうかゞひ得られるが、傳統の支配を離れることは容易に出来ないのだ。それに、新婚とか藝術上の新事業とか、希望ある生活へと轉換を試みても、そこには、直ぐに暗い影が附纏つて來るのだ。同じくらゐな年輩の三吉と正太との自からなる對照が私には面白かつた。志すところに雅俗の相違があり、無反省と自己反省との相違があり、陽性と陰性ととの相違はあるが、どちらも、舊い家の腐つた沼から匍出して、何處かに清らかな世を迎へようと努力してゐるのは同じことなのだ。ところが、どちらも、希望や努力の愚かさ



を證據立てゝゐるやうにうまく行かないのだ。それで、作者の憂鬱な目は、陰性な人物を取扱ふ場合に見据ゑられてゐるばかりでなく、陽性な人物の動靜を見てゐる時にも、その人物のやがて包まらるべき影を豫想してゐるやうに沈んでゐる。……この憂鬱な沈んだ目を露骨に働かせて、アケスケと無斟酌に筆を揮つたなら、意地悪く見られ、皮肉らしくもなるのだが、この作者は、底に憂鬱を湛へながら、個々の人物を柔しく取扱つてゐる。いかにも人のよささうな一面を見せた親切があるので、藤村愛讀者の多くは、そこに親しみを持つてゐるのであらう。しかし「家」などをよく讀んだら、それは決して人に希望を抱かせる書物ではないのだ。

「春」の結末では、作者は「あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい」と思つて、深い深い溜息を吐いてゐる。どうかして生きようとした、その後の十餘年の生涯が、この「家」に現はれたやうな生涯であつた。作者は、三吉と對照されてゐる正太が、仇なる望みを抱いてゐたまゝ死んで行くのを以て、創作便宜上の一段落としてゐる。そして、三吉は正太に最後の別れを告げたあとで、激しく泣いてゐる。それから彼れは、妻のお雪としめやかな話に耽つたあと、

「お雪、何時だらう……そろそろ夜が明けやしないか」

(かう云ひながら、雨戸を一枚ばかり開けて見た。……屋外はまだ暗かつた)

「家」の最後の句は、作者の心の象徴として用ゐられたのであらうが、これから、「新生」へ移つて行くと、「まだ暗かつた」のでなくつて、「もつと暗くなつた」やうにも思はれる。

「生ひ立の記」櫻の實の熟する頃から「春」に「家」と、一人の作家の連続した自傳小説として讀後に回想すると、艱難の道を辿つた一人の作家の生涯を、有りのまゝに書留めて行つたものであるに關はらず、抑揚あり頓挫あり、伏線あり照應あり、金聖歎に批評された水滸傳のやうに感ぜられるのは不思議だ。作家が意匠を凝らして作上げなくつても、人生をよく見てゐると、自から、そこに、文章の法則と同じやうなものが存在してゐる譯なのだが、人間流轉の生涯を、あとから見て意味をつけて、ある意圖の下にいろ／＼なことが起つたらしくするのは、藤村氏の持つてゐる作風なのだ。同じく「有りのまゝ」を書いた作家とされてゐても、徳田秋聲氏とは餘程違つてゐる。秋聲氏のは批判がないと云へば云へるが、強ひて勿體をつけぬところに、一層多くの自然らしさの感ぜられるところがある。

藤村氏の作風は、實例を挙げれば幾つもあるが、「春」の岸本が坊主頭になつて歸つて詫びるとこ

ろが、「新生」の岸本が髯を剃つて佛蘭西から歸るところと照應してゐる。青年期と壯年期との相違はあつても、同じ人間のすることだから、似てゐるのは當然であらうが、それに對する作者の意味のつけ方が重々し過ぎる。「家」のうちで、三吉がお俊の手に觸れるところなどが、「新生」の伏線として線の太いものなのだ。従つて、「新生」の第十三回を讀んで、突如として驚くのは、讀者が迂濶なので、作者は、その前作に於て筋の一端を水面に現はしてゐたのであつた。

作者は、「家」の作風を説明して、「これは文章で建築をする心掛けであつた。それには屋外で起つことを一切ヌキにして、すべてを屋内の光景にのみ限らうとした。寢床から書き、玄關から書き、夜から書きして見た。川の音の聞える部屋まで行つて、はじめてその川のことを書いて見た」と云つてゐるが、これによつても、藤村氏が創作に際して、見聞し實驗したものを、たゞ有りのまゝにはたから書並べようとはしないで、藝術的趣向を凝らしたことが推察される。不用意のやりつ放しは藤村氏には見られない。

客觀的態度を持して、底には憂鬱を湛へながら、上べは冷靜を装つて、文章で建築を試みた「家」から、「新生」へ轉ずると、そこには、客觀的態度だけでは濟ましてゐられなくなつてゐる。「春」や「家」を隔て、「若菜集」「夏草」などの若い時代の作者の影が、人生のきびしい鍛錬を受けてゐながらもここによく現はれてゐる。上べの「所謂自然主義」風の冷靜は失はれて、作者本來の面目である、純情的諷刺的の持味が、「春」や「家」時代の抑壓を受けないで、自在に出てゐるのである。「新生」上巻の前半、あるひは下巻の後の方は、作者の本領が最も高調に達したところである。作者は描いてゐるのでなくつて唄つてゐるのだ。自己の苦惱を唄つてゐるのだ。

藤村氏は、かつてゾラとフローベルと比較して、「ナ、は、どの章を開けて見ても、獨りで高い聲を出して笑ひたくなるやうなところがある。ボヴァリイ夫人の方は讀むに隨つて笑へなくなつて來る。私ははじめてあの小説を讀んだ時は、途中で恐ろしくなつて、書籍を伏せてしまつたことがあつた」と云つてゐるが、我々が「新生」を讀むに當つても、それに似た感じがする。しかし、「新生」は冷靜なる人生鑑賞ではなくつて、主觀の發露である。苦惱に鍛えられた主觀が宗教的恍惚境に達するほどに高調されてゐる。さういふ點で明治以來の文學で他に全く類のないものである。私は、以前、この長篇が新聞に連載されてゐた時分には、止切れ勝に讀んだのに過ぎなかつたが、今回これを通讀して、少からぬ感動を覺えるとともに、藤村氏の本領は峻嚴なるリアリストたるに非ずして、

マンチシズムの作家たるにあると感じた。あの傑作「家」に比べても、この方がどのくらゐ生彩を放つてゐるか知れない。

## 懺悔文學

「新生」は、懺悔文學と見做されてゐるらしい。作者自身も「懺悔」のために書いたらしい口吻を洩らしてゐる。聖オーガスチン以來、歐洲には懺悔文學が頻りに出てゐるが、これはキリスト教といふお宗旨に關係を有つてゐる。神エホバに向つて懺悔するのだ。キリストに向ひマリヤに向ひ、あるひは一介の僧侶に向つて、罪を詫びるのだ。人間を罪の子としてしまつた宗教の迷妄は甚だしいものである。宗教の迷信の打破された今日でも、宗教的懺悔の氣持は人心に根深く残つてゐる。……日本に於てもさうだ。

しかし、私は、世に謂ふところの神が若し有るとしても、それに向つて決して懺悔すべきものではないと思ふ。他人に害を加へた時に自己の罪を詫びることや、自己の過去の行爲を悔悟することは屢々有るにしても、絶對の立場から云つたら、人間の行爲に是も非もあつたものぢやない。それで、オーガスチンの懺悔録などを今日の目で讀むと、随分馬鹿らしく思はれるところが多い。あんな

な空妄なことに懺悔の涙を流すのは、人間の意力を削ぐやうなものである。

鳥崎藤村氏の「新生」について考へると、その所謂懺悔は、宗教的情調を帯びてゐるに關はらず必竟社會の制裁に對する恐怖に基いてゐる。「オーガスチンなどが恐れてゐた神の影は薄らいで、社會が神になつてゐる。私のやうなものでもどうかして生きたい」ための焦慮煩悶であつて、その恐怖焦慮煩悶が現實の人間苦として我々の胸を打つのだ。「破戒」の丑松が、自分の素性を傍人に疑はれて喰しい目で見られるのに堪へられなくなつて、つひに自分から進んで自己の素性を告白する心情は、「新生」の岸本の懺悔の動機と比較さるべきものである。丑松の方は自分には何の罪もなくつて、社會の因習がいけないのであり、岸本の方は現在の人間社會の道德に違反した自己の行爲に基くのであるが、どちらにしても、社會の悔蔑を恐れ人々に疎外されることを恐れてゐるのに差別はない。丑松の父が素性を「隠せ」と子に教へてゐた如く、岸本の兄も「隠す」ことによつて社會的平和を得ようとしたのであるが、隠し了るに堪へられなくなつた岸本は、棄身になつて、所謂懺悔をした。そして、その結果から起つたいろ／＼な苦難を経て、つひに、自己一人の世界に安住するやうな聖境に達したらしい氣持にもなつたが、それも詩人的の夢に過ぎないので、生きた人間を

支配してゐる本能は、夢を食つて安んじてはゐられなかつた。「人の經驗といふものゝ力なきがその時ほど彼れを嘆息させたこともなかつた。——あれほど寂しい流浪の旅に行つて、異郷の客舎の床の上に跪き、……男泣きに泣いても足りないほどの痛苦を一度經驗しながら、——その經驗が少しも彼れの頼みにならなかつた。彼は新たに同じ事を悲まねばならないやうな位置にその時の自分を見出したのであつた」と云つてゐる。

それで「新生」一卷は、朗らかな新生に到着してゐるのではなくつて、讀了つて憂鬱と本能の執拗さに溜息を吐かされるのだ。迷つた人間が、迷つた苦しみと、迷はない人間では味ひ知れない秘密な喜びとを唄つてゐるので、この懺悔文學に人生の救ひがある譯ぢやない。さう思ふ者のあるのは、懺悔を宗教と連關させて、懺悔をしたら罪が亡んで神に救はれるといふ傳統的空想に支配されてゐるからなのだ。藤村氏自身の「淺草だより」の一節に曰く、「新生は言ひ易い。しかしながら、誰れがたやすく新生に到り得たと思ふであらう。北村透谷君は心機妙變を説いた人であつた。そしてその最後は悲惨な死であつた。新生を明るなものとはかり思ふのは間違ひだ。見よ、多くの光景はむしろ暗黒にして、且つ慘澹たるものである」と、氏自身が豫め、後年の自作を批評してゐるや

うなものだ。

我々は作者の熱情と藝術上の手腕に心を奪はれて、陶醉状態に陥つて讀終るのだが、根本の問題は、社會制裁の恐怖と、本能の強烈とにあるので、その問題はつまりは未解決のまゝ残つてゐる。

「私共はすでに、勝利者の位置にあることを感じますね」と、終りの方で節子は云つてゐるが、我々はそれを文字通りに感ぜられるであらうか。むしろ痛ましく思はれるのではないか。作者は女の臺灣行を壯としてゐるが、私などは、懺悔により解脱した、所謂浮世の勝利者を彼女の上に彼見することは出来ないで、(浮世に悩み疲れた一人の淋しい女の影を、そこに見るばかりである)。

(八月二十日)

## 「嵐」と「元の枝へ」

藤村氏は久振りに、可成りの長さの小説を發表した。「新生」に接續する自傳の一章とも云ふべきもので、この頃氏の舊作を讀みつゞけた私は、「改造」の九月號が今日手に入ると、直ちに「嵐」を讀んだ。老いて行く父親と、ズン／＼伸びて行く子供との關係が、主觀と客觀と融合の名筆でよく書かれてゐる。(子供のない私は、「なるほどこんなものであらうか」と、傍觀的に感心するところが多くつて、作品の中へ吸込まれるところは少かつたとも云へるが)

「嵐」の後で「元の枝へ」を讀むと、明治以來の日本文學もある一面では老いたことが感ぜられる。小説と云へば若い者の藝術とされて、生活でも戀愛でも、若い者の目で見られたもの、若い者の心身を經驗し或は空想したものゝみが文壇にあらはれてゐたのであつた。世路の艱難を経た老人の心境を寫したものは極めて稀であつた。青年である子の立場から父を取扱つた小説は頻りに現はれてゐたが、父親の立場から青年期に達した子供を取扱つた小説は殆んど無かつた。今度の二篇は、自己

の周囲と生活や戀愛についての老人の心境を、精細な觀察を加へて、圓熟した筆によつて叙説し描寫したところに、私は汲めど盡きぬ興味を感じた。平生小説を讀馴れない世上の老人も、これ等の小説を熟讀翫味したら、共鳴することが少くないだらうと思はれる。

「嵐」はむしろ嵐の後と題した方が適切ではないかと思はれ、秋聲氏の「元の枝へ」にこそ主人公の心に嵐が吹き荒んでゐる。あるひは、浮世に老いて疲れた弱々しい人間の、嵐に吹きもまれてゐると云つてもいい。「嵐」の中には、これから成長して世へ出ようとする新しい青少年の心持が隨所に出てゐるが、藤村氏は、それを取扱ふに當つて、書出しの背丈くらべから結末の子供の送別會まで一篇の結構をキチンと調べてゐる。不用意に書流してゐないで、自然に起伏する人生の事實のうち文章の法則を見てゐるのは、例の藤村式であるが、秋聲氏はさういふことをあまり念頭に置いてゐない。私は、「嵐」の中の子供の一人が、自己の運命を開拓すべく、都會を離れて祖先の地へ歸らうとする結末を、「春」の主人公が自己の運命を開拓すべく都會を離れて東北へ赴任する結末に比べて見た。これ等二つの小説の間には三十年の歳月が経過してゐる。あれを思ひこれを思ふと、人生流轉の姿が亡靈の如く私の目先にちらつくのである。しかし、「嵐」の中の「私」が、「その墓地

から起上る時が、どうやら自分のやうなものにも來たかのやうに思はれる」とか、「ほんとうに私達への道が見えはじめた」とか云つてゐるのは、私にはその意味が分らない。

「元の枝へ」の材料は、今春以來、この作者がたび／＼取扱つたものであるが、今度は、微細に渡つてゐるので感銘が深い。近松秋江氏の作品のあるところを思出させるところもあるが、しかし、かれは獨身者の戀情のもつれであるのに比べて、これは、多くの子女を擁し、且つ青年期に達した息子を持つてゐる一家の老主人の愛着の悩みを描いてゐる點で、一層の深刻味がある。「春」や「家」よりも更に深く「新生」に感動した私は、「微」や「何處まで」や「未解決のまゝに」よりも、更に深く、この「元の枝へ」に感動させなければならなかつた。心を取亂した人物の心理と行爲を描寫してゐるが、作者の態度は殆んど取亂されてゐない。作者の持前の藝術上の客觀性は嚴として存在してゐる。父子で女の行衛を捜しに行つて卒倒したところ、その後での父子の會話などは、シエルクスピア全集のある場面に挿んでもいいやうな妙味を私は感じた。(あの十數行の簡潔な父子の會話と簡潔な描寫は、秋聲數十年の作中に比較するものゝないほどに、無技巧の妙境に達してゐるのである)病んでゐる少女に心惹かれながら、捜さずにはゐられない女を捜しに行くところ、偶然

に搜當てた時のよろこび、最後に息子が、女に金を貰つて買つたらしい異色のネキタイを着けて歸つて來たところなど、たくまずして妙を盡してゐる。女も、從來この作者の取扱つた多くの女とは全く種類が違つてゐるので、この一篇を引立たせてゐるが、しかし、この女の描寫にはまだ物足りないところが多い。

私が藤村秋聲二氏の新作に感心したのは、私自身がすでに老境に達してゐるためかも知れない。小説好きの若い男女は、かういふ作品には、多分興味を寄せ得ないであらう。新時代の青年作家もかういふ文學は好まないかも知れない。無論それでいゝのだ。青年作家がそれ／＼にもつと廣い世界に向つて自由に進めばいゝので、これ等の先輩の持つてゐる心境の如きところに彷徨する必要はないのだが、若い人々も、一度かういふ老境の人生記録を熟讀して置いて、他日年を取つた時に回顧したら、多少の感慨を催すこともあるであらう。

先月、樗牛一葉などの青春の書を読んだ私は、今日は、新たに老年の書を読んだ。悠々極りなき人生の一面はかれにも現はれこれにも現はれてゐる。(以上八月二十四日)

秋聲氏の中央公論の「暑さに喘ぐ」をも、私は感興をもつて一氣に讀んだ。これは個人的興味によるだけではないと思ふ。今度の二篇の如きは、以前の作者の茶の間文學の態度が固定してゐたのと違つて、心が動いてゐるので、自然に讀者の胸に迫るものかじみ出て來るのであらう。

武者小路氏の「畫室の主」は、傑作「愛慾」の續篇であるが、これは蛇足だと思ふ。強いて作つたものゝやうに感ぜられるばかりで、前編に含まれてゐたやうな凄味や深味は少しも感ぜられない。中條百合子の「雨後(改造)」は、この作者がたび／＼取扱つた材料を、纏めて詳しく書いたものだが、私には面白くない退屈なものであつた。克明に書いて、文章は調つてゐるが、藝術的光澤は缺いてゐる。かつて書かれた「生活の川(?)」といふ短篇の方がすつとよかつた。あの方に、夫に對する倦怠の感じがもつと潑瀾として出てゐた。

岸田國士氏の「戀愛恐怖病(改造)」を讀んで、私が先づ感じたことは、現代の若い日本の男女は、こんな話を取りかはすのであるかといふことである。岸田氏のに限らないが、この頃のある戯曲には、西洋の小説や戯曲に現はれてゐるやうな技巧を凝らした戀愛會話を作中の人物がやり取りして

ゐる。さういふ経験のない私は、不思議に感じて何時も読んでゐるのだが、しかし、外形の風俗が西洋化してゐるのを見ると、戀のさゝやきも舶來の化粧品で色取られるやうになつたのも當然のことなのであらうか。……私には判断が出来ない。

谷崎潤一郎氏の「白日夢」(中央公論)は、「マンドリンを弾く男」の如く奇異な場面を描いたものだが、あれほどの凄味も感ぜられなかつた。宇野浩二氏の「下女」(中央公論)は、浮世話として気軽に讀まれた。これには、冗漫癖がなかつた。水木京太氏の「仲秋明月」(女性)は、私に取つては、生面の作家の戯曲であるが、これは、雜録見たいで、戯曲的價値は認められなかつた。久保田萬太郎氏の「辰巳婦言」(女性)には、氏特有の味ひがよく出てゐる。この頃私が讀んだ氏の作品のうちでは、最も面白いものがあつた。

あれを讀みこれを讀みしてゐるうちに夜が更けた。「新潮」「太陽」などはまだ手にしないので、それ等にどんな傑作があるか分らないが、雜誌小説も讀疲れたから、これで御免を蒙ることにする。

(八月二十六日)

## 森戸氏の譬喩

「改造」の八月號に出てゐる森戸辰男氏の「鬭争手段としての現代教育」を、この頃になつて讀んだ。所説甚だ明快である。察するところ森戸氏の如きは、現代の社會批評家中最も頭腦の秀れ文才にも富んだ人であらうか。この一篇の主旨を演壇で述べた時には、さぞかし満場の聴衆の喝采を博したことであらう。

私も讀み終つて、論者に對して遙かに拍手を送らうと思つたが、その時ふと、私の心に一つの疑念が起つて、折角この名説から受けた感銘を稀薄にさせられるやうになつた。

森戸氏は、その所説を具體的に生かすために一つの譬喩を用ゐてゐる。その譬喩が一篇の文章に力をつけ面白味を添へてゐるのである。「南洋のある島の一角に小さな氣象臺がヨーロッパ人によつて建てられたことがある。土人はそれを薄氣味悪い怪物であるやうに考へ、酋長は島民に命じて、この異様な建物に近づくことを禁じた。のみならず、彼等は更に容易ならざる一發見をなしたと云



ふ。それは氣象臺の一端から突出してゐる旗竿の先における異變であつた。即ち晝の間、そこに異様な形態の赤籠が吊されるときに、夜間、そこから赤い光が波の上に照す時に、それに續いて恐るべき暴風雨が全島に襲來するといふ容易ならざる出來事である。それで、蠻人は、あの氣象臺や赤い信號が暴風雨を島へ呼寄せて、孤島の平和を破るのだと考へついで、一夜決死隊を組織して、氣象臺を襲撃して、凡ての設備を破壊し、ことにかの憎むべき旗竿と赤籠と赤燈とを微塵に碎いた。彼等はこれで安心だと得意になつてゐたが、間もなく、激しい暴風雨が彼等を襲つた。「果して彼等蠻人は氣象臺の信號が暴風雨を呼ぶものでないことを悟り得たか」

森戸氏は、社會科學者の任務たる社會的氣象の研究と發表とを、かの氣象臺に比し、彼等の發表する暴風雨襲來の天氣豫報に對する當局者の理由なき危険呼はりとは壓迫とを、かの蠻民の心理と行爲とに比してその愚を嗤つてゐる。文明國日本の文相は、天氣豫報の必要を認めてゐる筈であるのに、社會科學に關しては蠻人と同じ考へを持つてゐるのであるかと、現今の階級闘争に關する豫報發表の壓迫を非難してゐる。

私も、思想發表の壓制を非とする點では、森戸氏と略々意見を同じうするのであるが、氏の一見巧妙らしい譬喩には疑問を抱いてゐる。

氏は、暴風雨など自然界の現象と人間の思想や行爲とを同一視してゐるのであるか。氣象學者が赤旗や赤燈を掲げようとも、白旗や白燈を掲げようとも、雨雪風霜は、人間に用捨なく地球上に現はれて來るので、寸毫も氣象學者によつて支配されないのだが、人間もさうであらうか。私はそこに大なる疑ひを持つてゐる。人間は生れて子孫を繁殖させて死滅することは、他の生物と同様であるが、生きてゐる間の行爲や思想は千差萬別である。

私は自分を顧みても、敏感に他の刺戟を受け他の感化を受けてゐることを感じる。少年の頃から一卷の書物を讀んで、直ぐにそれにかぶれた經驗はいくつも記憶に残つてゐる。思想の傳染なんか早いものだ。群衆心理の恐ろしいことは世人周知のことである。最近の長野縣廳襲撃事件だつて、はじめからあんな激しい計劃があつたのではなかつたさうだ。群衆心理で、多數は譯も分らずに雷同して、事が大袈裟になつたのださうだ。人心は動き易くつくられてゐる。

第一、氣象學者と、森戸氏の謂ふところの社會科學者とは、同一の客觀的態度で眼前の現象を取扱つてゐるのであらうか。氣象學者は、天候を有るがまゝに研究するより外に爲方がないので、自

己の力で旱地へ雨を降らし、熱地へ涼風を送らせることは出来ないものであるが、社會科學者は、果して純客觀的態度でゐられるであらうか。同じ豫報を出すに當つて、そこに主觀の色が少しも加はらないであらうか。氣象學者が低氣壓と高氣壓との争ひを研究してゐるやうな純客觀的で、階級闘争の消長を研究してゐるのであらうか。この論文を讀んでさへ、私は森戸氏が一方に左袒し一方を非難してゐるのを歴々と見ることが出来る。

學者でさへさうである。一般の人間が豫報によつて刺戟されることは云ふまでもない。森戸氏の論旨がいかにも正しくあるにしても、風雨と人間社會の現象とを同一視した譬喩は當らないのである。風雨は豫報などに頓着しないで、進路を取る。人間社會は豫報の旗の色によつても左右されるのだ。今まで何とも思つてゐなかつた人間も、豫報に刺戟されて、そちらへ驅けて行つて、社會的暴風雨の勢ひを増すやうなこともあり得るのだ。軍旗が貴重なる所以である。旗の奪合ひもはじまる所以である。保守的政治家が、森戸氏の如き進歩的社會科學者の豫報の旗をも氣にするのは、蠻人が氣象臺の旗を氣にするのとは、心理状態が違つてゐる。それを強いて同じやうに説いてゐるのは詭辯である。

譬喩といふものは概してこんなもので、一時の興味を惹起すだけで、正鵠を失ふことが多い。

(八月二十三日)

## 藤森氏へ

藤森成吉氏の「犠牲」に對して感想を述べた時には、作者の強烈なる反駁を豫期してゐた。そして、私などのまだ知らない新しい藝術觀を、氏によつて示されることが出來て、わが「時評」の研究題目ともなるであらうと豫期してゐたところが、藤森氏はあまりに氣乗りがしないらしく、今日私が手にした「文藝春秋」の「正宗氏の言葉」によると、氏は、言葉咎めの如き態度で、私から云へば、枝葉に渡つて反駁を試みてゐるだけであつた。無論この枝葉の異説を辿つても、根本に遡ることは出來るのだが、相手が氣乗りがしないらしいのに、自分だけムキになつて論じ立てるのは張合ひのない譯であるし、ことに、今月の「時評」はすでに締切期限を過ぎてゐるので、(これは私自身も勝手に極めた期限であるが)簡単に自説を述べるに止めて置かう。「片山に愛の破片をも見せてゐないかどうかについては、別に議論があらう。實際ちがつた批評をしてゐられる人もゐる」と、氏は云つてゐるが、それは私には意外であつた。作者自身がその「別の議論」を受入れて自分もそ

の氣持で書いたといふのなら、傍から何とも云へない譯だが、私はあの戯曲を読んだ時には、作者は、片山に對しては全然侮蔑の目を寄せてゐるのだと感じた。私の読み方が間違つてゐたのであらうか。

それから、私がちつとも普遍的「人類愛」の立場などに立つてゐないくせに他を非難してゐるのを不思議としてゐるが、私の評論をはじめから通讀したら論旨は分るであらう。私は、氏の從來の小説から推論して、氏が他人の些細な窮苦困難にも焦慮するほどに惻隱の情に富んでゐるらしいのに、片山に對して(この人物が天性卑俗を極めてゐるにしても、自己の妻女を他に奪はれた點については、そこに人類共通の苦惱があるには違ひないのだ)は、彼れの惱みを無慚に取扱つてゐるのを不思議に思つたのだ。非難するよりも不思議に思つたのだ。氏も生活難以外の人間苦を認めない譯ではあるまい。私に「人類愛」があるかないかは別の問題で、氏の立場だけについて云つてゐるので、氏の作品は、氏の作品だけで獨立して批評されてもいゝ譯ではあるまいか。

「氏はヨリ多く片山を愛し、私はヨリ多く石川を愛する」と、藤森氏は云つてゐるが、私は片山といふ人物を、決してヨリ多く愛してはゐない。あいふ場合に自分が立つた時の人類共通の惱みを

感じて云つてゐるのだ。たとへば、藤森氏等の憎んでゐる貪慾卑俗なる資本家が、自動車の顛覆のために嶮崖から墜落して重傷を帯びたのを見て、それを題材として、「負傷した人の悩み」を描くに當つて、そこに自己の負傷した時の苦しみを想像して描いたにしても、それが資本家をヨリ多く愛したといふ證據にはなるまい。

「犠牲上演禁止が至當なら、なぜ發賣禁止をも當り前だと云はれないんだらう。……それよりも更に私があの作を世間へ發表したことが怪しからんと、なぜ云はれなかつたんだらう」と、藤森氏は云つてゐた。當然の理窟であらう。しかし「文藝春秋」に氏が摘出した私の説と、私の時評そのものとは、上べの意味は同じでも感じが違つてゐるのだ。氏自身でさへ、「僕の戯曲的解釋に依つて、もし現實の人々に些少でも迷惑の及ぶやうなことがあつたらこんな遺憾はない」と言譯をしてゐるではないか。人情に富んだこの作者は、藝術家として疚しくないに關はらず、そんな世俗的なことをも氣にしてゐたのであらう。「迷惑の及ぶやうなことがあつたらこんな遺憾はない」と、氏が言譯をしてゐるから、「それなら、せめて舞臺へ上すだけは作者の方で遠慮していゝだらう」と、私が差出口を利いたのは、大して不自然ではあるまい。むしろ作者の言葉に調子を合せたやうなものだ。「犠

牲」なら見に行かうと思つたが「愛慾」では見なくつてもいゝと、文壇以外の世間人が云つたといふ噂を私は聞いてゐる。その世間人は、「犠牲」の文學的價值なんか寸毫も考へてゐないので、たゞ例の事件のお芝居だといふことに興味を寄せてゐたのに違ひない。その見物心理を見透してゐたればこそ、私は、「見物は作中の人物を、一々モデルになつた人々と連關させて見るに極つてゐる。そして、作中に陋劣卑俗な人物として現はされてゐる片山の人物は、劇場の建つてゐる都會にまだ生存を續けてゐる筈である。やうやく世間から忘れられてゐる今頃、數年前の事件を舞臺に再現されて、彼れは衆人環視のうちに侮辱を受けなければならない」と云つた。従つて、些少ところではない、大に迷惑を感じるだらうと思つたから、「現實の人々に迷惑の及ぶのを恐れてゐる」作者に、「では、遠慮したらよからう」と相槌を打つたまでだ。作者の本心では、モデルの迷惑などは顧慮してゐなかつたので、ある結末の言譯は、通り一片の辭禮なかも知れない。それを捉へて論鋒を向けるのは三百代言じみてゐるやうにも思はれるが、藤森氏自身、私の全體の文意を吞込んでゐないで、文章の表面の言葉尻を捉へて、小さな理窟を弄してゐるので、勢ひこんなことをでも云ひたくなるのである。「上演禁止」や「發賣禁止」はデリケートな問題で、禁止不禁止の界は誰れにも定め難いもの

であるが、作者自身に、「他の迷惑」を思つてゐるやうなヒケ目があつては強く出られないだらう。……「上演禁止」や「發賣禁止」あるひは、「裸體畫展覽禁止」については、私は、文壇や美術界の諸賢の如く、一般民衆である讀者や觀客の鑑賞力を無條件に信賴してゐないので、それについて多少の自説を持つてゐるが、それは、ここでは長くなるのを恐れて見合せて置く。

私に「人情」「人類愛」の有無「通俗過ぎる」ことなどについては、此處で辯論するには及ぶまゝ。

藤森氏が新進の作家として、最も前途に望みを寄せらるべき一人であることは私も認めてゐる。しかし、作品に漂つてゐる社會思想に感心したのではないのだ。石川の感傷的社會觀は同感して、片山の立場を侮蔑するのは、不思議にも、文壇の人々あるひは多くの文學好の人氣に投ずるらしいので、それが、衆口一致「犠牲」を推稱した一つの理由になつてゐるらしいが、私にはさういふ考へが、甘つたれた考へのやうに思はれるのだ。さう思ふのは、文學者のうちでは私一人で、そこが通俗的である所以であらうか。(八月二十八日、輕井澤にて)

## 尾崎紅葉について

私は、森川町の下宿にゐた時分、ある夜「趣味」といふ雑誌の編輯者であつた西本波太といふ人に誘はれて、二葉亭四迷を訪問したことがあつた。その時の斷片的談話は私の心に深く刻まれてゐて、今も二葉亭の面影とゞもに、それ等の談話が、歴史的興味をもつて思出されるのであるが、その時には紅葉山人に關しても、一言彼れの感想が洩らされたのであつた。

「新しい時代の作者のものを推讃するのはいゝが、そのために過去の作者の價値を無視しなくつてもよからう」と云つて、彼れは、紅葉の小説には、時代の變遷に關はず、紅葉としての獨得の妙所を持つてゐると云ふ意味の批評を述べた。この簡単な評語は、當時の私をして奇異な思ひをさせた。自然主義全盛の時代で、紅葉はじめ硯友社一派の文學は古くさい低級な文學として、文壇の新人にはいたましく蔑視されてゐたので、露國の大文學に熟通してゐる二葉亭の如きは、無論紅葉などの遊戯文字に同感をもつてゐよう筈はないと、私は獨り極めに極めてゐたのであつた。……今か

ら思ふと二葉亭が紅葉の小説に好意をもつてゐたのは不思議はないので、二葉亭はロシア文學の感化を受けて、「浮雲」のやうな異つた小説を書いたり、人生問題に煩悶したりしたものゝ、根柢には紅葉などと似寄つた舊日本の文學趣味を湛へてゐるのだ。二葉亭ばかりではない。もつと時代の若い人々でも、紅葉と似通ふやうな文學趣味を隠然持つてゐることは今なほ舊歌舞伎劇が、何とか理窟をつけながら、喜ばれてゐると同様である。日本人は日本人である。祖先以來の傳統的趣味から全く脱却することは出来ないのである。

○自然主義勃興以來、紅葉山人は文壇的には虐殺されながら、世上の小説好きには相變らず喜ばれてゐたらしい。それも、蘆花、浪六あるひは天外諸氏の小説とは異つて、讀者が各方面に渡つてゐるらしい。彼れと、後年の漱石との藝術とは最も日本人の趣味に適してゐるのであらう。そして、それは必しも通俗呼ばりすべきものではないらしく、鑑識の傑れた文壇の諸氏が、近年紅葉讚美の語を放つてゐるのが、をり／＼私の耳に觸れるやうになつた。藝術に對する毀譽褒貶の變遷は面白い。……數ヶ月前の「新潮」の合評會にも、紅葉や一葉の噂も出てゐて、秋聲秋江の諸氏が紅葉をひどく推賞してゐた。谷崎氏が紅葉を世界的文豪として奉つてゐるといふ噂も出てゐた、歳を取る

と、現在よりも過去がよく見えるものだが、「あの紅葉」の小説がそんなに傑れてゐるのであらうかと、私は疑ひながら、新たに彼れの全集を讀直さうと思立つた。

私は、少年の頃「拈華微笑」を讀んで以來、紅葉山人の作品は殆んど全部讀んでゐると云つてゐる。二三度繰返して讀んだものもある。「隣の女」の如きは、退屈な時にたび／＼取出して讀んでゐる。面白がつて獨笑ひを浮べた。しかし、紅葉の作品に對して敬意を表したことは一度もなかつた。「小説といふものはこんなものであらう。おれには書きたくも書けないだらうが、書かなくてもいい」と、いつも思つてゐた。だから、私が十年も早く生れて、硯友社全盛期に成人してゐたなら、決して小説家として身を立てようなんて、柄にないことを思立ちしなかつたであらう。

明治二十九年の二月下旬「多情多恨」が讀賣に出かゝつた頃、私ははじめて上京して、横寺町の下宿に、所謂草鞋を解いたのであつたが、間もなく、町内の古ぼけた共同門に「尾崎徳太郎」といふ表札が出てゐるのを、散歩の途中か、湯屋通ひの途中に見つけたので、これが、有名な紅葉山人の住所であらうかと疑つて、同宿の友人に訊ねたが、法律書生であつた友人は、そんなことは知らなかつた。數日経つて、田舎の知人から紹介されてゐた戸川殘花翁を、藥王寺町に訪ねた時に、か

の表札について訊ねると、翁は、「それが紅葉の家だ」と答へて、「文學者は皆んな貧乏だ」と、その實生活についていろ／＼話して呉れた。私は、當時文學を志望してゐた譯ではなかつたので、貧乏と文學の關係についてさして感激もしなかつた。

私は文科に籍を置くやうになつても硯友社は好かなかつた。早稲田卒業後二三年の間に、他所ながら紅葉山人の風采に接したことは、四五度に及んだが、敬意を寄せて凝視したことは一度もなかつた。しかし、青春の頃眼前を横切つた、明治時代第一の人氣作者紅葉山人の通人らしい面影を、今思出してみると、彼れの全集を讀みながら、追憶の興味が添つて來るのである。

早稲田卒業直後、出版部に奉職して間のない頃、牛込の明進軒で編輯會議があつて高田坪内兩博士も出席され、會議後晚餐を饗せられてゐると、そこへ、脊のスラリとした瘦男が筒袖のやうな身装で、階子段を上つて來た。扉が開いてゐたので我々の部屋へ目を注いだやうであつたが、ふと高田博士と目を見合せて互ひに目禮した。「尾崎君ぢやないか」と、坪内博士が顧みて聲を掛けた時には、その人は向うの部屋へ入つてゐた。「横寺町の先生はこの頃よくいらつしやるかね」と、高田博士は給仕女に訊ねて、「紅葉といふ人はあゝいふ人か」と、私は意外な感じがして、その書生々々し

た影を心に留めた。當時の私は、十五圓の月給に有りついて、面白くもない文科講義録の原稿集めや校正をやつてゐたので、小説のやうな六ヶしいものを書かうといふ大それた野心を抱いてはゐなかつた。講義録の餘白へ氣紛れに、「文藝時評」を書いたりしたが、無論しつかりした文學上の見識があつたのではないので、空疎な評語を並べたに過ぎなかつた。硯友社系統の作品は大抵罵倒したやうに覺えてゐるが、非難攻撃の依りどころは、彼等に思想がないといふことであつた。實人生について經驗乏しく、藝術の鑑賞力の浅い批評家が、尤もらしい文學批評を捏上げるには、思想の有無を持出すのが一番樂であつて、襤褸を出さず済む譯なのだ。その頃露伴の小説には思想があつて、紅葉のには思想がないと云はれてゐたやうであつたが、露伴にどんな思想があつたのであらう。「一口劍」には「精神一到何事かならざらん」といふ思想が現はれてゐるから、紅葉の「おぼろ舟」の如き、情緒のみ現はれてゐる小説よりも傑れてゐると云ふのであらうか。

二度目に、ちらと紅葉の影を見たのは、赤城下の清風亭で、「高等講談」と稱して、文學者が自作の上品な講談を自演した時であつた。私が聴きに行つた時は、その二回目か三回目かで、江見水蔭氏のあまり面白くない話を聞かされたのであつたが、氏の話の濟みかけた時分に、紅葉が庭から入

つて来て、水蔭氏を招いて一緒に出て行つた。「あゝ紅葉さんが来た」と、私の側にゐた聴衆は、みんなそちらへ目を注いだ。「茶碗割」や「短慮の刃」は、この高等講談会で述べられたので、矢張り誰れのよりも紅葉のが面白かつたらしい。

三度目に、私が紅葉を見たのは、池ノ端の無極亭で、久米八門下の踊りの會のあつた時であつた。私は徳田秋江君など、一しよに出掛けて、坪内博士のほとりで見物してゐたが、その會へは紅葉山人も来てゐて幸堂得知翁と並んで話をしてゐた。そこへ遅れ馳せに鏡花氏がやつて来たが、座席の斡旋をしてゐた中年の女が、「先生のお側へいらつしやい」と云ふと氏は禮儀正しくもそちらへ寄つて行つた。私などのやうに、先生の側で胡坐を搔いたりなんかしなかつた。間が隔つてゐるので、彼等の話聲はよく聞えなかつたが、たゞ紅葉が鏡花氏に向つて、「お前が……」と云つてゐるのが耳に留つた。そして、話は聞えなくても、兩氏の態度を見てゐるだけで、師弟對座の光景が映畫の如く浮んだ。一人が師の態度を崩さなければ、他の一人も弟子の態度を破らなかつた。「青葡萄」に書かれてゐる師弟關係が思出された。

四度目、すなはち最後に紅葉を見たのは、島村抱月渡歐の送別會の席上に於てであつた。私は、開會前から會場の紅葉館に来てゐた彼れが女中から餽見たいな菓子を買つて、それを口に含んで、片膝を立て、坐してゐる彼れを見た。發起人を代表した彼れが送別の辭を述べるのを聴いた。それから、廣津柳浪氏が、當時「無花果」の作者として聲名を博してゐた中村吉藏氏を紅葉に紹介してゐるのを見た。この各方面の重立つた文學者の集つた會場に於ても、紅葉は特に文壇の第一人者らしく、あたりの人々に取扱はれてゐるのを、私は見た。彼自身もそれを當然としてゐるらしく振舞つてゐるやうに、當時の私には思はれた。彼れは文章のためには苦心焦慮し、ことに最後の大作「金色夜叉」のためには天壽を縮めるほどの思ひをしたのであらうが、また物質の不足に悩まされたこともあらうが、自己の名稱は飽くまで楽しんでゐるに違ひない。彼れの作物がそれを證明してゐる。彼れには、二葉亭や透谷や獨歩や、あるひは樗牛なども持つてゐたやうな人生苦を感得したことはなかつたに違ひない。彼れの作物がそれを證明してゐる。彼れは解決の出来ない人生を持つてゐなかつた文學者の一人である。

私は、この一代の才人であつた紅葉山人を、他所ながら瞥見したゞけで過ぎたのであつたが、抱月渡歐の翌年、讀賣新聞に入社したゞめに、彼れに對して多少の掛り合ひがつくやうになつた。私



の入社後間もなく山人は逝去した。彼れは長い間自己の作品を發表した讀賣とは縁を切つてゐたのであつたが、過去の深い關係から云つても、また彼れの文壇に於ける功績から云つても、その傳記や逸話を紙上に掲げるのは、當然爲すべきことのやうに思はれたので、私は主筆に進言して、自分で、その記事を集めようとした。それでまづ柳浪氏と眉山氏とを訪問したのであつたが、二人とも紅葉に關する話は一切避けて、私の力ではどうしようにもなかつた。變に思つて、私の讀賣入社當時に紹介の勞を取つて呉れた石橋思案氏を博文館に訪問して譯を訊かうとしたが、氏は不在であつた。一日驅けすり廻つて何の得るところもなかつたのを忌々しくも思ひ、主筆に對しても申譯がないやうに思つて、社へ歸つたが、すると間もなく、思案氏から電話が掛つて來た。……その時の荒つばい氏の口調は私は今でもよく覚えてゐる。「君は紅葉のことを聞きに來たんでせうが、そのお話は出來ません。君には何も關係がないのでお氣の毒だが、讀賣新聞は紅葉を虐待して苦めたのだから、我々友人は、讀賣には斷じて筆を執らんことに決議をしてゐるんです。無論話をする譯にも行きません」

率直な思案氏の言葉によつて、私は柳浪眉山兩氏が、氣の毒さうな顔をして話を避けてゐた理由が分つた。「さういふ譯なら、此方でも書く必要はあるまい」と、主筆も承知して、私も重荷をおろした氣になつたが、しかし、全然知らん顔をする譯にも行かなかつたので、私の筆で十行ばかりの弔詞を書いて、肖像ととも紙上に掲げることにした。讀賣はあれで済ませるのかと、紅葉に對する冷淡な態度を非難したのもあつたが、こちらが冷淡であつたのではない、先方からさう仕向けたのだ。……兎に角、まだ一篇の小説も書かなかつた前に、明治文壇の第一人者尾崎紅葉追悼の文章を、たとへ十行でも執筆して、當時の文學新聞に掲げることが出來たのは、私に取つて名譽であつた譯だ。

私はかねて、「心の闇」と「多情多恨」とを、紅葉全作中の最も傑れたものとしてゐた。「金色夜叉」の如きは、「不如歸」「魔風戀風」などと同列に論ぜらるべき通俗小説であると思つてゐた。ところが今度全部を通讀して見て、さうとばかりは云へないことを知つた。文學者としての紅葉、人としての紅葉を研究するためには、「金色夜叉」をこそ選ぶべきである。馬琴を研究するには、「弓張月」や、「美少年録」や「俠客傳」よりも、「八犬傳」を選ぶのが當然であるが、「金色夜叉」は紅葉

山人の「八犬傳」と云つていゝのである。……私は今度この未完の長篇を讀んで、たゞに紅葉の文學的技倆を十分に窺ひ得られたのみならず、世上の小説愛好者の心理をも察することが出來た。明治時代の世相の一端をも窺ひ得られたし、もつと廣い人生と文學とに思ひを馳せて感慨に耽つたのであつた。時代精神捕捉の必要を強説した高山樗牛は「金色夜叉」を罵つてゐたが、しかし、この長篇には、日露戦争前の時代の精神や時代の苦悶が、自ら作中に現はれてゐるではないか。作者はそれを意識して書いてはゐないのだが、意識してゐないところに、むしろ妙味があるのだ。今日のプロレタリア文學主唱者が、粗糲な理窟を作中に並べて、それで時代を批判したつもりでゐるのをこそ晒すべきである。

「金色夜叉」について所感を述べる前に、私は彼れの他の作品について、些少の批判を試みようと思ふ。

「新色懺悔」は云ふまでもなく、「伽羅枕」なども、西鶴その他の舊文學をお手本として、一生懸命お化粧をした習作であるが、それ等初期の作物のうちでは、「二人女房」と「三人妻」とがいゝ。「金色夜叉」に到達するまでの紅葉の素質が、この二篇に充分に現はれてゐる。私が今座側に備へてゐる

春陽堂新刊の、「紅葉全集」には、「二人女房」が含まれてゐないので、たしかなことは云へないが、この小説には、あり振れた人情が、分り易く、あたり前に書かれてゐる。平凡この上なしの小説であるが、常識的で健全で、人生世相に暗い影を見ないところが、紅葉の特色であり、一般の讀者が彼れの小説を喜んだ所以である。この小説の現はれた時、依田學海翁が作者に向つて、「甚だ面白い、後生恐るべし」と激賞したのに對して、作者は、「いや、まだ駄目です。四十にもなつて頭に白髪が出るやうになつたら、實の入つたものが書けるでせう」と答へたことが、作者苦心談の中に出てゐた。二十を過ぎたばかりの若年が、學海翁の如き老人をも感動させるやうな小説を書いたことは、今から見て不思議なやうに思はれるが、これは必しも紅葉が非凡な秀才であつた證據にはならないのだ。紅葉は青年の頃にも、當時の一般人が見てゐる通りに人間や世相を見て、道德觀や世間智が俗人と同様であつたから、世の老若男女に受入れられたのだ。二人の女を取扱ふにも型の如く筋を運んで行くのだから、作者も書易かつたに違ひない。二葉亭の「浮雲」にあるやうな深入りした心理に突込んでゐるのでなくつて、腕を見せるのは文章の綾にあつただけなのだ。

「三人妻」なども、徳川時代の文學の連続と云つていゝもので、文章にも着眼にも新時代の色彩の

乏しいものであるが、しかし、「三人妻」は傑作である。緑雨の「かくれんぼ」の比ではない。

私は、西鶴の「一代女」や、荷風の「腕くらべ」や、里見淳の「今年竹」など、溫柔郷裡の消息を傳へた古今の名作を、「三人妻」に比べて見た。「三人妻」には、「腕くらべ」に漂つてゐるやうな哀愁がない。近代的哀愁とも名づくべきものが讀者の胸に迫つて來るのが、荷風の作品をして視友社の作品と趣きを異にさせるので、「三人妻」にはさういつた感じは含まれてゐない。紅葉の年齢がまだ若かつた時分の作であるためであらうが、色つばい興味にのみ驅られてにがい味ひはどこにも加味されてゐない。三美人の風姿をそれ／＼に描くとともに、個性をも書分けたつもりなのであらうが、それは型の如くである。花柳界見聞録たるに過ぎぬ憾みのある「今年竹」の方が複雑な現實味を持つてゐる。……しかし、「三人妻」は、一つの磨かれたる璧である。舊文學傳來の豊艶なる文字で色取つた浮世繪である。西鶴を真似て筆致に斧鑿の痕のある「伽羅枕」よりも渾然としてゐる。かういふ種類の文章としては、徳川時代の小説にも類のないほどの名文である。かういふものを讀むと、紅葉は新時代の先驅者ではなくつて、舊文學に最後の光を放つた名作家と云つた感じがする。それは先代菊五郎が歌舞伎の形式美や情緒を繼承して、舊い世話物役者として最後の光を

放つたのと似通つてゐる。そして、菊五郎は舊技巧家として、最後の一人であつたのみならず、徳川末期の名優にも勝つてゐたやうに想像されるが、紅葉もさうであつたのだ。

「三人妻」などは、文章美に於て、舊作家を壓してゐるが、内容は、「梅曆」や「娘節用」などの人情本と同じなのだ。紅葉の持味は、「三人妻」から「金色夜叉」に至るまで失はれてゐない。「三人妻」の葛城餘五郎は、大成金であつたため、自分の心に適つた女を自由に入れて、色の樂みに耽つて、人生の幸福此處に在りと満足してゐたのであるが、薄給の勤人で、容貌も醜かつた粕壁讓（隣の女の主人公）は、その満足の得られないために焦慮した。この「隣の女」くらゐ、紅葉の主觀を知り、作風を知るに都合のいゝものはない。「媒妁に妻はせられた嫁、好加減に極めた縁談、親などに勧められた女房、そんなのは粕壁讓の最も屑しとせざるところである。……相互に心が知れ合つて、添はう添ひましょ、死ね死なうといふほどの間でなければ、夫婦になるべき必要がない」と云ふのは何も粕壁に限つたことではないので、今日は、これを真劍な戀愛のない結婚は虚偽な結婚であるなど、六ヶしい言葉で言現はすだけの相違であるが、粕壁讓の理想の色調は、「あちらからもこちらからもやいの／＼」と云はれる「唐琴屋丹次郎」となることにあるのだ。作者紅葉は、理想の充たされ

ない粕壁の苦悶を取扱ふのに、歐洲近代の作家及び、その流れを汲む現代日本の作家のやうに眞面目な同感を寄せないで、揶揄し翻弄してゐるのであるが、それに關はらず、紅葉本來の趣味は、唐琴屋の若旦那の趣味と同じ色を帯びてゐるのだ。「何だ男のくせに」と云つた調子で粕壁などを罵倒して、上べに凜としたところを見せながら、内實丹次郎の影に憧れてゐるのは、多數の世人と同様なのだ。本筋では粕壁の悲觀焦慮空想を寫しながら、陰では、その隣りの一室で、「隣の女」お小夜が、その旦那らしい好男子と駄洒落まじりの口説をかはしたり、あるひは情夫の巡查と痴話喧嘩をしたりしてゐるところを描いたりしてゐるのは、現實と理想を對照させてゐるやうなものだ。紅葉の小説が、多數者に愛讀され、今もなほ、可成りの愛讀者を持つてゐる理由の一半はさういふ點にあるのであらう。單なる「梅曆」ではあまりに低級で、普通の讀者の道義觀が満足されない。それで、「何だ男のくせに」といふ凜とした道念を加味しながら、春色「三人妻」春色「隣の女」を書いたのが、學海翁などの通俗的知識階級の讀者にも喜ばれた所以であらう。狂訓亭紅葉である。無論文才に於ては爲永春水などは紅葉に比較さるべくもあらず、永井荷風とても遠く彼れに及ばないのである。

「金色夜叉」を、失戀の悩みを描いた小説とのみ思ふのは淺薄である。間貫一は、紅葉全作中でも類を絶してゐる色男なのである。粕壁讓をして羨望し、垂涎三尺たらしむるに足る幸福人である。讀者の興味の一半はそこにあるので、お宮は雑作なく悔悟して、命を掛けて慕ひ、滿枝は滿枝で、振られれば振られるほど戀慕つてゐる。幾多の青年讀者が、自己を貫一の境地に置いて恍惚としたことであらう。讀者心理から云へば、光源氏も「紅樓夢」の賈寶玉も「一代男」の世之助も、「梅曆」の丹次郎も、及びもつかぬ色男は貫一なので、失戀の悩みを言譯に、終ひまで女に捉へられぬところが、讀者をじらして、讀者の好色的情緒をそゝる所以である。

作中のいろいろな男女のうち、赤檉滿枝は實によく書けてゐる。「三人妻」のお才などよりも一層具象的に、豊艷なる肉體が紙上に躍動してゐるのは、歳とともに紅葉の技巧が進んだ證據である。面白いのは色の口説である。西鶴時代の大名かなものから、「梅曆」時代の舌つたるいところ、紅葉を経て、現代小説のハイカラな戀愛問題に至るまでの變遷を比べて見ると面白い。そこにも時代相が現はれてゐるのである。

長篇の構圖を定める腕前は、紅葉でも得意ではなかつたので、「金色夜叉」も、通俗小説として、

讀者の好奇心を惹く用意はあまり周到でないので、次第にだれて來てゐるのだが、荒尾や滿枝の挿話によつて僅かに興味をつないでゐる。それにしても、貫一が千葉行きの際に、兩國驛前の休憩所で、仲のいい男女の秘密話を立聞きして自分の身に引くらべて感慨にふけり、鹽原の宿で、また仲のいい男女の情死の相談を立聞きして飛込んだりするのは、智慧のない趣向である。しかも、女の方が富山の思ひを掛けてゐた女であつたなど、故事つけの苦しさが思はれる。

由來紅葉は常識的の作家であるため、貫一の人生に對する憎惡感が甚だ不徹底である。風早蒲田などの舊友の懇請を斥けて飽くまで高利を貪らんとする凄味を現はしてゐるところもあつたが、隨所に弱々しい人情がつきまとつてゐて、夜叉らしい強味はあまり現はれてゐない。荒尾に對するところもさうであるし、情死の計畫者を救ふあたりは、まるで平凡な人情家である。私はその點で、讀みながら紅葉の不徹底さを齒痒く思つた。

しかし、紅葉が自己の天分と蘊蓄とを傾注した小説は「金色夜叉」である。「三人妻」や「多情多恨」のやうに完備したものではなくつて、どんな批評家からも非難されさうな缺點を有つてゐるのであるが、彼としては、最も面倒な題材にぶつつかつて藝術的奮闘を試みたので、脳漿を絞り盡し

て、倒れて止むといつた悲壯な感じがされる。それで彼れは自己の有つてゐるあらゆる物を投出してゐる。織ぎはぎではあるが、それ等の織ぎ切れのあるものには、一代の才人の織つた錦繡の美を表はしてゐるのだ。「金色夜叉」は紅葉の作中では唯一の劇的效果を有つてゐるので、「不如歸」とともに、早くから新派劇の賣物にされ、大學生が劇場に親しむやうになつたのは、「金色夜叉」が本郷座で上演されたためであると云はれるほどに、その芝居は世俗に歡迎されたのであるが、それは紅葉の藝術に取つてはいふことではなかつた。私は當時劇評をやつてゐたので、高田實の荒尾や藤澤淺二郎の貫一などを見せつけられたが、その記憶が、この小説の鑑賞に於てどれほど邪魔になつたか知れないのだ。小説の筋立に芝居が、つた不自然さがあるにしても、あくわざとらしいお芝居にされて、しかも薄汚く蕪雜に振舞はれては、原作の名文章が泥土に委されたやうなものだ。「金色夜叉」が最も廣く流布してゐるとともに、紅葉の作中の最も卑俗低級なものやうな印象も我等に與へてゐるのは、新派劇の罪なのだ。

しかし、この芝居が大學生など青年男女から異常な歡迎を受けたことも時代の風潮と關係がある。舊文學の戲作者氣分で筆を執つてゐた紅葉も、知識階級の青年を主人公として、新時代の悩みを寫

すやうになつた。それが不徹底であつても、我々はそこにあの時代の影を髣髴と思浮べることが出来るのである。春のや主人の「書生氣質」の學生は、文明開化の空氣に浴して、ふはくくと氣樂に生きてゐた。それが「金色夜叉」では、不徹底でも何でも、どうかしなければならぬと云つたやうな時代の苦しみが出てゐたのだ。明治の新日本もボンヤリしてゐられなくなつた。同じやうに貧乏であつても、學生や若い女の生活難や金錢慾に對する感じが鋭敏になつてゐる。富山のやうな富者に對する反抗と羨望、青年男女の満たされない望みが、在來の小説とはちがつて、尖つて出てゐるのである。新時代の色男としての貫一を取扱つて、讀者を喜ばせようとしてゐながら、作者は不用意のうちに、時代の影をも寫してゐるのだ。自然主義以後の作家のやうに、紅葉には自覺とか自意識とか名づくべきものはなかつたのであらうが、彼はこの最後の大作に取掛つてゐる間には、創作上の苦悶があつたに違ひない。そして、その苦悶には私はいたましく同感するのである。

貫一の失戀の苦をこれでもかくと書續けてゐるのが、深く掘下げてゐるといふよりも、多くは「くどく」と感じさせられるのだが、名作「多情多恨」だつて、くどいことは随分くどい。

四十にもなつたら實の入つたものが書けるだらうと、若い時分に述懐してゐた紅葉山人は、四十未滿で逝去した。老大家のやうに思はれてゐた彼れも、今の私の年齢よりは十歳も若くて死んだのである。世態人情に明るかつた彼れの言説も、今から考へると未熟に思はれるのも止むを得ない。「新著月刊」といふ雑誌に掲げられ、後日「唾玉集」(?)として出版された宙外青々園二氏の文集のうちには收められてゐる宙外氏筆記の名家苦心談(それは前代の諸作家の文學觀人生觀を窺ふに甚だ便利なものである)や、明進軒會食後の雑話によつて、我々は紅葉の創作の用意や世間智を直接に知ることが出来るのであるが、それは、極めて常識的で、綠雨や二葉亭の所説にあるやうな鋭利な觀察や不安な懷疑は全く見られなかつた。戀愛や家族生活についても、いやに老成ぶつた態度で子弟に教へを垂れてゐたが、「金色夜叉」などを讀みながら、私が氣づいたところによると、紅葉でも、青春期を過ぐるにつれて、創作その他の事について疑惑の念が湧いて、いろくんに悩んでゐたのである。たゞ、一代の大先生として奉られてゐた自己の内兜を子弟や世人に見透かされまいとして、努めて老成ぶつた態度を持續けてゐたのであらう。三十にも達しないうちから大家に成りすまし、ことに門下生をつくることなどは、自己完成の上に決していゝことではない。

「青葡萄」は、紅葉全集中唯一の、事實直寫の小説であつて、これによつて彼の日常生活の一端が窺ひ得られるのである。それに、言文一致體の文章はこの一篇に於て最もよく調つてゐる。「金色夜叉」などの會話は、純然たる寫實とは云はれないのだが、「青葡萄」は事實の直寫であつたために、會話が自然であつて生動してゐる。紅葉も生き永らへてゐたら、「青葡萄」の文體を押し進めて、新時代の文學へ入つて行つたかも知れないが、あるひは從來維持してゐた大家の格式を崩すのを恐れて、徒らに神經を悩ましたかも知れない。……どちらにしても、紅葉は露伴氏とは違つてゐる。「青葡萄」では、人の師としての紅葉が、門下生に對して威嚴と情味とを兼備へてゐたことがよく現はれてゐて、文壇に於ける彼れの實際的勢力の大であつた原因も察せられるが、文學の上から云へば、かういふ師匠を戴くことは弟子として幸福ではなく、師匠自身に取つてもいゝことではあるまい。文學に於ては、飽くまでも自己の天分の發揮すべきもので、師匠の束縛なんか受けてはたまるものでない。好んで人の師になるものも愚かであるし、進んで人の弟子になるものも愚かである。

二葉亭、透谷、獨歩などには、將來の文學の萌芽が宿つてゐたが、硯友社の文學にはそれがなかつた。舊文學の衣鉢を襲いだのに過ぎなかつたが、しかし、紅葉山人だけに、作品の價值から云つても、日本文學史上に立派に眼を留むべき傑れた作家である。言文一致の文體を完成するに努力した一人であるのみならず、その作品のあるものは、古來の日本文學の傑作に比して、決して劣るところはないのだ。

紅葉以外の硯友社の作家と作品とを、今記憶を索つて思ひ浮べると、廣津柳浪氏の「今戸心中」その他二三が、今讀返しても見褪めがしないだらうと思はれるばかりである。時として紅葉以上との評判のあつた川上眉山の作品も、私には深い印象を留めてゐない。……さう思ふと、十數年の間小説壇を獨占してゐた硯友社も、内容は甚だ稀薄であつたやうに思はれるが、しかし、あれほど旺盛だつた自然主義の作品のうちにも、今になつて顧ると、どれだけいゝものがあつたであらうか。いつの世の藝術でも、時日の篩にかゝると、残るものは幾つもないのが當然なのだ。

(九月十九日大磯)

## 「タイタス、アンドロニカス」

## 「繪本合法衛」

私は、沙翁の「タイタス、アンドロニカス」を、最近出版された坪内博士の翻譯によつて讀んだ。この戯曲は作者が二十五歳頃即ち修業初期の習作であつて、一部の批評家は、「こんな譯のわからぬ滅茶苦茶な、只もう怖ろしい事づくめのメロドラマ」を沙翁が書く筈はないと云つてゐるさうである。「血の悲劇」と名づけられてゐる「殘忍一點張り」らしい戯曲である。

しかし、私には面白かつた。「譯の分らぬ滅茶苦茶なもの」とは思はれなかつた。筋もよく通つてゐるではないか。「南北默阿彌らの血の悲劇を今も尙ほ頻りに歓迎し、又所謂劍劇の随分甚しい慘酷にも、盡きせぬ感興を覺えつゝある我民衆の如きは、三百數十年前の此作に對して、或ひは一種不思議な同氣相求を感ずるのでもあらう」と、博士は云つてゐられるが、私は、「同氣相求」以上の感じに打たれてゐる。鶴屋南北の「五十三驛」や「合法衛」こそ、譯の分らぬ、滅茶苦茶な、鬼面人

を脅かすものと云つていゝであらうが、「アンドロニカス」は結構が整然としてゐて、讀んだだけでハッキリした印象が與へられる。表面の不自然を非難するのなら、沙翁の後年の戯曲とでも、多くはその非難を受けなければならぬのである。

この戯曲が現はれた三百數十年前の頃は、日本はまだ戰亂時代であつたが、その頃の日本歴史を讀むと、この戯曲にあるやうな殘忍な事實は絶えず世に行はれてゐたではないか。戰死した愛兒の靈を弔ふために復讐的に捕虜の王子を生きたがら火炙りにすること、自己の意に逆つたのを怒つて直ちに實子を斬殺すること、恨みある敵方の女子を辱めた上に舌を切り左右の手首を切落すことなど、戰國の昔には有り得たことなのだ。しかも、沙翁はすべて、シリ阿斯に取扱つて、決して悪巫山戯をしてゐない。黒人の惡漢アローンの如きも、「リチャード三世」や「イヤーゴ」などの惡漢型を豫想せしむるものである。「合法衛」の左枝大學や立場の太平次は、物慾のためにいろ／＼な殘酷な事を行つてゐるが、それだけで、臺詞を通じて現はされる彼等の心理に何等の深刻味もない。「頃も幸ひ五月閣倉狩峠の土となれ」なんて、舊劇特有の氣取を見せてゐるくらゐである。「歌舞伎脚本傑作集」に挿まれた初代豊國の色摺の口繪で想像される如く、驚つ鼻で目の小さい五世幸四郎が、グロテス



クな扮装と身振で見物を脅かしただけである。「この悪企みは想像したばかりでも身が肥る」と思つてゐるアローンの臺詞には、我々の胸を抉るものがある。

「紅葉論」の中で私が説いたやうに、「金色夜叉」のうちには、人間の夜叉の一面はあまり出てゐないのだ。人類の有つてゐる復讐的氣魄が甚だ稀薄である。アロン曰はく、「夜叉といふ者が實際あるものなら、おれはその夜叉になりたい。地獄の消えずの火の中で焼かれながら生きてゐたい」と。この精神的強味は、南北の人物にも缺けてゐる。

「アンドロニカス」には、技巧の妙味が隨所に散亂してゐる。復讐祈願の箭文を天上の諸神へ向つて射放つところや、料理皿に留つてゐる蠅をナイフで突殺して感慨に耽るところなど、「合法衢」の鷹狩の争ひのやうな大ザツパな常套的趣向とは違つて、人間の狂暴性が峻烈に現はれて面白いが、ことに、手や舌を切られた女子ラヴィニアが、父兄に加害者を知らせるところは凄慘である。この役は田之助にでも扮さすべきものである。ことに、彼女が手を失つた肢體で水盤を捧げて、復讐のための人肉料理に侍するところは、南北風の茶番ではない、鬼氣人を襲ふものである。……沙翁のやうな大詩人が、こんな残酷な趣向を立てる筈がないと云ふのは、古來の詩人を強ひて人類愛や、

生やさしい人道主義の權化にしたがる近代の批評家の習癖に基くので、沙翁には人類個有の残酷性に對して洞察があつたのであらうと思はれる。

我々人類は、殺戮を日常茶飯の事とし、復讐慾に燃えてゐた時代からいくらも遠ざかつてゐないのだから、上べは平和を装ひ、共榮共存を企てながらも、祖先傳來の殘虐性復讐性が決して消滅してゐるのではない。世界平和を高唱しながら、國と國とはひそかに戰鬥の爪牙を磨いてゐるのである。人と人との間にも、「血の悲劇」は、いろ／＼な形をして現はれてゐるではないか。

日本の劇場に今なほ盛んに上演されてゐる「血の悲劇」が、見物に迎へられるのも、見物自身の心に共鳴を覺えるからであらうか。

しかし、この頃上演される「血の悲劇」は、血の色が次第に稀薄になつた。警視廳の干涉などがあるばかりではない、見物が酷たらしい舞臺面を喜ばなくなつたためであらう。左團次が十月に上演すると新聞に報道されてゐる「合法衢」だつて、多分残酷味が閑却されるのであらう。……藝術鑑賞がさう云ふ風に進歩するのは結構であるが、それによつて、人間の殘虐性や復讐慾が急に減退したとは、私には思はれない。むしろ内攻して行くのであらう。人間の神経は次第に尖つて來るの

だから、人間の残酷性は次第に内面的に深刻になるのだ。立場の太平次やアーロンの跋扈する「合法衝」や「アンドロニカス」の世界が恐ろしいばかりではない。今日の現実も恐ろしい。

(九月廿三日、大磯にて)

私は、故郷へ往復の途中、神戸の楠公神社前や、大阪の道頓堀あたりを散歩して、他所ながら澤正一座が非常な人気を博してゐるのを見た。それから、少時間文楽座へ寄つて、この春見た時よりも、一層見物席のさびれてゐるのを見て、亡び行く藝術に對して痛ましい愛惜を感じた。

昨日は偶然上京して帝劇へ入つて、半年振りで東京の舊劇を観た。學生時代に、感激し心酔して見た「菊畑」は、こんな詰らない芝居であつたのか、と呆れたのであるが、南北の「合法衝」も、殺人芝居といふ意外に、何等の意味のないことを知つて、大勢が高い入場料を拂つて、こんな芝居を観てゐるのを、奇異に感じた。大抵の見物はさすがに左程の興味を感じてゐないやうであつたが、とに角、一夜の歡樂を求めるつもりで、一團の人類が此處に集つて、こんな者を観てゐるのを、人生の一光景として傍觀してゐるのは、芝居その物よりも私に取つて一つの興味となつた。

鶴屋南北の脚本は「歌舞伎脚本傑作集」に蒐められてゐるものだけは読んでゐるが、舞臺に上つたものでは、「四谷怪談」を観てゐるくらいで、近年左團次によつて新たに上演されて、好評を博したらしい「勝負力」や「謎帯」は、つひに觀る機會を得なかつた。

今度の「合法衝」は、南北の代表作と云つていゝもので、昔は非常に持囃されたものらしい。私は、脚本で読んで、「倉狩峠」の一場の如きが、最も南北の特色を結晶させたものであらうと思つてゐた。奇怪な顔をした幸四郎や、凄艶な半四郎が、陰惨な夢を舞臺にうつして、鎖國的無智の泰平に酔つてゐた見物が、間延びのした痴呆的顔面をして、それを觀賞した、舊幕府のある時代を想像して、その光景を人生地獄の繪の一枚のやうに思つてゐた。峠の一軒家、薄暗い行燈、圍爐裏の蚊いぶし、猿轡を嵌められて縛られた美人、鼠の活躍、捨鐘、忍び三重、時鳥、蛙の聲、南北慣用の技巧は、完全にこの一場に集められてゐる。かういふ瑣末な技巧から云つたら、「タイタス、アンドロニカス」などは、とても南北に及ばないであらう。……帝劇では、幕が下りると、文明の電燈が眞晝の如く耀いて、「今のは夢であつたか」と、氣持が變るのであるが、昔の劇場では、幕が閉ぢられた後でも、あたりは暗かつたのだ。悪夢は醒め切らなかつた筈である。今日の文壇用語で云へば、

見物は救はれないのである。「救ひのない人生」と云はるべきものだ。……ところが、いくら昔の痴呆的見物だつて、殺人の血を見て満足してゐたのではあるまい。肉親の仇を討つため、あるひはお家の寶物（それが香爐であらうとも茶壺であらうとも）を捜出して主君に捧ぐるといふ理想のためには、どんな艱難辛苦をしても、弔殺しにされても厭はないといふ勇猛心に同感して、それによつて救はれてゐたのであらう。舞臺の人物も、さういふ理想を遂げられさへすれば、身を膾の如く切りさいなまれても満足してゐるらしい口吻を弄してゐる。この點から云ふと西洋の昔の血の悲劇の方が、却つて「救はれない人生」を現はしてゐる。「タイタス、アンドロニカス」中の人物には、「合法衝」中の艱苦に漂つてゐる人物のやうな理想の満足がない。悪人でも、アーンその他は、虐殺の心理状態が、太平次のやうな痴呆性殺人でなくつて、残酷性が根深い。

今の時世では、「合法衝」の人物の理想なんか、てんで受入れられなくなつてゐるのだから、今度の上演を見ると、譯も分らずに斬つたり斬られたりをしてゐるとのみ見られる外はない。陰氣な劍劇である。私は、脚本で読んで想像してゐた時のやうな奇怪な繪畫美も感ぜられなかつた。「四谷怪談」のやうに幾度も手に掛けられて、傳統的に型の美が踏襲されてゐるのではないから、尙さら蕪

雜である。

さすがに、左團次の太平次と、梅幸のうんざりお松とには、原作とは色彩を異にしてゐても、藝に面白味がある。ことに左團次は、自分の選擇した出し物だけあつて、身を入れてやつてゐるのだが、彼れは、かういふ南北物について、どういふ點で興味を感じてゐるのであらう？ 豊國などの舞臺繪の美に感じて、それを再現しようと思つてゐるのであらうか。南北の慘劇に、默阿彌など普通の舊劇中の殘忍行爲とはちがつた人生味を認めたくめなのであらうか。……思ふにそれほど深い意味がある譯ではあるまい。

私は、「合法衝」を見て感じた陰慘味や戦慄は、「アンドロニカス」を読んで感じたそれよりも遙かに低級であるやうな氣がした。「四谷怪談」などについて、いろいろに文學者の新解釋がつけられ、南北全集までも出版されたが、今度の帝劇の演出はよつて見ると、新代の舞臺に南北の復活することは、覺束ないだらうと思はれる。時間に制限があるため、筋の通らぬほどの省略がされてゐるのも、この脚本の價值を傷けた一つの理由になつてゐるであらうが、しかし、この芝居などは、筋立によつて我々を納得させるのではない。

（十月四日、東京にて）

## 断片語

△西行と芭蕉とは、その人となりや作品が、日本趣味の極致に徹してゐるやうに思はれてゐる。西鶴でも近松でも、あるひは人丸でも定家でも、特種の文藝愛好者に尊崇されてゐるだが、西行と芭蕉とは、その名聲が國民的であるらしい、この二人の性行は、日本人の心魂に觸れてゐるやうである。私なども、文學修業の極致は、かの二詩聖の心境に達することであるやうに、多年考へてゐた。

△この頃も、旅中つねに「山家集」と「芭蕉全集」とを懐にして、秋草に圍まれた輕井澤の寓居で讀み、京阪のホテルで讀み、今も故郷の海岸の小樓で讀んでゐる。こんなにして二大詩集に親しんだ結果を云ふと、彼等の心境が解つたやうでもあり、解らないやうでもある。得るところがあつたやうでもあり、なかつたやうでもある。

△芭蕉の句にも、いくら考直しても詰らないと思はれるものが多いが、西行の和歌には、感心させられるものが極めて少くて、大抵は凡庸である。定家の「拾遺愚草」や實朝の「金槐集」の方が遙かに名歌に富んでゐる。雪月花や××の戀△△の戀といふやうな題詠的の和歌には、ことに詰らんものが多いが、そんな詰らない和歌を芭蕉などが屢々引用して推讃してゐる。文學者の崇古癖はむしろ滑稽である。

△芭蕉はさすがに傑れた詩人である。西行よりは遙かに詩人的天分に富んでゐる。しかし、私自身は詩作に巧みな芭蕉よりも詩作に拙い西行の氣持に共鳴を感じてゐる。自然に同化し、世俗から隱遁しようとしたところは、二聖相似てゐるやうであるが、非常に違つたところもあるのだ。

△「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける、其貫道するものは一なり。しかも風雅に於ける、造化に従ひて四時を友とす。見るところ花に有らずと云ふことなし。思ふ所月に有らずと云ふことなし。思ひ花に有らざる時は夷狄に齊し、心花に有らざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出で鳥類を離れて、造化に従ひ、造化に歸れとなり」と、芭蕉はその「卯辰紀行」に於て云つてゐる。彼れの心境はかうであつたのだらう。花に徹し月に徹してゐたのである。少くも徹しようとし、また徹したつもりであつた。西行も、彼れが生きてゐた時代の歌人

の常套を脱しないで、月と花とを謳歌し、「願はくば花の下にて春死なむ」とか、「佛にはさくらの花をたてまつれ、わがのちの世を人とぶらはど」とか歌つてゐたが、彼れの心には「風雅に従ひ造化に従ひ四時を友と」したゞけでは安んぜられない懷疑の燄が燃えてゐた。芭蕉の如き風流的樂天家ではなかつたのだ。

△「無常」を題として作歌をしても、西行には、實朝や定家とは違つた深みをもつてゐた。云ひ廻しの巧さだけではない實感が出てゐる。「まぼろしの夢をうつつに見る人は、目もあはさでやよをあかすらむ」の如き、技巧によつてつくられた歌ではない。天真素朴の萬葉歌人などは心境がまるで違つてゐる。風雅を主とした後世の歌人の歌ひ得られるものでもない。「おどろかむと思ふ心のあらばやは、長きねぶりの夢も覺むべく」など、彼れは、屢々驚かんことを望んでゐる。國木田獨歩が、「人生の不思議に驚かん」としたことが思出される。

△西行は胸に激情を潜めてゐた人らしい。それで、芭蕉が俳諧三昧に没頭してゐた如く、あるひは紅葉が小説の文章を生命としてゐた如く、和歌に全心を注いでゐたのではないやうに思はれる。

△「寂しさ無くば憂からましと、西上人の詠み侍るは寂しさを主なるべし」と芭蕉は云つてゐるが、芭蕉は多數の門弟や崇拜者にちやほやされて賑かさうであつた。

△「日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を乗りては魍魎に是非を懲らす、斯く云へばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さんとはあらず。やや病身人に倦みて世を厭ひし人に似たり」云々といふ幻住庵記は、芭蕉作品中の名文で、彼れの心境がよく現はれてゐるが、これは、鴨長明の「方丈記」以來の、日本の文人の常套的趣味で、その厭世情調は文章の綾のやうに感ぜられる。

△さびと云ひ、匂いと云ひ、芭蕉の藝術に幽玄の味ひが附せられてゐるが、それは私には水中の月で、捉へられない。この頃頻繁に現はれる芭蕉批評を讀んでも解らない。

△先日京都の瓢亭で、獨りで靜かに、こゝの茶料理なるものを味ひながら、殊更に古ぼけたまゝに舊態を維持してゐる狭い脆弱らしい簡素な部屋と、水の流れてゐる風流な庭を見て、芭蕉の句利休の茶の趣味はこれだと思ふと、俄かに手頼りない感じがした。

△島崎藤村氏の「嵐」は、雑誌文學近來の逸品であるが、しかし、あの作品が若い批評家や作家をも非常に感激させ、極度に讚美されてゐるのは、私の意外とするところであつた。「家」や「新生」

の波瀾ある生涯の記録をよく味得したものに於て、「嵐」の眞價がしみじみと感ぜられるのだと、私は思つてゐる。

△「菊の香や奈良には古き佛達」私はこの句が好きであるが、「嵐」にはさういふ味ひがある。

△雑誌編輯者の組合が出来たさうだ。作家の組合に對して當然起るべきことであらう。近年作家は、以前に比べると、經濟的にも稍々豊かになり、世間的にも多少幅が利くやうになつたのだから、酬ひられる所の少い編輯者の方では、心平かならぬもののあるのは當然である。流行作家が編輯者に對する暴慢な態度を時々耳にして、私なども時々になぐしく思つてゐる。原稿料が不法にせり上げられるのも、雑誌社や編輯者の苦痛となるのであらう。しかし、十年くらゐ前までは、概して編輯者の方が威張つてゐた。大書肆の編輯者には、我々は頭が上らなかつた。田舎の地主が小作人にいぢめられたのと同様に、時世の變遷を私は感じてゐる。

△作家の方から、原稿料が多過ぎると主唱する者が現はれて、それを問題にして、氣にして騒ぐ世になつたのだから驚く。齋藤綠雨などが地下で聞いたらビツクリするだらう。日本の文學者は芭蕉や西行を祖先に持つてゐるほどあつて、今なほ無慾なのであらうが、そこへ行くと、歐米の作家

は平然として強慾であるらしい。パーナードショウの如き、社會主義を賣物にしなから、莫大な金を取つて、日本の流行作家などが足許へも寄りつけぬやうな贅澤な暮しをしてゐるらしいではないか。イバネスでもローランでもウエルスでも、皆んなさうであらう。

△私など物慾に累はれないやうに心掛けてゐるが、しかし、當然取れるものなら遠慮なく取つていゝと思つてゐる。金ばかり欲しがつて濫作するのは文壇の弊害であるが、いゝものを書いていゝ原稿料を取つていゝ生活をしようと思つてゐるのは悪い考へではない。それが心のはげみにもなるのだ。私など廉い原稿料で百枚書くよりは、高い原稿料で二十枚書くやうな方針にしたいと思つてゐる。……藤村氏の「嵐」のやうな苦心の傑作に對しても、青二才の駄小説と同様の原稿料が拂はれると假定したら、随分不公平ではあるまいか。

△今田舎でこんな文壇的感想を、強ひて書いてゐると、それが非常に自分の心に相應はしくないやうに感ぜられた。「時評」などをやつて來たのが悪かつたのだが、この頃は生活は例の如く隱退的でありながら、「文壇」といふものが、濃厚に目さきにちらつていけない。「嵐」を讀んだ時には、文壇臭がないだけでもいゝと思つた。私は「東京驛」といふ小説を、輕井澤の陋居で、全心

全力を注いで書きながら、文壇臭を帯びてゐるのにいや氣がして、續きが書きづらくなつてしまつた。文壇臭は私ばかりではないので、雑誌の小説や戯曲には、大抵その臭がある。プロレタリア主義を抱持する人の創作や議論にも、その社會觀よりも、文壇臭紛々たるものが多い。……自から戒めざるべからず。(九月二十九日、故郷の薄暗いランプの側にて)

## 散歩の途上

私は東京に滞在してゐる間は、朝か午後か夜か、少くも日に一度は、日本橋あたりから新橋邊まで、運動のためにぶら／＼歩くのを例としてゐる。何か特別の用事がない限りは、他所の町へ足向けることは極めて稀れである。東京驛や丸ビルの界限はどちら向いても沙漠のやうに無味乾燥であるが、銀座の街上も、塵埃と悪臭と雑沓とで、歩いてゐる私の頭腦は惱まされ勝で、何日かの都會生活の後で田舎の寓居へ歸ると、自分の頬ぺたの瘦せが、一層目立つほどである。それでも、私は、京都や大阪よりも東京が好きである。嵐山や宇治や道頓堀などを散歩するよりも、銀座でも散歩した方がいゝやうに思つてゐる。

私は二十三年前(二十五歳の時)の六月一日に、讀賣新聞に入社し、滿七年間記者生活を續けたので、その七年の間は、毎日銀座に通つてゐたのだが、人間の記憶は手頼りのないもので、あの頃の銀座の光景は、私の頭には明瞭に残つてゐないのである。馴染の深かつた京橋際の新聞社も先頃

移轉して、多年銀座散歩の時毎に追憶の目標としてゐたものが跟跡もなくなつてゐる。社の向ひにあつた、江戸以來の有名な「松田」で旅順陥落の祝賀會が開かれたことや、座敷が廣くつて小綺麗であつた「吉川」といふ牛肉屋から、辨當代りの牛鍋を取寄せてゐたことなどが思出されるが、「松田」のあとが牛肉屋になつたのか、この二つは違つた家だつたのか、それさへ私の頭にはハッキリ残つてゐない。我々には回顧癖があつて、東京の市街でも昔の方が風致があつたやうに買被り勝で、鐵道馬車を風流に感じたり、銀座の煉瓦家屋に情趣を認めたりするものだが、それは心の迷ひに過ぎないので、明治初年、あるひは私の知つてゐる明治中期の銀座は、西洋模倣が今よりも却つ不調和で滑稽であつたに違ひない、昨年三越で、明治以來の都會風俗の變遷を人形仕立で見せてゐたが、それは決して昔懐かしく思はせるものではなかつた。今後數十年を経たなら、大正初年の市街や風俗を讚美して現在を罵るものが出て來るに違ひない。

昔最良と外國崇拜は人間の通有性で、日常見馴れてゐる同時代の同國人は、何となく安つぽく平凡に思はれるのである。しかし、我々がほんたうに人生を知らんとするのは、主として同時代の同國人に依る外はないので、歴史を理解するのも、外國の書物を心讀するのも、現在接觸してゐる平

凡な同國人の心理や行動に基礎を置かねばならないのである。現今の文學者は社交が狭いからいけない、見聞を廣くしなければ傑れたものは出來ない有振れた非難には理由があると、私もつねに思つてゐるが、しかし、外形の變つたものを、幾つも集めなければならんことはない。生理學者の解剖の材料に、同種類に生物をやたらに集める必要はあるまい。……我々の左右にゐる平凡な同國人に觀察の目を向けてゐれば、それで澤山だ。非凡な怪異も醜惡も善美も、左右の平凡な人間のうちに發見し得られるので、徒らに遠い所を捜すには及ばないのだ。

私は銀座などを散歩しながら、擦違ふいろ／＼な老若男女と時所を同じうして生きてゐることを屢々不思議に感ずる。……私も、かういふ人々が共同してつくり上げた風俗習慣の常識に従つて生きてゐるのである。思想や服装や行動に相違する點があつたとしても、その差は些少なものであると考へると、人生の鑑賞思想の研究に心を勞するのが懶く思はれる。いくら努力しても人間以上になれないと同様に、いくら呆然として生きてゐても人間以下にはなれないのだ。……實際私は呆然として何の目的もなしに、騒々しい東京の街衢を歩いてゐることが多いのだが、それでも、電車や自動車 avoid することには、本能的に注意が拂はれてゐる。……物を書く時にも、自由自在に筆を動か



して、譯だが、自己保存の本能から、知らず識らず時代の常識に外れない様に注意されてゐる。街上の自動車や電車を避けると同様に、文學道の自動車や電車を避けてゐる。自動車にぶつゝかつて行くのが勇者であるかも知れないが、生物の本性としてそれは容易に實行されないことらしい。

○ 現代は懐疑の世であり不信仰の世であると云はれてゐるが、昔風の神や佛は信じなくなつたにしても、人間同志は互ひによく信じ合つてゐるものだ、私は雑沓の巷に於てよくさう思ふ。自動車の運轉手を信じてゐればこそ、私達は安んじて道を避けてゐられるのだ。床屋の職人を信じてゐればこそ、安んじて髯を剃らしてゐられるのだ。眞に人を疑つた日には、一時も安んじて散歩なんかしてゐらりやしない。……第一、自分が文章に現はしたことを、他人がそのまゝ讀んで呉れると信じてゐればこそ、筆を執つてゐられるのではないか。ある個人を疑ひある個人を憎んでゐるにしても、人間全體については信頼してゐればこそ、一日でも生きてゐられるのだ。

○ 散歩の次手に鳩居堂へ寄つて、其處に陳列された歌麿の美人繪を見たことがあつた。美術に對し

て批判力の乏しい私も、見惚れるほどに美しく思つた。全身に媚態を備へてゐるのに感心した。銀座の街を歩いてゐる今様の美人に比べると、夢幻の美しさがあつた。風俗ばかりでなく、顔面容姿の變遷が面白かつた。しかし今日の女子だつて、傑れた美術家が描いたなら、現代らしい藝術美を發揮して、後世の鑑賞家をして大正の美人繪に隨喜の涙をこぼさせるであらう。我々が過去の美にあこがれ、現代を散文的に感ずるのは一つの迷妄で、後世の人間は、大正の蕪雜の世を顧みて美しい夢を感じるのに違ひない。輕佻浮薄の誹りはあつても、今に多くの女子が洋服を着るやうになるだらう。ダンスが普及するであらう。日本音樂が亡んで西洋樂が田舎の場末にまでも行渡るであらう。男子もこんなイガ栗頭ではゐられなくなつて、頭の髪を分けて、香水やコスメチックで美しくしなければ世間へ出られなくなるだらう。私など幸ひに今の時世に生れたため、服裝や髮形に面倒な思ひをしなないでゐられてよかつた。

私は西洋樂に何等の興味がなく、三味線樂にはつねに感動さゝれてゐるのであるが、數百年の間日本國民を樂ませた三味線も、今はその役目を果して、滅亡に瀕してゐる。亡びに近づいてゐる音樂として聽いてゐると、三味線の音にますゝ哀れが感ぜられる。歌舞伎芝居だつて同じことだ。

先日芝居好きの田舎の老人が市村座の「助六」を中途で見残して歸つて来て、「とても退屈で辛抱が出来なかつた」と云つてゐたが、老人でさへさう感じるやうになつたのだ。やがて、舊劇も舊音楽も少數の物好きに愛翫されるだけのものになつて、時代は動いて行くだらう。新進の作家が既成作家の跋扈を氣にしてヤキモキしてゐるが、さう案じるには及ぶまい。先進者は次第に歳を取つて時世に遅れつゝあるのだから、早晚文壇も變化するだらう。戦争みたいに一朝一夕に老人を叩潰すことの出来ないのは、文學の性質上如何ともし難いのだ。

○

昔、銀座の裏町に「日進亭」といふ西洋料理屋があつた。私は記者時代に、よく其處のパンとピテキとを午餐に食べてゐたが、それは天下の珍味と云つていゝくらゐにうまかつた。神谷町や我善坊に住んでゐた頃には、「清新軒」へ食事に行くことを楽しみにしてゐた。しかし、近來は西洋料理は私の舌に適しなくなつた。それでも、上京して一人で食事をする時には、手軽で便利なために、自然風月とか東洋軒とかに寄るやうに習慣がついてゐる。

歳を取ると、傳統的の日本趣味に戻り、骨董に興味を覚えるやうになると、世間で云つてゐるが、

私は身を終るまで骨董いぢりなんかする氣になれさうでない。生れながら風流心が缺乏してゐるらしい。この春、大阪に數日間滞在してゐた時に、故郷の弟が肝煎役の一人になつてゐる書畫骨董の賣立を見に行つたことがあつたが、美術の陳列と云ふよりも反故の陳列と云つたやうな感じがした。意味ありげに入札してゐるのが可笑しかつた。こんな者は反故籠に入れて、何處かへ持つて行つて焼棄てたらいゝだらうと思はれた。

趣味と云へば、私は幼い時から勝負事には興味を有つてゐた。しかし、人を相手に勝負をするのが煩しいから、圍碁弄花麻雀遊びなどに手を出さないうで通つて來た。玉突も止めた。昨年春偶然鳴尾へ行つて以來、競馬に多少の面白味を感じるやうになつたが、かういふ勝負事は、相手と差向ひでやる遊びでないからいゝ。競馬場に入出入するやうになつてから、人間の賭博心理がほんたうに分つて來たやうに思ふ。

○

私も散歩の次手には、口腹の要求がなくなつても、カツフェーなどに寄つて足を休めることがあるが、何處のカツフェーも居心地がよくない。それよりも、私は東京驛の待合室などに休息すること

を好んでゐる。カッフェーのお客よりも、停車場の種々雑多なお客を見てゐる方が面白い。私はこの混雑した所で創作の刺戟を受けることがある。それよりも、其處にゐるある男女の跡を追つて見たいと思ふことがたび／＼ある。……探偵といふ職業は人に嫌はれるもので、夏目漱石氏の如き所謂人格者は、文學の探偵的態度を卑しんでゐたやうであるが、私は少からず探偵趣味を有つてゐる。骨董品の時代を研究したりするのは上品でいゝのであらうが、私はそれよりも生きてゐる人間の行動を監視する方が面白い。人間の秘密を探偵するのは、イヌといふ侮辱的名詞によつて表はされてゐる如く、卑むべきことなのであらうが、人間の上つ面ばかりでなしにその秘密を探究することに、私は異様の好奇心を覚えてゐる。北極とか南極とか人間未踏の地へ行つて、地球の秘密を見破るのが面白いことであるのなら、人間の秘密を見破るのも面白いに極つてゐる。こゝに謂ふ秘密は、必しも犯罪の秘密を云ふのではない。

○

雑沓した街上を歩きながら、五十年百年後の東京に空想を馳せることもある。西洋文明が行詰つて、やがて東洋主義が世界に瀰蔓するやうに云ふ人もあるが、それも尤もな理窟らしくて當てにはならない。過去數十年の變遷から推察すると、日本の東京も當分は歐化米化を續けるに違ひない。この頃日本の古典などが流行しても、將來の日本を支配する青年の趣味や思想の傾向から考へると、凡てに西洋の模倣の留まる氣遣ひはない。それが歎すべきことであらうとも、喜ぶべきことであらうとも、事實はいかんともし難い。(五月二十一日、東京にて)

## シェークスピア

シェークスピアは、外國の文學者のうちでは、私に取つて最も親しみの深い一人である。小學校時代に、雑誌などによつて、すでにその名前を知つてゐた。「ベニス商人」や「ハムレット」くらゐの書名は知つてゐて、さういふ名高い外國の芝居はどんな者であらうかと空想してゐた。小學校卒業後、閑谷黌しんたかといふ漢學を主とした私塾へ入つてゐた間に、上級の者がその頃、創刊された早稻田文學を購讀して、貴重品の如く大切にしてゐるのを、遠慮しいく借りて、三島中洲の「莊子」饗庭篁村の「丹波與作」などの外に、坪内逍遙の「マクベス」の註釋翻譯が連載されてゐるのを、少しばかり讀んだ。莊子にしろマクベスにしろ、神祕な世界を覗いてゐるやうな氣持で、敬虔けいけんな態度で讀んだのであつた。しかし、まだ十五六歳であつたその頃の私には、早稻田文學やしがらみ草紙よりも、蘇峰氏の「國民の友」などに心酔してゐたのであつた。同氏の「吉田松陰」の如きは幾度愛誦し感動したか知れなかつたが、マクベスは、たゞ有難いものと思つてゐたに過ぎなかつた。

早稻田に入學して、専修英語科と云つた豫科に席を置いてゐた時分、最初に坪内先生の講義を聞いたのは、ラセラスであつた。後でラムのシェークスピアの譯讀も聽いた。どちらも面白かつた。これ等が原書について私が外國文學を味ひ得た最初であると云つていゝ。當時早稻田では評判であつた本物のシェークスピアの講義を早く聽きたいと、私は熱望してゐたので、豫科を卒へて文科へ入つてからは、他級の教室へまで侵入して、シェークスピアだけは十種以上も先生の講義を聽いたのであつた、日本劇に熟通せる坪内先生の沙翁講義の如き講義は獨得のもので、あゝいふものは、今後何處でゞも聽かれぬであらう。私は、維新前の頼山陽の經書の講義があゝいふ風に面白かつたのではなかつたかと思ふ。山陽は支那の古書に於て、日本の過去や現在をも讀んで、掌を指すが如くに、指示したやうであつた。坪内先生は沙翁に於て日本の演劇の新たる解釋を見出されたやうである。そして、先生のシェークスピア評論や翻譯やは、日本の歌舞伎芝居や徳川文學に熟通した人の目に映じたシェークスピアとして、世界の沙翁學者中に異彩を放つてゐるやうである。先生の有名な夢幻劇説はダウデンの「テンペスト」論評から暗示されたのに違ひないと、私はかねて推察してゐる。「梨園の落葉」の中に沙翁に關する抒情的感想が載せられてゐるが、高山樗牛の平家物

語を読んだ感想に似通つたもので、私は先生の文章のうちで、こんな感傷的なものは、他には讀んだことがなかつた。先生の「桐一葉」や「牧の方」など最初の戯曲に沙翁研究の影響を認められたのは云ふまでもない。

かういふ沙翁學者によつて教へられてゐた學生が、どれほど沙翁を會得したかと云ふと、あるひは、講談を讀んだのと、さしたる逕庭がなかつたのではあるまいか。少くとも私はさうであつたらしい。私は教場で學んだ以外に、デートンの註釋を手頼りに、シェークスピアの全作の過半は讀んだ。ダウデン、ハドソン、ウルリチ英米獨の三批評家の評論を讀んで、大詩人のえらい理由を頭に入れたのであつたが、批評と本物とは別々のやうで、戯曲その物を讀んでゐる時、直ちに心を動かされるやうなことはなかつた。ハムレットの煩悶に同感したくらゐなものだつた。

その後、文藝協會のハムレットとシーザーをも觀たし、外國俳優のハムレットをも觀たが、ちつとも面白くなかつた。土肥春曙のハムレットはよく演じてゐたらしいのに關はらず、原作が詰らないやうに思はれてならなかつた。「殿様狂言おきらひならば」と、跳ねまはるところなど、何を馬鹿なことをやつてるのだと云ひたくなつた。(最近獨逸製の活動寫眞でヲセロを觀たが、これだけには

感動した。)

いくら長年讀んでゐても、日本人には外國の古典は理解されないものであらうかと、私は疑つてゐた。近年坪内博士の翻譯が續出したので、十冊ばかり續けて讀んで、昔を偲んだのであつたが、作その物には、ちつとも感心しないと云つていゝくらゐに感心しなかつた。「眞夏の夜の夢」に奔放自在なる空想を見、「ヲセロ」の嫉妬の惱みが可成りよく出てゐるのに感心したくらゐのものであつた。シェークスピアの大袈裟で適切を缺いてゐる譬喩や駄洒落は我々今日の日本人に取つては馬鹿らしさの限りであつて、彼等の悲喜哀歡も大ざつばで、個性が活躍してゐるところや、人間の心理へ深く抉り込んだやうなところが、ちつとも見つからなかつた。何故に歐米の文豪はかういふものに感動するのであらう。「人生の鏡」だの「百萬の心」だのと云つて、この鏡には人間の上つ面ばかり映つてゐるではないか。百萬の心も千萬の心も、かう軽く安つぽく取扱はれては、我々はシェークスピアに於て人間の心の深さ廣さを感じることが出來ない。百萬の心よりも一つの心だけでもよく見破つてよく書いて呉れた作家によつて、我々は人生を學ぶことが出來るのである。そこへ行くとトルストイなどは偉人である。彼は百萬の心は書かなくつても、人の心の底の底まで見て、それを人

間業とは思はれない技倆を以てうまく書いてゐる。トルストイのものにこそ本當の人生が擲出されてゐるので、シェークスピアのはいろ／＼に仕組まれたお芝居であるやうに思はれる。

先日、私は有島家の賣立を觀に行つた時、武郎君の藏書のうちから、ブランデスの「シェークスピア」を紀念として買つて來た。そして、何の氣なしに讀みかけたのだが、非常に面白かつたので、殆んど全部讀んでしまつた。ブランデスはまことに偉大なる評論家である。後世の學者詩人畫家などが、キリストを捉へて、自己の理想をそれに託して作り上げたやうに、シェークスピアを人間以上の理想家的の文豪として叙述してゐる。馬琴や近松と同様に、私に取つて親しみの深い沙翁が、かういふ風に尊重されてゐるのを喜んで、も一度ブランデスに導かれてその全集を原作によつて讀みたくなつた。果して人生の種々相が底の底まで描かれてゐるのなら、私は沙翁全集を携へて、山の奥へでも入つてそれを讀破したなら、私の一生はそれで満足していゝではないかとさへ思つた。

沙翁は華やかな明快な青春の心を描いてから次第に暗い方へ進んで、つひに、"World Catastrophe"まで描き盡したといふ。「リア王」には果して、世界のどん詰り、人間のどん詰りが、そんなに物凄く描き盡されてゐるのであらうか。"Is this the end of the world? Yes, it is."

私は、西鶴の「置土産」を戀のどん詰り、人間のどん詰りを描いた逸品であると思つてゐるが、しかし、これには東洋流日本流に淡泊な諦めがある。私はもつと深いもつと廣い、ブランデスの謂ふところの、世界のどん詰りを海外の大作によつて感得したい。

ブランデスがイヤゴの悪心を論じたところは、非凡な心理解剖を見る。そして、「リア王」論には筆端風波を含んで、この戯曲に對する論者の驚異の情のたゞならぬことが見える。

しかし、沙翁その人がそんなに非凡なのであらうか。古戯曲が大ざつばなために、それを種にブランデスは自己の夢を見てゐるのではあるまいか。ルナンの耶蘇傳が美しい面白い小説である如く、ブランデスの沙翁論は彼自身の人生描寫であるやうに思はれる。

西鶴や近松は云ふまでもなく、現代の日本の作家をもちういふ風に取扱つたなら、みんながえらくなるだらう。すぐれた評論家は、すぐれた創作家でつる。

とに角、私はシェークスピアの四大悲劇をブランデスに照らして讀直して見たい。

(十四年三月三日)

## 感想片々

### 地方語

二九八

外國語の味ひは充分に分らないに違ひない。芭蕉や近松が、歌麿や廣重のやうに歐米人の翫賞される時が来ようとは思はれない。日本語でさへ少し土地を隔てたゞけで、よく解らないことを、私は旅行するたびによく感じる。かつて、赤倉温泉へ行つた時に、能登の漁夫だといふ數人の同宿の客と、同じ浴槽に浸つたが、彼等同士の話は、側で聞いてゐてもちつとも意味が解らなかつた。カ／＼頭のテツペンから聲が出てゐるやうでその音が甚だ不快であつた。數年間大磯に住んでゐてさへ、漁夫など土地の人同士の話は、私にはよく解せられない。

私の生國の岡山地方の言葉だけは、農夫漁夫その他どういふ種類の人々よつて使はれたにしても、私には完全に解るのであるが、岡山言葉はいゝ感じのする言葉ではない。舌つたるい、力のない、痴呆性の人間の用語にふさはしい。私は、故郷に創作の材を取つた時、地方色を現はすために、止むを得ず用ひてはゐるが、それもところ／＼に挿むのに止めてゐる。眞實に肉迫することから云へば、全部岡山言葉でいゝ譯であるが、さうしたら一々傍に翻譯をつけなければなるまい。先月、加宮貫一氏(?)の「展墓」(?)といふ小説を読むと、岡山言葉がそつくり書かれてゐたので、興味を感じたが、あのくらゐなら愛嬌になるが、長々と書かれたら讀みづらくてたまるまい。

岡山以來の地方語で、私の知つてゐるのは、甲州語と大磯語とである。どちらも關東辯だから、中國筋の言語の言葉のやうにいやしくはないが、泥臭くつて鈍感で、私の耳には快く聞えない。それだから、たまに東京へ出ると、電車の中やカツフェーなどで聞く東京語が、ふと音樂のやうに感ぜられることがある。私自身の言語は、岡山と甲州と大磯との三地方語の混合みたひになつてしまつた。歎息すべきことである。

### 農民藝術

私は地方語を好まない。しかして、私は地方語を驅使して地方人の生活を深刻に描寫し得る自信はないので、企てもしないが、日本にその國民の過半を占めてゐる農民の生活の眞相を描いた文學

の出て来ないのは不思議に思つてゐる。長塚節氏の「土」はいゝものらしいが、その外には、大したものがないさうである。

この泥臭い氣の利かない感じの悪い地方語でも、大天才の手にかゝつたら、生々として来て、我の心が捉へられるやうに響くのであらうが、時々目に觸れる田園小説の田舎言葉の臚列の如きは、たゞ薄汚いばかりのやうで讀むに堪へない。

### 梗概小説

私は自己の舊作を讀むと、小説の梗概を讀むやうな氣がして失望する。これは作品が短いのに由るのではない。筆が急所を外れてゐるやうに思はれるからである。私は人生の梗概しか知らなかつたのであらう。今もさうかも知れない。獨歩の小説は常識的であり、甘い感傷的の趣きがあるが、それでも梗概小説ではない。(附言、私は昔獨歩の作を暗い影の濃いものゝやうに思つてゐたが、あれは大間違ひであつた。獨歩は武者小路氏程度の明るい作家である、酒中日記の如きも、若い心に好まれさうな感傷的な甘い小説である)

谷崎潤一郎氏の「無明と愛染」の第一幕を讀んで、私は大に期待してゐたのであつたが、完成したのを通讀すると、これも梗概脚本たるに止つたので失望した。

世には長さばかり長い梗概小説、長い梗概脚本が多い。



## 月を見ながら

縁側に蹲んで、庭の樹の葉の隙間から空を仰ぐと、満月に近い月が、涼しさうに青空に浮んでゐる。隣家から聞えて来るラヂオは流行唄を唄つてゐる。草叢には蟲の音が盛んで、向うの松林には梟が鳴いてゐる。さういふいろ／＼な物音を壓潰さうとするやうに、力強い波濤が程近いところに鳴つてゐる。

「あの月は舊の七月の、本當の盂蘭盆の月だな」

私はさう思つて、ひとり靜かに初秋の夜を樂んでゐたが、いつとなしに、幼い頃の故郷の七夕や盂蘭盆會の有様が思出された。この季節は、幼時の追憶のうちでも最も懐しいもので、私の心は深い感化を受けてゐるのである。三四十年前のことであつても、風俗習慣が目まぐるしい變化を續けてゐる日本の現代では、一世紀も二世紀も昔の事のやうに思ひ做される。僻陬の故郷でも、今はあの頃の風習は影が薄くなつて、遠海へ出稼ぎに行つてゐる漁夫の歸郷の季節を盂蘭盆と名づけるに

過ぎないらしい。七夕の竹も立てなくなつた。盆踊りは近年全く止めになつて、その代りに素人芝居をやつたり活動寫眞を催したりするやうになつた。

昔、私達は老いたる下男に連れられて、寺の藪へ七月竹を切に行つたを以て、二三日がかりで書いて置いた、薄つぺらな色紙や短冊を紙漉で二本の竹に結へつけて、庭に立てた。短冊の文字の多くは、曾祖父が編纂して自費出版をした「七夕狂歌集」から撰んで寫したのであつた。茄子で馬をつくつたり、玉蜀黍や胡瓜や大角豆などをいろいろな形にして集めたりして、小机の上に乗せて、七夕様に供へた。煎豆を重箱に詰めて置いて、七夕祭を見に来る村の子供に一握りづゝ施すのが常例になつてゐた。夜が更けると井戸で冷した西瓜を皆して食べた。

盆の精靈祭や墓詣りは、祖母の指圖に従つて私達は神祕的興味をもつてよく勤めた。十五日の夜満潮が波戸場の岸を浸す頃を見計らつて、私達は蓮の葉に盛つた供物と共に精靈棚を流した。それが波に漂うて次第に沖の方へ遠ざかつて行くのを月の光りで見ると、靈魂の世界が幼心に空想された。御先祖は、盆の三日間供養したあとでお墓の中へ送り返し、精靈棚で祭つた無縁の亡者は海上へ送り出すのだと、祖母は云つてゐた。

「海へ流されて、しまひには何處へ行くのぢやらう」

私は、無数の靈魂が海上に浮び海底に沈むことを思つて、月夜の海に對して無氣味な感じを起した。

海端の住吉神社の境内では、宵から夜中までも踊りがつゞくので、宵のうちは崩れ勝な踊りの輪も夜が更けると、子供が去つて、熱心な男女ばかりが残つて、調子が揃つて、手の音、足の音、音頭取りの唄聲が、私の寢床まで快よく響いて來るのであつた。故郷の盆踊は手振りが單純なので、私なども、幼い頃にはそれをよく覚えてゐた。一二度踊り仲間に加はつたことさへあつた。

二十歳前に上京してからは、故郷の踊りも他所の踊りも見ることがなくなつたのであつたが、ある年、——今から十數年前に、常陸の國五浦の濱で、珍しい盆踊りを見た。季節は丁度今時分、月の冴えた晩であつた。

美術院の首領であつた岡倉覺三氏が、一時收めてゐた羽翼を張つて、再び美術界へ乗出さうとした時で、一族郎黨とゞもに、その仲間や新聞雜誌關係者などを、自分の隠棲地の五浦へ招いて、門出の盛宴を催したが、その餘興の一つは盆踊りであつた。近村の漁民の一團を呼んで、この地方特

得の踊を踊らせたのであつた。岡倉氏自身も醉顔に手拭を被つて、踊仲間に加はつて、調子外れの踊りを踊つた、しかし、身心ともに疲勞してゐた私には、さういふ異つた光景も面白くは見られなかつた。とても幼年時代に樂んで見てゐた盆踊りのやうに無邪氣には受容れられなかつた。

畫家は繪を書いてゐたらいいだらう。展覽會を開きたければ、仲間うちでいゝ繪を書いて陳列したらいいだらう。政治家や商人見たいに、人を集めて御馳走したり盆踊りを見せたりして、威勢をつけるには及ぶまい。岡倉さんの一部の人が英雄扱ひするのは可笑しいと、私は、氏の頼被りした踊り姿を見て、磊落視するよりも滑稽視してゐた。

「早いものだ。岡倉の踊りを見て以來、もう十五年経つてゐるのだ。」

私は、あれ以來岡倉門下の多くの秀才が、時運に遭遇して、繪の評判と共に、財産をつくつたことを思ひ出した。物質上に成功して別荘をつくつたり、妾宅を設けたりするのを見ると、ある種の日本畫家は實業家見たいなものだ。だから私などでも新聞社の美術部を擔任してゐる間は、五浦の宴會などへも招待されて、買収されようとしたのだ。「しかし、おれも馬鹿正直だつた。七年間美術記者を勤めてゐたのに、知名の畫家に繪を一枚たりとも書いて貰はなかつた。先方からお世辭に書

いてやらうと云つても、要らないと云つて斷つたが、岡倉の奇抜な踊りを見たのを、新聞記者の役得とするやうぢや詰らなかつた。」

月夜の感想がいつか理に落ちてしまつた。耳を傾けると、ラヂオは大正十一年頃の流行唄だと云つて「私もお前も枯すゝき」といふ唄を唄つてゐた。大正元年以來の流行唄の演奏が今は終りに近づいてゐるのだ。

「踊り目が切れたよ。くされ繩かよ、また切れた。」と、子供の時分に聞いた踊唄が思ひ出された。

私は樹の間を離れた月を仰いだ昔の日本人には、月といふものがどれほどに親しまれてゐたのであらう。王朝文學などには殊に月の感じがよく書かれてゐる。今日讀んだ辨ノ内侍日記には、月の日記と云つていゝくらゐに、どのページにも月のことが、何とかと書かれてゐる。電燈などのなかつた時代には、月の光がことに有難かつたのであらうが、詩や歌がかうも月のことに拘泥してゐるのを見ると、頭の單純さに少し呆れて来る。月の歌が月並の平凡に見られて来る。

「見るところ花にあらずといふことなし。思ふところ月にあらずといふことなし。」と、芭蕉は風雅の秘訣を説いてゐるが、私は、かういふ美しい月に對してさへ、美しい天地の中へわが心を融込ま

すことは出来ないのである。とても芭蕉流の發句などはつくれさうでない。

私の曾祖父は、「七夕狂歌集」を大阪の書肆に頼んで印刷させたのであつたが、重患に罹つて、製本した歌集が届かないうちに死んだので、病中の謔言に「もう大阪から舟が着いた筈ぢや、早う見て來い。」と、絶えず云つてゐたさうである。その話はよく祖母から聞かされて感動してゐたのだが、年齢を取つて、その歌集を讀むと、平凡愚拙甚だしいもので、鮮明な印刷や、破つても破けないほどの紙質が、貧しい内容にくらべて勿體ないやうに思はれた。曾祖父は柄にない風流心と虚榮心とから、こんな無駄なことをしたので、今の文學青年の新作小説の出版と弊を同じうしてゐるのである。

芭蕉はえらかつたであらうが、芭蕉形の風流の模倣者を續々と出して、今日に及んでゐる。「奥の細道」の如きも、頭から偶像視しないで、讀んだら、芭蕉の常識的な風流心が今の目には愚かしく見えるではないか。この人は温和で前代の流れに従つてゐた人である。鹽釜神社の秀衡（？）の燈籠を見て、名を末代に残したことに感心したなどは、俗物の考へではないか。「細道」の文章を簡潔だの印象的だのと云ふのは、私には全然首肯しかねる。芭蕉の紀行はどれも、多少の感傷的の味ひ

があるだけで、概して蕪雜で、印象的でも描寫的でもないのである。私の説に反対の人は、雷同癖古人崇拜癖を止めて、も一度虚心に読み直して見るがいゝ、簡潔だの印象的だのといふのは、西鶴の文章のことなのだ。

徳川時代の學者の書いたものを読むと、彼等の社會觀人生觀道德觀が、どれも孔子の劃した範圍を出でないのに呆れる。熊澤蕃山、山鹿素行、山崎闇齋、大鹽中齋、など、凡庸を脱して、徳川の官學に盲従しなかつたのであるが、どれも孔子に楯突くことはしなかつた。何千年前の支那人である孔子の説く所を頭から盲信して、それに對して一點の疑ひを寄せることを、なぜ躊躇したのであるか。彼等は時代の反抗者らしくつても、その實時代の流行を離れることは出来なかつた。人間の個性なんて微弱なものである。

風流心のない私は、秋の夜の月を見ながら、つひにこんなことを考へだした。

## 田園雜記

この記憶に間違ひはないと思ふ。何年か前に中澤臨川氏はある雜誌で、今の日本の青年は維新當時の青年や、支那現在の青年のやうに、ある一つの目的に向つて全力を注いで奮闘し得られるやうな境遇に置かれてゐないことを歎じてゐた。死に身になつて働けるやうな問題がわれゝの目の前に迫つてゐないことを歎じてゐた。

私は舊臘の大正日日新聞へ連載された氏の情熱の籠つた論文を興味をもつて読みながら、ふと以前の氏の言葉を思出した。世相は何時の間にか變つて、全力を盡して戦ふだけの價值のある問題が氏等の目の前に現はれて來たのである。尊王攘夷か開國佐幕かといふ維新間際の日本の社會へ現はれたやうな力強い問題が湧いて出て教養ある人々は云ふまでもなく、新聞の讀めるくらゐな人なら、誰れでも多少それについて意見を述べるやうになつた。

私も月々の雜誌にいやと云ふほどに掲げられてゐる知名の人々の議論を努めて讀んでゐるのであ

るが、かういふ問題については少しも自分の魂が動かされない、死に身になつて主義のために戦つてゐる人々を羨ましく思ふばかりである。

資本家撲滅とか共産主義とかいふやうな大袈裟な事はさて置き、労働神聖といふやうな呼聲が盛んになつたのにつき、自分と労働について考へて見る。土に親しむことは尊いことにされてゐて、私も都會に住んでゐる間は、自分で野菜をつくつたり花卉くわきを培養したりして大地に親んでゐたら、沈滞腐蝕してゐる自分の頭にも新生命が湧いて来るかも知れないと、をり／＼空想してゐたのであつたが、田舎へ歸つて自由に望み通りに土に親しめる境遇に身を置いて見ると、菜園でも畑でも、家の前後左右の空地あきでも勝手に使へるやうになつて見ると、氣無性きぶせうになつて、裸足はだしで鋤を持つて其方へ進んで行く氣にはなれなくなる。今度ばかりではない、何時だつてさうだ。少年の頃まだ東京を知らない時代に、胃病の治療のために毎日裏の畑を耕したことがあつたが、その時だつて不承不承ふしょうふしょうに鋤を動かしてゐたので、一定の時間を辛うじて経過すると、サツサと泥足どろもを洗つて机の側へ歸つたのであつた。そして、八犬傳とか弓張月とかいふやうな小説あるひは新着の雑誌などを現うつを抜かして讀耽つた。田舎に生れて、しかも多少畑仕事をした經驗があつても、私はつひに土に親しめ

ないで一生を終るかも知れない。日に二時間くらゐの労働なら誰れでも楽しんでやれると、さういふ楽しい世界を招かうとして説いてゐる人もあるが、少くも私だけは一時間でも半時間でも労働を樂めさうではない。

この頃も毎日缺かさないうで、あるひは山へ登り、あるひは濱邊はまべを散歩し、運動は怠らないでゐるが、鋤を持つのは大儀だ。丘の上から内海の島々を見渡して時を過すことはあつても、其處等の薪を集めて背負つて歸つて家の手助けをするやうな労働的興味は全く起らない。

私は皆んなが手足てあしを使つて何かしてゐるのを傍觀しながら、懷手なつかしてブラ／＼歩いてゐる。そして、やがて日本も、自分は懷手してゐながら小作人から收穫の幾分を取上げて生活する地主が撲滅され、自分で労働しない者は生存して行けなくなる時代が来るかも知れぬと夢のやうに考へてゐる。……人間の世にはあんな時代もあり、こんな時代もあると考へられたが、一つを以つて他よりも幸福な時代であらうとは私には考へられない。

懷手して歩いてゐるうち、時々通りがりの人から話しかけられることもあるし、村の老若男女が互たがひに聲高こゑたかに話合つてゐるのに耳を留めることもあるが、さういふ時にはこの地方の言語音調の

舌たるい鈍重なのを厭はしく思ふやうになつた。上方言葉の優雅な調子を失つてゐながら、蠻的な強い調子も加はつてゐない。いつそ九州とか東北とかのやうな言葉だつたら際立つた特色があつて面白いのであらうが、その邊の地方語は何だか煮切らない中途半端な感じがする。

地方々々の民謡といふものは興味のあるもので、子供の時分によ漁夫唄などを面白いと思つて聞いたことがあつたが、この頃、小さい村の中のみ蟄居してゐて音楽に餓ゑてゐるため、をり／＼耳に觸れる唄聲に耳を留めてゐると、一つとして記憶に價するものに接しない、今私が書齋にしてゐる部屋と壁一つ隔てた隣家からは、いろ／＼な唄を口ずさんでゐる若い女の聲が屢々聞えて来るが、聲はいゝのに唄の文句は淺間しいほどに詰らない。「山王のお猿さん」だの、「カチューシャ」だの、自己流に唄つてゐるのは、まだしも我慢出来るとして、

「芋々、人參々々、牛蒡々々、ゴボゴンボ」と、繰返し／＼、妙な節をつけて唄つてゐるのだから溜らない。帽子製造か何かの坐業をしてゐて、疲勞をまぎらすために唄つてゐるのであらうが、あれでもその役に立つのであらうか。労働文學とか労働音楽とかについて私は考へた。

風の音、雀の轉り、鶏の聲、「芋々」の唄の外に、もつと私の全心が動かされて目を醒まされるやうな唄を聞きたい。

私に取つては死の恐れを減さない限りは、社會がどんな風にならうとも、眞正の幸福は得られなだらうと思はれる。冤罪で死刑に處せられようとも、正義のために犠牲的の死を遂げようとも、あるひは近親知友に看護され名醫の診察投薬を受けた果てに温かい病床で眠るが如く死なうとも、死はつまり同じだらうと思つてゐる。

人間の煩惱、執着、愛と憎み、生と死、私は懐手して食を得ながら、十年二十年の昔と同じやうに今なほさういふ事を考へては心を暗くしてゐる。當今の喧しい問題でもさういふ人心の現はれとしてのみ私の興味を惹いてゐる。

労働に興味をもたない私は、田舎にゐても相變らず雑誌を讀んだり古今の雜著を讀んで時を過ごすことが多い。少年時代に愛讀した「國民之友」の綴込みや、馬琴や種彦をも搜出して、昔の記憶を呼び起しながら、讀んだりしてゐる。面白いことにはさういふ書籍を持つて來るために、祖先傳來

の本箱を開けて見ると、その中には私の初期の愛讀書の馬琴などと並んでダーキンが入つてゐる。「種の起原」の原本と譯本、「航海日記」その他氏の著書の殆んど全部と、浩瀚な氏の傳記さへも備へられてゐる。年少な末弟の愛讀書なのだ。私は二十餘年前の自分の心持と末弟の心持とを比較しながら、ダーキンと馬琴とを讀んでゐる。

私の興味はこの偉大なる生物學者の動植物の微細なる研究よりも、ダーキンその人の傳記の方に惹かれる。彼れの日常生活が彼れの子によつて微細に書かれてゐるのが面白い。それから彼れの航海日記を讀むと未開國の風土について懐かしみが覺えられる。同じ書架にあつたりビングストンの「アフリカ探險」を讀むと、一層異郷の光景が明かに浮んで来る。將來さういふ土地の蠻人が、いろ／＼な問題に惱されてゐる文明社會を征服するやうになるのぢやないかと思はれたりする。この「探險記」を讀んで見ても、アフリカ人は自分を不幸とは思つてゐない。強烈なる日光の下で、人類墮落以前の生々とした生を樂んでゐる彼等に對して、何のための教化ぞと思はれる。

二十年前の古い「新小説」を讀んだ。硯友社末流の氣取つた小説二三篇の外に、嵯峨の舎主人の「巨漢」といふ翻譯が入つてゐた。アンリーワレッツといふ、今まで聞いたことのない作家の短篇で、譯文も巧みではないが、私の嗜好から云へば、近年これほどの傑れた作品は讀んだことがないと云つていい。教養のある巨漢がふと旅廻りの女藝人に魅せられて、つひに旅から旅を流浪するといふ筋で、極めて自然に描かれながら、骨を抉られるやうなところがある。「巻を捲うて浩歎する」といふ氣持を久振りに經驗させられた。一生女のために少しも虚げられた覺えのない人はこの私を晒へと、巨漢たる主人公が涙を含んで言放つた言葉は、「罪なき者この女を打て」と云つた基督の言葉よりも一層つよく私の胸に響いた。それほどに傑れた作なのである。小説もこゝまで行けば足り私と思つた。

歳を取るにつれて西鶴が面白くなる。「置土産」と「萬の文反古」を私はまた繰返して讀んだ。……私はまだかういふ世相を西鶴のやうに軽く靜かに見過す譯には行かないが。

新年の雑誌の小説も大分讀んだ。谷崎精二氏の「別宴」が今も思ひ出される。作者の狙ひどころと、私があるを讀んだ時の感じ方とは違ふだらうけれど。(大正九年二月五日)

## 子規について

明治時代に文學の上に跟跡を残した人々の眞價を、私はをり／＼顧みることがある。それ等の新しい土地を開拓した先輩に對して、敬意と親しみ々寄せることもあるが、時代を隔てゝ見ると、膚淺にして取るに足らないのを歎ずることが多い。近年綠雨をも透谷をも讀んだ。過去の知名の文豪のうちで、子規だけを、私は知らなかつた。

子規と云へば、私は思ひ出したことが二つある。その一つは、小杉天外氏が小田原に住んでゐた頃、私は初めて箱根に遊んで、歸りに氏の宅を訪問して、御馳走もよばれ、文學上の氣焔も聞かされたのであつたが、其時子規の死亡の通知が來たとかで、「香奠を届けて呉れ」と、天外氏は私に包んだものを渡して頼んだ。私は歸郷すると直ぐに根岸の子規の家を訪ねたが、縁側に數人の青年がゐて、私の渡すものを、頭を下げたて受取つたことを、今も覚えてゐる。當時の私は、子規といふ人に對すること路傍無縁の人に對すると同じ感じだつたので、小石川の自宅から根岸の家まで、

人のお使に行くのを面倒臭く思つただけで、従つて家の様子等よく見もしなかつた。

も一つ思ひ出したことは、島村抱月氏が、ある時、子規と鐵幹との間に文學上の論争があつたことを話して、彼等は美學の知識がないから、主觀客觀の別がよく解らないのだと云ふ意味で、その説明をした。「赤い棒白い棒と落ちにけり」といふ子規の俳句が實例として擧げられた。俳句については最も知識の乏しい私でも、此の一句だけは二十年後の今尙覚えてゐるによつても、抱月氏の説明がいかにも念入りであつたかと察せられる。

その後、次第に、子規といふ人は、明治の文學を語るに於いては見のがすべからざる重要な一人であるのに氣づくやうになつたのであつたが、それは、文壇人の筆や口によつて間接に教へられた爲めで、私自身が直接に子規の文章や俳句和歌の類を讀んで感じたものではなかつた。

今度全集が出たので、子規の一生の功績を完全に學ぶのに都合がよくなつたが、私は和歌俳句よりも、先づその隨筆が讀みたかつた。それで島田青峰氏の編纂した「隨筆集」を買つて、汽車の中や劇場の中や洋食屋の卓上で通讀した。そして、はじめて子規その人に面接したやうな感じがした。

「墨汁一滴」「病臥六尺」など、すべて彼れの隨筆は、「つれづれなるまゝに」の多くの隨筆とはまる



で趣がちがつてゐる。誰れでもさうだらうが、ことに私は、かういふ悩みを受けてゐる人の文飾のない述懐には心を動かされるのである。

他の病人の記録と異つて、子規の隨筆のえらい所は、客觀性に富んでゐることである。宗教にも迷信にも捉はれず、氣休めの療法をも信ぜず、苦痛を苦痛として、感じてゐることである。「閻魔大王との問答」、「人の希望の次第に小さくなつて、それが零となる時を涅槃救ひといふ事」など、甚だ面白う。

併し、私が感動したのは病苦の記録である。その時々、の心持の記事である。「今夜の地獄思ふだに苦し」とその苦惱に襲はれるのを豫期しながら、稍安らかな間に、來今の内にと、原稿を書いたり畫を描いたりしてゐる所に、古來今の不朽の人生苦を私はひしく感じるのだが、「子規の文學論、その他の意見については、殆ど感動した所がない、やはり、二十年前の時代の幼稚さを見るばかりである」寫生を重んじ理想主義を輕んじたのは、一卓見で、時勢に先だつてゐる譯であるが、それもたゞ一步であつた。……ことに彼れは、結核菌が人體の中に威力を恣にしてゐるのを體驗しながら、そしてそれを客觀的に叙しながら、人間に宿つてゐる、あるひは宇宙に散亂してゐる、さまざま

本能慾望などが、結核菌以上に威力を恣にしてゐることは感じなかつた。寫生は紅い椿白い椿と落ちるのを見て落ちると書いたゞけだつた。

近松をけなして、西鶴を推したのはいゝが、西鶴を「今日より見れば實に幼稚極る作のみなり」とし、只文章の點より彼れを取つてゐるのを見て、私の文豪子規に對する尊敬は零に近くなつた。西鶴こそ本當の寫生をしたのぢやないか。人間の内面と外面との本當の寫生をしたのぢやないか。平賀元義の輩何ぞ云ふに足らんや。

子規隨筆中取るべきは病苦録だけである。彼れの和歌俳句については、他日暇の多い時に研究したいと思つてゐる。

## 脚本について

この頃は新しい脚本が頻繁に雑誌の上に現はれるやうになつた。以前は読み物としての脚本は歓迎せられなかつたのに、近年は小説同様に読者に読まれるやうになつたのが、脚本流行の一つの原因なのであらう。劇場でも新脚本を採用しようとして、以前よりも作家を重んじるやうになつたのもその一つの原因なのであらう。

私も當分脚本を續けて書かうと思つてゐる。私は幼少の頃から傳奇小説の類を愛讀してゐたのであつたが、小説作家として一生を過さうとは思つてゐなかつた。芝居をも好んでよく觀て來たのであつたが、自分で脚本を書きたいと思つてゐたのではなかつた。それで小説の方面で運よく多少の成功を得た如くに、脚本の方でも一つ當てゝやらうと云ふやうな野心を今起してゐるのではない。柳の下にいつも鱒のゐないくらゐなことは、私はよく知つてゐる。

しかし、私は當分、雑誌社に拒絶されなにかぎり、小説よりも脚本の方に筆を採らうと思つて

ゐる。昨日今日のことでもないが、私は小説には飽いてゐる。どうせ同じ人間の書くものだから、内容は同じことであるにしても、せめて形だけでも違つたものを取扱つた方が、氣持が新たになつて、執筆の際の倦怠からいくらか脱出されさうに思はれるのである。

實演の可能性のない脚本を作るのは、一面徒勞のやうであるが、自分の腦裡につくられた舞臺で自分の思ふまゝに人物を活躍させるのは、自分一己に取つて興味のないことではない。私は上演意識をもつて筆を採らうとは思はない。若しも日本今日の實際の舞臺に上すに堪へるものが出來たなら、それはまぐれ當りである。

「影法師」といふ拙作は、ふと思ひついて一氣に書流したもので、自分でも變なものだと思つてゐる。もつと手を入れたら、辻褄の合ふものになるだらうと思つたのだが、黒人氣取りで舞臺の都合など考へるのはいやになつたので、そのままにして置いた。

時事の文藝欄に出てゐた片岡鐵兵氏及び古賀龍視氏の批評を讀んで、作者たる私は辯駁の餘地がないやうに思はれた、二氏が指摘された通りに、寫實的な場景と夢幻的な場景とが不釣合で、讀者にチグハグな印象しか與へないのであらう。これは私の計畫が悪いので、腕のある作者なら、あれ

を破綻なく、却つて意味深く書きこなしたであらう。

三二二

表現派とはどういふ作風であるか、私はよく知らないから、そんなものを真似る氣はさらにないのである。神祕的のことを振りまはす意圖をも私は有つてゐない。私は常識的に過ぎるかも知れないが、自分で感じもしない神祕的な文句を弄したものは嫌ひである。マーテルリンクをさへ私はあまり好いてゐない。未來派とか表現派とかが西洋にこの頃現はれたと云つて、直に底の見え透くやうな淺墓な眞似事をした藝術を好まない。私は、多少變つたやうな事を書くとしても、それは私の頭に浮んで來る空影空想を、自分流儀で書くだけである。

私は小説に於てチエホフを尊重してゐる如く、脚本に於ても、イブセンのよりもストリンドベルトのよりも、この人のを愛誦してゐる。しかしそれをお手本にする氣はさらにないのである。先頃ダンセニーの戯曲集を讀んで、非常に面白く感じたのであつたが、しかしこのくらゐなものなら、日本人にでも書けさうに思はれた。彼れの戯曲ははじめ讀んだ時ほどには二度目には面白くないのである。チエホフの如く、讀むたびに新な面白味の出て來るものとは違つてゐる。小説でもアンドーレフのやうな作風のもものは、讀んで飽き易く、書いても書き易く、チエホフやトルストイの作の

やうなものは、いつ讀んでも感歎させられ、書かうとしても眞似られないのである、私は今日までチエホフの小説のやうなものは、つひに一篇も書き得なかつた。脚本に於てもさうだらうと思はれる。それで、私は、自分の心に映る快不快な空影空想を、筆の動くにまかせて、脚本の形を借りて書きなぐるつもりである。現代の名優諸氏によつて上演されるべく、何處かの劇場から頼みに來ないかと、固唾を呑んで待設けてはゐないので、むしろ、雑誌編輯者に眉を顰められはしないかと内心恐れてゐる。

## 雑感

私は今朝からMホテルの一室で寝たり起きたりしてゐる。雨に風が加つて戸外へ出るのがおおくふだ、机上には、抱月隨筆集（これは今月の早稲田文學の相馬御風君の批評文を読んで、ちよつと興味を起して昨日買つて來たもの）と、ミルトンの失樂園（これは昔からもつてゐても殆ど讀まなかつたもの）と、新潮と文藝日本（家を出かけに郵便配達から受取つたもの）と數種の新聞とがある。私は取合せの變なこれらの古本の文字を讀んだり、窓外に活動してゐる人生の一場景をべつ見したりして半日を過した。この間の氣もちは短篇に書ける。三四の雜誌から寄稿を依頼されてゐるから、「文藝日本」に紹介し論評し、見本までも出してゐるコントとかいふ新體を眞似て書かうかなど、思つた。何よりも短くて早く片付いていゝ。私は、宇野君が合評會で感歎してゐるやうな達筆者ではないので、根氣にも乏しいし、實際は宇野君などの何分の一も書けないのである。だからコントが流行れば都合がいゝと思つてゐる。今度久振りに、三百枚ばかりの長篇を、ある週刊誌に寄稿し

ようとして筆を採りかけてゐるが、さながら富士登山をやりかけてゐるやうだ。

私の近作脚本はよくわからんといはれるが、ミルトンの失樂園の如きは、外國の古代の作品であるに關はらず、掌を指すが如くよくわかるから妙だ。この古詩にうたつてゐる所が直ちに我々の胸に迫つて來る。徳富氏がかつてミルトンを論じて、彼れを杜甫に比べてゐたことがあつたと記憶してゐるが、さういふ批評は外形的である。エバが女の淺墓からへびに誘惑され、アダムをも卷添にした経緯は、女性の心を見透し婦人に卷かれる男子の心をてつけつして妙を極め、ストリンドベルヒ、あるひは日本現代のすぐれた作家の女性描寫などを前において論すべきものである。ミルトンはストリンドベルヒの如く三度も妻を代へたほどで、女に苦しめられた實感に富んでゐる。だから女をよく見てゐるので、ダンテの如く一人の女を一生夢想し美化した詩人とは違つてゐる。自分だけ罰を受けて樂園を追放されて、あとで夫が他の女と一しよになるやうでは妬ましいから、自分の落ち行く不幸な境遇へ夫を引ずり込まうと企て、アダムもどうにも斥けることが出來なかつた有様が、餘蘊なく描かれてゐる。サムソンとダリアなども面白い。

「抱月隨筆集」は豫期したほど興味がなかつた。相馬君のいつてゐるやうな意味で個人的感想は

湧いて来たが、抱月氏の隨筆は硬くつて貧寒である。編者が推讃してゐるやうな名作家とは決して思はれない。しかし、人としての抱月先生には、私は敬慕親愛同情の感が激しく寄せられるのだ。私は明治以來の文學者のうちでは、抱月、秋江二氏について最も多く人生を學んだといつていい。人としての秋江君、作家としての秋江君を知つたことは、私にとつては萬卷の書冊を読んだよりも、人生について學ぶ所が多かつたやうに思はれる。

想起す。花袋秋聲五十年の祝賀會のあつた時、我々が兩氏に捧げた記念文集の序文に、藤村氏は、氏獨得の言廻しで、「兩氏は艱難の道を通つて来た」と書いてゐたが、それに違ひない。しかし、艱難の途はかの兩氏だけがたどるべく運命づけられたのではない。五十年も世に生きたものは、政治家でも實業家でも、農夫でも漁夫でも烈風に帆をあげたやうな日を送つてばかりゐられなかつたに違ひない。艱難はお互にそれ／＼の形において經驗されて居るのだ。たゞ文學者は筆が動かされるために、自分の艱難を巧みに言現はされるから、他の職業の人よりも多少鬱憤が晴れる譯だ。

秋江氏も艱難の道を経て来た一人である。私は早稲田ではじめて氏に會つた時から、卒業後何年かの間、氏がどの方面でも一仕事を仕遂げる人だとは豫想しなかつた。氏の知友は大抵はさう思

つてゐたらしかつた。根氣が乏しい。忍耐力なんかまるで缺いてゐる人のやうであつた。責任觀念も薄いやうに思はれた。有爲の青年としてはだれの目にも映らなかつた。氏には嘲笑侮蔑は付きものであつた。例の痴情小説によつて多少文才を認められるやうになつてさへ、安つぽく見られてゐた。私は、秋江氏の作品がその特異の價値を認められるのは、死後を待たなければならぬと、ひそかに思つてゐたので、多くの人々によつて五十年の祝賀會が華々しく舉行されようなどは夢想だにしなかつた。人間は長生をすべきものである。

文學藝術の眞價は絶對的には分らない。私に取つては、<sup>秋</sup>私江君の作品は、その五十年間の實生涯と相呼應して、現今のたれの作品よりも、最も切實に私の胸に觸れるのである。最近の「第二の出生」も、蕪雜な、あわたゞしい書振りではあつたが、そこに、彼れ一人だけではない、人間全體のうめき聲を聞くやうな感じがした。

私は、殆んど三十年も前に、早稲田で擬國會があつた時に、早稲田の寄宿舎の一室で、當時慶應義塾に學んでゐた秋江氏に初めて會つて、その落着かない態度と急がしさうな話振りを可笑しく思つて以來のさまざまの印象を思ひ出す。思出しても冷汗の出るやうなことや、獨りで微笑まれるこ

とがいくつもある、文科卒業後、二人だけが東京に留まつて文學をやるとなつてゐたので、坪内先生が一夕二人を呼んで、處世の心得を訓戒され、晚餐をも饗應された。あとで、士行君の「保名」などを見せてもらつたことが私の記憶に残つてゐる。私や秋江君も東儀、土肥、水口の諸氏の仲間に加はつて、大久保余丁町の舞臺や清風亭で芝居の眞似事をやつたものである。あの頃氏はちよつと清元を稽古して「黄金榭にて米はかる。……しやのしやの袴しやの袴」など、口ずさんでゐた。氏はあの頃、私のやうに陰性ではなかつたので、若し氏が、生活が豊であつたら、面白可笑しく通人として生を過したか知れなかつたのだが、さうしたら藝術は駄目になつてゐたであらう。

學生時代から女性に對しては觀察が細かつた。私は、女性對秋江については、直接にはその前半期を多少知つてゐるだけで、その後半期は世上のうはさや作品を通して知つてゐるだけであるが、その光景が目に見る如く想像されるのである。私は氏のいはゆる文學は好奇心だけで讀んでゐるのでなくつて、人生記録として心讀してゐるつもりである。どの作家もさうであらうが、秋江氏も、男女關係を取扱ふにおいて、自分の都合で見過してゐて、相手を正解してゐないところも可成りあるやうに思はれてならない。

「第二の出産」の子供の生まれる處の描寫の如きは、この頃讀んだどの作品よりも私の頭によく残つてゐる。作者の苦しみもよく解つてゐるが、しかし、さういふ苦しみから新しい世界が開かれるのであらうから、作者の前途にはあるひは光明が輝くのかも知れない。

## 一日の旅

丁度三十年前のこの頃であつた。私は上京した年の最初の夏季休暇に、歸省の途中、十日ばかりを興津で過した。基督教青年會主催の夏季學校に出席するため、講演のうちに、内村鑑三氏がカーライルの長講をするといふことが、私の熱情をそゝつたのであつた。

その後、頻繁に東海道を往復してゐるので、をりくゝ過去の記憶を思出して、一度興津に下車しようと思つたこともあつたが、急行車はそこに止らないので、乗換へなどが煩はしくて、今までつひに望みを遂げなかつた。

「日歸りでもいゝから、ちよつと興津へ行つて來よう」私は先日來さう云つてゐたが、机上の仕事が一先づ片附いたので、それを機會に、かねて胸中に蓄へてゐたこの小さな企てを實行することにした。

それは、大磯で海水開きのあつた翌日（七月四日）であつた。前日は眞夏の烈しい日が照つて、

私も今年最初の水泳を試みて、久振りに食慾の増進を覺えたのであつたが、翌日は朝から小雨が降つて、蒸暑くつて梅雨期らしい空模様であつた。でも、私は豫定通りに出掛けることにした。

汽車は空いてゐたので、私は横になつてゐた。朝飯は何も食べなかつたので、空腹を感じたが、先方へ着いてからおいしいものを食べるつもりで我慢してゐた。車中の食物として西洋辨當はよく賣だしたらしいが、アイスクリーム、コーヒー、紅茶、それに、今年はソーダ水までも賣られるやうになつたらしい。賣子のさういふ呼聲が私の耳についた。どれか飲みものゝ一つを買はうとして頭を上げたが、雨の降つてゐる窓外へ首を突出して、どれにしようかと、賣品を物色してゐるうちに汽車は出てしまつた。

四時間もかゝるノロい汽車は退屈であつた。やうやく興津に着いた時には、篠つく雨で風も添つてゐた。しかし、私は町を見ようと思つて、風雨の中を宿屋まで歩いた。三十年前とは町の様子が異つてゐて、記憶と一致するところはなかつた。ふと讚美歌が聞えたので、見ると、小さな家の土間に、靴や下駄が十足ばかり並んでゐて、上り口に若い男女の後姿が見られた。同じ並びで二三軒距てゝ、形までも同じやうな小さな家には藝者の檢番の札が掛つてゐた。どんな町にもある警察署

と郵便局も目についた。しかし、私が志してゐる宿屋は容易に見當らなかつた。

夏季學校の講堂に當てられてゐた家も、何處であつたか見當がつかなかつた。が、民家の、あまり廣くない一室で、數十人の青年に圍繞されて、元良勇次郎氏や植村正久氏や平岩愷保氏などが講演をしたり雑話をしたりしたことが思出された。當年十八歳の私には、それ等の六ヶしいお説教や講義は十分に理解が出来なかつたのだが、たゞ幼稚な崇拜心から謹聽してゐたのであつた。それでその時私の全心を惹寄せて傾聽させ感奮させたものは、ひとり内村氏の「カーライル」であつた。當時京都に蟄居して窮乏の生活を過してゐた氏は、夏季學校に招聘されたことを喜んで、カーライルに關する新著を外國から取寄せて研究してゐたのださうだ。「内村さんは報酬をいくら寄越すかと、はじめから率直に要求するからいゝが、××さんなんかは、そんなものは入らんやうなことを云つて、腹の中では報酬の少いのを不平に思つてるんだから困る」と、幹事の一人が云つてゐた。その頃は、宗教家は勿論文學者だつて、報酬のことを口に出すのを恥ぢてゐたのである。私なども最近までは、一切先方任せで、此方から強く要求したことは一度もなかつた。文學をやつてゐては、いつまでもしつかりした生活の基礎が立たなかつた譯である。

きまつた講演よりも座談が面白かつた。青年を相手に氣焔を吐くことの好きな内村氏は、頻りに毒舌を弄してはカラ／＼笑つて、京都の隱遁生活の鬱憤を洩らしてゐたが、かういふ座談の折などに、内村氏に向つて自己の意見を持出して議論の種にする者は、大抵は大學生であつた。私が三十年後の今、當時の光景を思出しても、數十人の聽講者のうち印象のハツキリ残つてゐるのは角帽を被つた人々である。彼等が何となく幅を利かせてゐた。内村氏でさへ、議論の相手にはさういふ人達を選んでゐた。私自身も、彼等を、私などよりも一段傑れた學校に學んでゐる人として多少の羨望と敬意とを寄せてゐた。……私は新聞記者時代には、官學の世間的威力を痛感したのであるが、三十年の長年月を経て、學問——殊に文學——に於ては實力本位になりかゝつてゐる今でさへ、まだ官學の權威は多少の名残を留めてゐる。世間の待遇がちがふやうに思はれる。菊池文學士や芥川文學士や久米文學士は、廣津早大學士宇野早大學士などよりも、世間に乗出すに當つて少くも一步の得をしてゐると確信してゐる。文壇では差別がないにしても、通俗的な世間の見る目は違つてゐる。そしてそれは、官學は私學よりも資本を多くおろしてゐるのだから、世間が重く見るのは當然なのである。……私は今でも、學校を選ぶには、官立へ入れと青年に勸める、選抜試験に落第して



止むを得ず私學へ入學しながら、卒業後平等の取扱ひを望むのは、蟲がよ過ぎる譯である。私は當時の早稲田の校長鳩山和夫氏から卒業證書を授與されたのであつたが、鳩山校長は自分の息子を、早稲田の法科へは入れなかつた。

三十年前、夏季學校の學生は數軒の旅館に分宿されたのであつたが、私などの宿はよくない方で、水口屋へ割當てられた連中が遙かにいゝ待遇を受けてゐるのを羨ましがつてゐた。それを思出して、私は今度はその水口屋で午餐を食べることにしてゐた。

入浴後に廊下の椅子に腰を掛けて休息したが、海面は雨に鎖されて三保の松原も見えなかつた。昔、龍華寺から三保へ行つて、それから久能山に登つて、歸りに安部川べりで名物の團子を食べたことなどが思出された。三保までは内村氏も同伴されたので、私は氏の後に喰付いて、氏が同行者の一人に向つて、新島氏の悪口などを無遠慮に云つてゐるのを謹聽してゐた。氏はカーライル講演の際に、樋口一葉について皮肉な批評を下してゐた。一葉の死んだのは、その年の冬であつて、「たけくらべ」「濁江」「わかれ道」などの傑作を續けて出して、文壇を驚嘆させてゐた時分であつたが、遊戯文學を蔑視してゐたその頃の私は、彼女の作品などには、わざと目を留めないでゐたので、内

村氏の批評もそのまゝに受容れてゐた。

先日来、「一葉全集」を通讀したが、その作品から受けた感じは、高山樗牛の作品から受けた感じに似通つてゐた。感傷的な點で、時代の悩みを感じてゐるらしい點で。……

昔は蘇鐵を見るために龍華寺へ行つたのであつたが、今度は有名な樗牛の墓に詣でるためにそこへ行かうと思立つた。それで、食後自動車を雇つて、大雨を冒して出立した。

蘇鐵とシヤボテンのある寺の庭を横切つて石段を上ると、成程眺望のよささうな所に綺麗な墓があつた。「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と題した石碑が立つてゐるのかと豫想してゐたのに、それは墓の蓋になつてゐたので面白く感じた。案内に立つた運轉手は、晴天なら、富士の眺めがいい。三保の松原と相對して、高山博士の最も氣に入つた景色になつてゐると説明した。日本の文學者でこんないゝ所で永眠してゐるものはあるまい。若くて死んだことゝ、風光明媚な地域に墓を持つてゐることが、樗牛の名聲を何時までも保たしめる一つの理由になつてゐる。

私は滅多に買ったことのない繪葉書を、寺で買った。去年ある所で、田山花袋氏が樗牛の筆跡を評してセンチメンタルだといつたのを聞いたが、今、遺墨の繪葉書を見ると、花袋氏の評語が適確

に當つてゐることが感ぜられた。「如何にうるはしく空にかゞやけばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ。思へば惜しき過去なりき」といふ繪葉書面の文字は、感傷的といふよりも、むしろ甘つたれた筆跡である。ちよつと見るとうまいやうだが、長く見てゐると、その甘さが厭はしく思はれる。その文句の意味とよもに、少年向きのものである。

樗牛の風采は立派であつた。私は早稻田で一年ばかり、彼れの教へを受けたのであつた。當時の早稻田は、官立大學の卒業ほやくの學士を講師に迎へてゐたので私などは、桑木嚴翼、蟹江義丸、松本文三郎、波多野精一などの諸先生に對して一日の師恩を負つてゐる。そのうちでは、高山先生は、文壇の偉才として學生に何かの刺戟を與へてゐたらしかつた。私は、在學中一度、徳田秋江君に誘はれて、西片町の先生の寓居を訪問したことがあつた。先生が鎌倉の長谷のお寺の一室で病氣の静養をして居た時にも、一度訪問した。しかし記憶に残るやうな話は何も聞かなかつた。それに、内村先生の口から出る言葉は、一語も洩らさないで心に留めて置かうと心掛けてゐたその頃の私も、樗牛先生の言語文章には左程重きを置いてゐなかつた。

樗牛は、讀賣新聞などに寄稿してゐた青年文士を「青二才」呼はりしたので寄稿者の一人たる中

島孤島君はそれを憤慨してゐた。樗牛の壽命がもう二三年延びたなら、私なども、彼れの筆で「青二才」呼はりされたに違ひない。

しかし、今日になつて、樗牛の文章と所説とを讀直すと、その文章と所説とに「青二才」のほひのするのを、私は感じるのである。彼れは、「青二才」のまゝで死んだために、永久に老いないで、今なほ年少の讀者に喜ばれてゐるのであらう。

「議論は羽織の紐のやうなもので、どちらへでもつく」と、樗牛が云つてゐると、秋江君が嘗て私に話したことがあつたが、羽織の紐の譬喩はうまくはないが、その意見には、私も同感である。政治問題でも文學問題でも、議論をするに當つて理窟はどうにでもつくものだ。

風雨はますます烈しくなつたので、私は久能山へも三保へも行かないで、江尻から汽車に乗つて歸宅した。それで、私の興津行は龍華寺參詣を果したゞけになつた。

## 黙阿彌について

私は、讀書するには頭が疲れてゐるし身體を動すのも大儀に感ぜられる時には、地圖とか年表とか云つたやうな者を見て、いろ／＼に空想を恣にして、退屈さましをすることがある。芝居道の達人田村成義氏の「續々歌舞伎年代記」なども、數年前その出版者たる嗣子壽二郎氏から寄贈されて以來、たび／＼取出して、漫然と目を觸れてゐる。この一見五六十年間の興行目錄に過ぎないやうな、普通の讀者の目には極めて乾燥無味に思はれさうな浩漭な書物を、私は全部が手垢で汚されたほどに弄んでゐたのである。明治初期の劇界の大策士守田勘彌の權謀術數が、興味ある挿話としてたび／＼記されてゐるし、著者自身の興行上の苦心談も隨所に洩らされてゐるし、名優の逸話などもあるし、劇評もあるし、特異の社會をつくつてゐる演劇壇の表裏の消息が散見してゐるのだが、私はさういふ記事が掲げられてあるために、この書物を愛讀してゐるのではない。東西の歴史年表を見て、國家の興亡起伏を想像すると同じやうに、また地圖を見て、世界の光景を想像すると同じ

やうに、上演目錄と登場俳優の名によつて、その時々の舞臺を、私は想像して楽しむのである。數百年の間民衆の娛樂機關として最も有力であつた歌舞伎劇が、明治の中期まで、繁榮して、時代の影響を受けて舞臺の色彩が多少づゝ變化しながらも、都人士の享樂の中心として持囃された有様を、「年代記」を道しるべとしてその後を辿つてゐると、維新後の世相の一面が、私の眼前によく浮ぶやうに思はれるのである。明治の末期から今日に至るまで、演劇の外形や内容に非常に變化が起つたのであるが、歌舞伎劇はまだ殘喘を保つてゐる。他日、歌舞伎趣味が民衆の心から離れてしまふ時こそ、武士道などの舊思想も、舊弊な通人趣味も一洗される時であらう。

さういふ議論は別として、この「續々歌舞伎年代記」に現はされてゐる五六十年間の演劇壇は、俳優の方から云ふと、團十郎と菊五郎との成長發達圓熟の歴史であつたが、作者の方から見ると、河竹黙阿彌一人が活躍してゐたのであつた。黙阿彌がゐなかつたら、明治前後の演劇は餘程違つたものになつてゐたであらう。今日の芝居もまだ少からず、この大作者の亡靈につきまとはれてゐるのである。坪内博士は「黙阿彌傳」の序文に於て、彼れを評して、「三世紀に互る我近世演劇史上、一作家にして前幾代かの蘊蓄を兼該し、其の最終の集大成者にして、後には一人の來者をも有せざ

る黙阿彌の如きはあらず。彼れは眞に江戸演劇の大間屋なり、徳川平民文藝の羅馬帝國なり。即ち彼れは一人にして一大都會なり、一身にして數世紀なり」と云つてゐられるが、この作家の技倆は、新時代の文學者によつても、いろ／＼の方面から研究されて、眞價を認められてゐる。

しかし、私は今こゝに、演劇史家らしい態度を持してこの作家を研究し論評しようとは思つてゐない。たゞ、「黙阿彌と私」といふ題目が相當してゐると思はれるやうな態度で、例の無遠慮な感想を吐露しようと思つてゐるだけである。

私は、少年の頃、田舎にゐて東京の芝居を空想してゐた時分、春陽堂刊行の「狂言百種」によつて、「勸善懲惡覗きからくり」や、「春霞空住吉」など三四の脚本を讀んで、はじめて、黙阿彌といふ名を知り作品にも接したのであつたが、左程面白くは思はなかつた。上京後頻繁に劇場へ足を運ぶやうになつてからも、俳優の所演を鑑賞するばかりで、作者については殆んど考へるところはなかつた。無論原作を讀んだことは滅多になかつた。概して西洋の戯曲は讀んだだけで感心し、日本の脚本は上演されたものを見たゞけで感心するのが、數十年來私の演劇に對する態度であつた。

ところで、私は歌舞伎芝居を随分見續けて來たのであるが、今考へて見ると、どの作者のよりも

黙阿彌物を最も多く見てゐるのであつた。私は長い間、知らず／＼この作者に親しんでゐたのであつた。従つて、私は人生と藝術とに關して、黙阿彌の感化を受けてゐなければならぬ筈である。無論、これ等の作者は明日の役者のために脚本の筆を執つたのではなく、自己の主義主張を現はすために物を書いたのでもなかつたのだから、書卸しの當時の舞臺を見たのでなければ、完全に作者の技倆を感得する譯に行かないのであらうが、兎に角私は、翻譯や抄譯によつて歐米の文學に親しんだ程度に於て、數十年の間舞臺上の黙阿彌に接してゐた。學生時代に、「河内山と直侍」や「島ちどり」や「高時」や「伊勢三郎」など、團菊の所演に心酔したのであつたが、その原作者は、黙阿彌であつた。「十六夜清心」「三人吉三」「髮結新三」などをはじめ、私の頭の中に茫漠として残つてゐる黙阿彌製の劇的場面を思浮べると、それは殆んど限りがないのであつた。自分の數十年間に見聞して來た實社會の光景よりも深い興味をもつて思出されるものも少くない。(私は近年心酔して芝居―殊に舊劇―を見たことは一度もないのだが、さう云へば實人生の事實についても感激し心酔したことは殆んどないと云つていい。)

それでは、どういふ感銘を黙阿彌から得てゐるのであらうかと、今努めて客觀的に自己批判を試

みたが、それは江戸情調と云ふべき詩趣であつた。江戸末期の見物の好みに投じて舞臺で成功しようと努力した黙阿彌の作品に江戸情調の流れてゐるのは、田舎の野良唄に田園趣味が漂つてゐると同様で、今更こと新しく云ふのが滑稽なくらゐであるが、私が、最初黙阿彌の二番目物に心酔し、その後長い間舊劇に幻滅を感じながらも、をり／＼退屈さましに、見に行く程度にでも、かすかな興味を覺えたのは、彼れの作品には、昔ながらの詩があるためであつた。彼れの舊い詩は私の頭に浸潤してゐる。私は一方でそれに反抗するのを續けたのであつたが、黙阿彌が俳優や舞臺や音楽家を通して唄つた詩は、私の頭からのぞくことが出来なくなつてゐるのである。學者的戯曲家福地櫻痴の脚本の如きは、殆んど全く詩を缺いてゐる。黙阿彌の後繼者の如きも、舞臺の技巧を別としても、全く詩を缺いてゐる。鶴屋南北など、黙阿彌以上の奇才として、この頃ある種の人々に推奨されてゐるが、彼れには寫實的伎倆もあり、奇想人を驚かすものがあつたにしても、黙阿彌ほどの詩がなかつた。

黙阿彌も、當時の世相を巧みに描く寫實の才があつた。小團次が喜んだのもその點であらうし、當時の見物が歓迎したのも、一半はその點にあつたのであらう。しかし、私などには、徳川末期の

遊女屋の光景や水茶屋の有様や、貧乏旗本の生活振りを、舞臺で見ることが、さう大した興味にはならない。たゞ、そこに流れてゐる詩趣に心が惹かれたゞけなのだ。黙阿彌は、酸いも甘いも噛みわけた人情通であつたに違ひないが、深い人生觀察があつたのではない。當時の常識に従つてゐたのに過ぎなかつた。心の廣い人であつたであらうが、深みのある人ではなかつた。私は、舞臺で見た彼れの製作のうちでは、「縮屋新助」と「小猿七之助」とに於て、人間性に對する彼れの目が深く入つてゐるやうに感じたが、それだつて、舞臺上の通俗的の面白づくに妨げられて徹底を缺いてゐる。「鑄掛松」や「清心」の心機一轉などは面白いが、作者自身があの氣持に對する情熱がないために、あとがフヤけて茶番見たいになつてしまつた。

私は、今度「黙阿彌全集」を側へ置いて、その中から、代表的のものを選抜して、「忍ぶの惣太」と「宇都谷峠」と「河内山と直侍」とを通讀し、その他三四の脚本中の見せ場だけを抜き讀みした。そして、芝居の運びのうまさと、南北や五瓶などよりも遙かに人情味の豊かなことを感じた。「辻番の場」の鼠小僧でも、「筆職幸兵衛」内の場の直侍でも、黙阿彌は、甘つたれた人情の濫費をして見物を喜ばせようとしてゐる。講釋本種であるほどあつて、講談情調を脱しないのだが、しかし、讀

んだ、けでも、詩趣の漂つてゐることは否まれない。彼れの先輩瀬川如阜の「浮名の横櫛」の如きは、作者一代の傑作とされてゐるが、それは徒らにこみ入つた長つたらしい愚劣極まる趣向を綴合せたもので、黙阿彌の物と比べると、藝術と非藝術との差が歴然としてゐる。

全體、その時々興行に當りを取るのを唯一の目的として書かれた者を、普通の小説か何ぞのやうに、書物の上で読んで批判されるのは、作者の意外とするところであらうが、黙阿彌の脚本は、読み物としても、徳川末期の草双紙や人情本などよりは、よつぽど勝つてゐるのである。「前幾代かの蘊蓄を兼該し、最終の集大成者」であつた面目は、この頃のやうに抄略されて上演される物を見るよりは、完備した正本を讀んで一層よく認められるのであるが、認めるといふのは必ずしもこの「集大成者」の所行のすべてに敬意を拂ふことを意味してはゐない。私はこの「江戸演劇の大問屋」の作品の通讀によつて、徳川時代の劇作術を伺ひ、今日の目では、それがいかに下らないものであることを知つた。作者になるために拍子木叩きから稽古して行く瑣末な形式的の修業法の愚かさは云ふまでもないが、長い間にいろ／＼な脚本製作上の型をつくつて、どうしてもそこへ持つて行かなければ、芝居にならんだの「幕が切れん」だのと妄信するやうになつたのは、今日からは憫殺すべきものである。名人小團次の演劇觀でも、舊幕的マンネリズムに墮してゐたので、今日から見ると、むしろ笑ふべきものがある。黙阿彌の出世作とも云ふべき「忍ぶの惣太」の梅若殺しの場が、最初小團次の氣に入らなかつたので、作者は苦心慘澹して、堤の殺しの場へチョボを入れ、舞臺と花道を割ぜりふに直したら、小團次は非常に喜んだと云傳へられてゐるが、今この脚本によつて、惣太と梅若との割ぜりふを讀んで見ると、明治二十年代に流行した「美文」といふものを讀むやうに甘たれたいや味が感ぜられる。明治初期の新體詩の調子を舊弊に云つたゞだけだ。寫實に徹底しようとした小團次も、こんな幼稚な感傷的ぜりふを喜んでゐたのかと思ふと、彼れの寫實の技倆に對して私は疑を起すのである。惣太があつたの惨い殺人を企てる心理の表現は、あれではぶち壊してあつて、いつそあんなものは全部ない方がいゝくらゐだ。シェイクスピアのマクベスや、近松の「油地獄」には、流石に、殺人に於て、あんな甘たれたお芝居はやつてゐない。日本の役者だつて、團十郎はあゝいふ感傷的演技を好まなかつたであらうし、黙阿彌自身が最も敬服してゐたといふ關三十郎なども好まなかつたであらう。しかし黙阿彌は、一度小團次の歡心を得たのに味を占めたせゐるか、「十六夜清心」をはじめ後年の作品には、劇作術の一つの動すべからざる條件の如くに、このマンネリ

ズムを遵奉してゐるのである。

いつだつたか、新劇に理解の深い文學者諸氏の舊劇合評を讀んだ時に、諸氏が口を揃へて、默阿彌の、「つらね」とか「たん火」とか名づくべき美文調のせりふに感歎して、自分だちにはとても書けないと云つてゐるのを見て、私は奇異な思ひをした。私などよりも一代若い文學者諸氏でさへ、まだあんな空疎な美文に感心してゐるのであらうか。默阿彌のあんな臺詞に感心するくらゐなら、それよりも一層七五調を操つてゐた曲亭馬琴の美文に一層多くの敬意を拂つていゝ譯である。默阿彌は、極めて低級な文辭しか綴れなかつた通人的文人のみ蠢動してゐた幕末と明治初頭に於ては、鶏群の一鶴として、文才に富んでゐたので、珍重されてゐたのであつたが、文章の上に獨創の妙はなかつた。徳川演劇の「大集成者」であり、「大間屋」であつたが、そのかはり文章に清新なところはなかつた。「この青柳の一樹の蔭」「一河の流れ汲合ふも、盡きぬ縁たしの稻瀬川」「結ぶ氷りも一夜よまに」「別れて末は白浪の」といふ、例の清心と、求女の割ぜりふによつても、彼れの慣用語が察せられるが、われ／＼はかういふ文辭を名文句と今でも感じなければならぬのであらうか。登場人物の心理にピッタリ嵌るやうな辭句を用ひようとはしないで、傳統的に美辭佳句とされてゐるやうなものを寄

集めて來るのが、彼れの常套手段であつた。

さうして、私自身も、何十年間茫然として觀劇に耽つてゐた間に、空疎な七五調を耳に快く感ずるやうに教育され、感傷的な音楽と色彩とによつて、奇怪な夢に遊ぶやうに習慣づけられたのであつた。私は江戸末期の藝術を古今に類のない低調なものとして、この頃は極度に侮蔑しながら、生れた時代が悪かつたために、少年時代青年時代の私の心にそれが染みついてゐて、今となつてはどらうにも洗落すことが出来なくなつてゐるやうに思つて、それを歎息してゐる。

私は春秋に富んでゐる文學愛好者に告ぐ。繊細な遊戲的技巧にのみ捕はれてゐた江戸末期の文學演劇には接觸する勿れ。戯曲に志すにしても、默阿彌物などを讀む必要もないのである。默阿彌や南北などを推稱する者があつても、それは老人の骨董趣味として、取扱つてゐればいゝので、眞に人生を見詰めて、それに對する自己の解釋を加へんと志す者は、江戸末期の通人文學の大家などから、敢て教へを乞ふ必要は寸毫もないのである。

菊五郎の如き才氣のある俳優も、默阿彌などの江戸狂言を、「芝居になつてゐる」ものとして珍重してゐるやうでは、新時代の俳優たる資格を失つて、やがて映畫役者にも劣るやうになるだらう。

私が辛うじて數年間見ることを得た團十郎は、非凡な名優であつたと、今も空想してゐる。彼れだけは江戸劇の常套から脱却せんとしてゐたのであつたが、彼れの天分を十分に發揮さすに足る作者がなかつた。默阿彌も先代菊五郎の技能を舞臺に耀かさせる新作を仕組むことは出来たのであるが、團十郎の才を伸させる力は有つてゐなかつた。

今の舊俳優や座付作者や、見物などが默阿彌の芝居などを標準にして、新作を批評して、「芝居になつてゐる」とかゝらないとか云ふのは、眼識が腐つてゐるのだ。默阿彌は「徳川芝居の大間屋」として、歴史的價值を持つてゐるのに過ぎない。坪内博士が『小説神髓』に於て馬琴を放逐しようとしたのは四十年の昔である。それに、芝居の方では、まだ默阿彌が跋扈してゐて、容易に追放の憂目に會ひさうでない。十一月の帝劇では、「河内山」の通しをやるさうだが、見物はまだあゝいふものを歓迎するのであらうか。「合法衝」の痴呆性殺人劇よりはまだしも氣持よく見られるだらうが、今度原作で讀むと、あの芝居も上手に作られてゐるが、河内山の化込みなんか一種の茶番である。茶番と云へば、西洋人にも茶人が多いので、日本の歌舞伎劇を激賞してゐる者もある。それをまた謹聽して、蒙を啓いたつもり日本人がゐるから面白いではないか。

私は自分で戯曲を書くに當つて、何より大切なことは、「歌舞伎年代記」を忘れ默阿彌を忘れ、數年來自分の心にこびりついてゐる芝居の一切を忘れることであると思つてゐるが、長い間感傷してゐた悪女の記憶を心から綺麗に絶切ることが出来ないのと同様に、完全な忘却は遂げられないらしい。秋の夜の獨坐のつれづれには、昔見た舞臺の面影を奇怪な夢としてたび／＼思出すのである。

(十月二十三日)



## 新劇協會について

畑中蓼坡君の新劇協會が、今度菊池寛君の援助を受けて、「文藝春秋」社の劇團として興行を続けることになつたといふ記事を、私は新聞で讀んだ。詳しい内情を知らないから立入つた批評は出来ないが、兎に角喜ぶべきことである。本當なら、誰からも援助されず、従つて束縛も受けなくて、自分の思ふ存分に事業をやり通すに越したことはないのだが、それは、小説家や美術家にしてはじめてなし得ることであつて、俳優でそんな純藝術家氣質を持つてゐては、何も出来ないだらう。

私は、「人生の幸福」が二度目に上演された時から、畑中君の芝居を數回見てゐる。築地の同志會館や新宿園などの粗末な小屋で、碌な舞臺装置も施さないで、少數の見物を相手に熱心に演じてゐるのを見て、藝の巧拙を鑑賞するよりも、先づこの劇團のみじめさを瞑想した。しかし、畑中君自身は、「今度はうまく行きさうだ」と、絶えず前途に希望を寄せてゐたらしい。彼れの「今度は」が、いつも興行成績の失敗に終るのを見た私は、「そんなにしてまで芝居をやつて面白いんですか」と、

怪んで訊いたことがあつたが、彼れは答へて曰く、「私は、芝居をやつてゐる間だけ生甲斐を感じてゐます」

その言葉に私は感動した。どの役者も批評家に褒められ見物にチャホヤされてゐる時にこそ生甲斐を感じるのであらうが、何年努力を續けても酬ひられるところがなく、二十人三十人の見物を相手にするばかりで、世間的名聲に眩惑される通俗批評家や文學者からは嘲笑されながら、なほ自己の演技に生甲斐を感じることは、私などのとても達し得られない心境である。それも、年が若ければ、前途の華かな役者生活を夢みて今日の不遇を慰めてゐられようが、畑中君は私よりもいくつかの年長者であるのだ。

自由劇場や文藝協會以來、いろ／＼な團體によつて新時代に相應しい演劇の基礎が築かれかけたのであつたが、どの團體にも多少の應援者があつた。畑中君のやうに獨力で倦まず續けて來たものは稀れであつた。それで、彼れの事業も、自分一人で「生甲斐」を感じるばかりで、世間的の意味では「勞して功なき」ものとして終るであらうと、私は痛ましく感じてゐたのであつたが、今度の噂によつて、私も彼れの事業に多少の明るみの差して來たことを感じた。畑中君自身の喜びは察す

べきである。

「人生の幸福」が、舞臺の上だけでは多少の効果を擧げて、作者も意外な名譽を得たのであつたが、それは畑中君の演出がよろしきを得てゐたためであつた。作者はこの熱心なる俳優に負ふところが少くない。しかし、たまくあの一作が成功したために、縁起を祝つて、相續いて私の作物を上演したのは、畑中君の興行策として、甚だ當を失してゐたのであつた。今度恰好の後援者を得て面目を一新することになつた上は、最早私の脚本などは念頭から退けていゝのである。畑中式マンネリズムを脱却するためにも、それがいゝのである。潑刺たる現代の人生世相の動いてゐる作物を選ばなければ損である。

私は觀劇數十年に及ぶも、現在眞眞にしてゐて俳優一人もないし、交はりを結んでゐる俳優も絶無である。多少の縁故のあるのは、畑中君一人であるので、この熱誠なる藝術家が、せめて澤田正二郎君の半分でも世間的成功を獲得するやうにと、蔭ながら切望してゐる。(十月二十四日)

## わが文學小觀

我々は馴れつこになつてあまり感じなくなつてゐるが、毎日の新聞の廣告の大部面が、雜誌と著書の廣告で埋められてゐることは、驚嘆に價ひするのである。一つ一つの賣高は僅少なのであらうが、兎に角こんな頻繁に發刊されるのに由つて見ると、購讀者の數は、全體に於ては非常な數に達してゐることが察せられる。古文學の豫約出版が近年續出して留るところを知らないやうな有様であるのも、私には不思議な現象と思はれる。萬葉源氏の類も、過去千年の間に流布してゐた數よりも、最近五年か十年の間に印刷された數の方が、遙かに勝つてゐるかも知れない。神祕の珍本披ひされ、むしろ神聖視されてゐた古典も、古ぼけた姿を明るみに持出された。そのためにいよく眞價を發揮するものもあるだらうが、少數者が愛玩してゐた骨董品の箔が剥けて有難味の失せるものもあるであらう。

私なども、新聞の廣告面を見ると、絶えず購讀慾を唆られるのであるが、讀みたいと思ふ者を一

一讀んでゐたら際限がないので、成るべく讀まない分別をしてゐる。森鷗外氏のやうに、三時間の睡眠で満足して、讀書三昧で一生を過したにしても、その讀破した分量は、古今東西の書籍に對しては、九牛の一毛にも當らないであらう。私は、この頃夏目漱石氏の作品を、暇々に讀んでゐるが、鷗外氏と同様の多讀家であつた彼れは、その「文學論」の序文に於て、青年の學生に告げて、「春秋に富めるうちは、自己が専門の學業に於て、何者をか貢獻せんとする時、先づ全般に通ずるのを必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば、白頭に至るも、遂に全般に通ずるの期はあるべからず、余の如きものは、未だ英文學の全體に通ぜず。今よりも二三十年の後に至るも、依然として通ぜざるべしと思ふ」と云つてゐる。

書物が容易に手に入る時代になつたのも、學者に取つて必しも幸福とは云はれない。落着いて、少數の書物を十分に味ふ昔の學者の心境には達せられなくなるかも知れない。塵芥のやうな書物まで搜集めて印刷するやうな世の中になつた。明治初年以來の新聞雜誌を全部蒐集し保存する計畫も出來たさうだが、世の中も煩しくなつたものだ。

徒らに讀書するのも精神の浪費である。いろ／＼な物識りになるだけでは詰らない。私などはどちらかと云へば、直接に人生に接觸するよりは、書物を通して人生を知ることが多かつた。作家としてはいゝ傾向であるまい。鷗外漱石の大才にしても、その作品が書齋臭を帯びてゐるらしく感ぜられるが、私などは殊更さうであらうと思はれる。先頃の時事新報(?)に徳田秋聲氏が、文學者と小説家の區別を論じてゐたのを、東京滞在中に一回だけ讀んだ。續けて讀む機會を失つたので、氏の論旨が十分に分らなかつたが、さながらの實人生を寫した小説と、學者の頭から割出した小説とを區別したのではあるまいか。論據をそこに置いて、一を是とし一を非としてゐるのなら、私も大體に於ては同感である。しかし氏の論中、漱石や鷗外よりも紅葉の方が傑れた作家であるらしい意見が微見かされてあつたが、その説には、私は同意をすることを躊躇する。鷗外の小説がいかに書齋臭で濁つてゐても、その晩年の傳記小説「澁江抽齋」「北條霞亭」の如きは、幅に於ても深さに於ても、とても紅葉などの及びもつかないものであると確信してゐる。

書物を通じて世相人世を見ることの多かつた私などは、小説の材料を取扱ふに當つても、ある概念でそれを片付けてしまふことが多かつた。自分の過去の作品が潑刺たる生氣を缺いてゐる所以である。

讀書に於ても、私はある一つの事を徹底的に研究する根氣を缺いてゐるが、人生に觸れるにしても、底の底まで入つて行くやうな氣力を私は有つてゐない。戀愛その他さまざまの人情でも、身を滅ぼすまでに突詰めて行つたら、そこに恍惚境が出現するのであらうが、それは今までの私には遂げ得られることではなかつた。

しかし、性癖はいかんともし難い。私は人生の渦中に身を投ずることは嫌ひである。歳を取るにつれて、ますますさうなつて行く。方丈記や徒然草の作者や芭蕉など、日本の文學者の心には傳統的に潜んでゐる微温的厭世觀、微温的無常觀に、私の心は浸つて行くばかりらしい。

私は、水火に鍛へられた實際生活を直寫した小説戯曲の類を好む。海邊の破丘に蹲つて激浪怒濤を見るのを好む如く好んでゐる。しかし、自分がその波濤の中に突進しようとは思はない。幾十尺の海底に潜り込まなければ眞珠は搦かんで來られないのだが、藝術の眞珠も、そのくらゐの苦難を経なければ手に入れることは出來ないのであらう。數十年の作家生活を經驗した今日、いくら鋭敏に目を働かせても、傍觀的態度だけを保存してゐる作品の作家は、體驗をぶちまけた作家の作品に及ばないところのあることを、私は痛感してゐる。いろ／＼な作家があつて色彩がそれ／＼に異つ

てゐるから面白いのだが、悲喜哀歡の體驗が作中に漂つてゐないものは、讀者を捉へる力が乏しいに極つてゐる。他人の話を書くにしても、史上の人物を取扱ふにしても、自分がそれ等の人物と心をつなげてゐるのでなければなるまい。それは分りきつたことなのだが、私は、自作に不満を感じるたびに、そのことを考へてゐる。實人生について經驗の乏しい私は、作中の人物の心に入つて行くことが出來ないため、つねに自分の書齋的空想で補綴するやうになり、従つて作品に生氣を失ふやうになるのだ。

私は更に一步を進めて、藝術と實行について考へることがある。藝術至上主義などを唱へる人もあるが、藝術は實行の影見たいなもので、實行に没頭してゐる間こそ人間は全心的に生きてゐるので、さういふ人には、藝術なんかどうでもいゝものではあるまいか。戀愛に耽溺してゐる人、戰鬥に従事してゐる人にとつては、いかなる戀愛小説も、いかなる戰爭劇も、稀薄な影に過ぎないのである。いかによく眞實を寫したと云つても、寫された眞實は眞實に含まれてゐる微妙な生命の脱殻見たいなものではあるまいか。私はそこまで考へて行くと、體驗を文字によつてぶちまけた作品だつて、畢竟それは體驗の影法師に過ぎないので、文字にうつす瞬間に、眞生命は逃げて行くのでは

ないかと疑はれる。他の傑れたる作家は、自己の體驗を遺憾なく現はしてゐるのかも知れないが、と自身は、時として自分の平凡な體驗を作品のうちに現はさうとしてさへ、思ふやうに現はし得られない憾みを何時も感じてゐる。文學上の技巧の不足もその一つの原因になつてゐるのだが、文學といふものは本來さう云ふもので、現實に對して畢竟、「繪を言<sup>こと</sup>」たるに過ぎぬのではあるまいか。歌舞伎劇ばかりがそらくしいのではない。近代劇だつて、文學上の遊戯と思はれないことはない。我々はいろく々な作家の描く幻影を見、人生の影法師を見て、それを弄び、それを銷閑の具としてゐるのである。

雜書を讀續けて來た私は、自分の頭をさまざまな作家の幻影法師の巢にしてしまつた。それ等のものが、人生の真相を知るにどれだけ役に立つたかと疑つてゐる。

## 讀書餘錄

△長谷川二葉亭が、明治三十七年に翻譯した「四人共產團」といふ小説を、興味をもつて讀返した。これは一度讀んだことがある筈なのだが、今度は以前に増して感動させられた。時代思潮が變遷してゐるためであらう。あの時は「共產」といふ文字に、さしたる力がなくつて、讀書の心を刺戟するに足らなかつたのだが、今日は、それが強い力を持つやうになつたのである。この小説にはある思潮に對する批評がある。しかも、今日の日本の所謂「プロレタリア文學」に見るやうな乾燥無味な露骨な批評ではなくつて、ある種の人物とその生活とが、渾然として巧みに描かれてゐながら、作者の批判が自ら作中に動いてゐる。原作者はポターペンコーといふ、ロシアでは二流以下の文學者であらうが、藝術的手腕は立派なものである。二葉亭の翻譯もうまい。

ある批評家の主唱するやうに、小説に人生の批評や思潮の批判が必要であるのなら、少くもこの小説くらの出來榮えを見せなければなるまい。

四人の貧しい學生は共產團を組織し共同生活を營むのだが、つまり我の強い者が勝手なことをしてゐるのである。そして、ある期間だけ、不公平不満足な共同生活をやつたあと、最も我の強い奴が、自分に出教授のいゝ仕事の口が見つかるや否や、直ちに共產團を破壊して出て行つてしまふ。別れ際に曰く、「おいは説が違つて來たのぢや。おいの考へぢや、共產團は所謂個人ちうものを壓迫する。個人の個性を奪うてしまふ。人格の特色ちうものは、人の靈性を潤色する所以であつて、またすべての進歩のこいが土臺になつぢやけど、共產團はその特色の發生發展を妨害する……兎に角ぢや、おいがすでにこぎやんした意見である以上は、主義の許さぬことをしちよるのは、尙以て心に愧る。……それぢや、失敬すツよ」

この男が、例の共產團の規定に照らすと、「途方途轍もない暴論」を吐いて出て行くと、後に残つた者どもは、お互にお初にお目にかゝつたやうな妙な顔を看合した。一分前の世界とはまるで世界が違ふたやうにへんてこに思はれた。恰もたつた今この世へ生れ出たやうな氣がしたのである。

世界的共產團がよし出來たと假定しても、その運命は、この小説に描かれたやうなものであらうと、私には察せられる。共產團を美しい夢のやうに描いて、讀者を樂ませる小説もあるだらうが、

この小説は現實の力を以つて讀者を動かすのだ。氣の弱い者や同情心のある者や我の強い者や、作中の四人がそれ〴〵異つた性質を持つてある團體を組織してゐるのが、浮世の姿をよく現はしてゐる。

△古今の日本文學者の、纏つた傳記や評論が現はれないのを、文運隆盛の時代に似合はしからぬ遺憾事のやうに、たび〴〵説かれてゐたが、この頃は、さういふ者も、ポツポツ出版されてゐるやうである。「藤村傳」も「有島武郎傳」も現はれた。東京帝國大學の國文學研究室からは、研究叢書が續出されてゐる。私はそのうちの「源氏物語の新研究」と「西鶴論」とを一讀した。どちらも、在來の諸家の説を蒐集した、用意周到な好著述である。穩健で常套的で、獨創の見地は多く見ることが出來なかつたが、古文豪に關する一通りの知識を得るには甚だ便利である。

同叢書の一つとして、新たに大部の「樋口一葉論」が出版された。僅少な短篇しか世に残してゐない一葉の評論が、そんなに厚ぼつたい書物になるのは不思議であると思つて、私は手に取つて、ところ〴〵讀んだ。作品も三期に分つて、一つ〴〵について解説と論評とを試みてゐるのだが、少し大袈裟に過ぎた感じがした。古今の文學を研究するには、愚直に過ぎるほどの好意を寄せて見な

ければ、眞價を發見することが出来ない譯なのだが、この「一葉論」は、論者の用ひた定本があまり大き過ぎた。この筆法で行つたら、今日の同人雑誌の寄稿家をも、文豪に仕上げることが出来るであらう。一葉の初期の作品など、さう重く見るには及ばないのだ。

△「明治文學名著文庫」に收められて、最近出版された紅葉の「色懺悔」や露伴氏の「風流佛」についても、私はさう思ふ。紅葉の小説は、甚だ讀易いものであるが、所謂出世作の「色懺悔」ばかりは、私にはどうにも讀みこなせない。古文學中の美しさうな文句を、あちらからこちらから抜いて來て寄集めたもので、死語の行列である。二十を過ぎたばかりの青年が、これで賣出さうとして、藝術的には無意味な努力をしたことが察せられるばかりである。紅葉に取つては最大の苦心をした小説であるかも知れないが、それとゞもに、紅葉全集中の最悪作である。昔これが評判になつたといふのが、私には不思議でならない。私の説を疑ふ人は、今日この小説を讀んで見るがよい。これを通讀し得る人があつたら、その人は忍耐力の強さを誇つていゝ。私に取つては、この「色懺悔」などよりも、「佳人の奇遇」や「雪中梅」「花間鶯」などのの方が、まだしも一讀に値ひすると思はれるのである。

古文學の新研究は結構なことであるが、骨董屋が燻けた古器物でさへあれば、何でも價値があるやうに吹聴すると同様に、昔の文學なら何でもいゝものゝやうに説くのは、むしろ滑稽である。悪作「色懺悔」を出した紅葉が、數年後に傑作「三人妻」を著すに至つたその徑路に、私は興味を感じずれば感ずるのである。

△古本の「十千萬堂日録」が手に入つたので、紅葉の日常生活の一端を知るために讀んだ。不思議なもの、作者苦心の「色懺悔」は、讀むに堪へなかつた私も、この作者の備忘録に過ぎない日記は、全部を通讀した。一代の流行作家の一面が分つて面白かつた。絶え間なく押寄せる訪問者と談笑し、日々知人との會食に興じてゐる社交的に忙しい、不規律極まる生活は、私などのヒツソリした生活とは、似もつかぬものであつた。これでは、健康を害して若くして倒れたのは當然である。この日記には、藝術上の感想は洩らされてゐないのだが、杜絶勝ちであつた「金色夜叉」のために苦心してゐたらしいことは言外に推察される。あるひは、この大作行詰つたゞめの焦慮煩悶を紛らすために、談笑飲食遊戯に日を暮してゐたのではあるまいかと、善意な解釋も試み得られるが、それは、買被りであらうか。

馬琴の日記でも一葉の日記でも、紅葉の日記でも、無論公刊を豫期して書かれたものではないので、讀者の方では、作者不用意の記事に却つて興味を感じるのだが、作者自身に取つては甚だ迷惑であるかも知れない。これからの作家は、死後の公刊を豫期して日記を書留めるか、あるひは、臨終前に焼却するやうに心掛けねばなるまい。

「十千萬堂日録」の中に、紅葉が、門弟の月並會に出席して、席上芝蘭簿の記入を試みたところが、彼れが人となりを知る材料として、私には面白かつた。「希望」としては歐洲大陸にマアブルの句碑を樹つることゝ云ふのが、ことに面白かつた。短冊を手にして俳句をひねくることは、日本文學趣味の精髓のやうであるが、紅葉の名譽心は、自作をマアブルに刻まうと空想した。「句碑」といつたところが、日本文人の超脱されない日本趣味である。

△「創作探偵小説選集」のうちの五六編を読んだ。空々しく感ぜられて興味が添つて來ないので、讀苦しくなつて、最初企てた全部の通讀を中止してゐるのだが、日本の文壇でも、一面にかういふ種類の小説が發達してゐることが分つて、その點は面白く感じた。西洋の探偵小説や怪異小説に、作者自身は頻りに讀者を怖がらせようとしてゐるに關らず、讀者の方では少しも怖く感ぜられない

ものが多いが、この日本の「創作探偵小説」にも、さういふのがある。江戸川亂歩氏の「心理試験」や甲賀三郎氏の「琥珀のパイプ」は、なかく手が入込んでゐて、一通りならぬ作者の頭の働きを見せてゐる。しかし、理智の弄れと云つたゞで、藝術的魅力がない。筋立だけで陰影がない。ポーの「黄金蟲」や「モルグ街の殺人」などは上だけ似てゐるやうで、作柄が違つてゐる。大下宇陀兒氏の「金口の巻煙草」のやうな者は、單純だが、氣輕に興味をもつて讀める。それから、他の文集で讀んだ亂歩氏の「赤い部屋」といふのは、私にも面白かつた。頭も筆も冴えてゐる。

夏目漱石氏は、探偵を嫌つてゐたが、しかし、あの作者は面白い探偵小説の書ける人であつた。「彼岸過ぎまで」のある所には、さういふ興味が豊かであつた。探偵小説と云つても、探偵と犯人との鬼ごつこを主としなくなつたのは、「創作探偵小説」を讀んで分つたが、それだけは進歩である。

△私は「文藝時評」に筆を執るに當つて、時々現代作家の文章を抄録することがあるが、讀んだゞけでは左程に感じなかつた各人各様の文體について感ずるところが少くなかつた。文章の構成は千差萬別で、個人的を發揮するのがいゝに極つてゐるが、漢字の使ひ振り、假名遣ひ、用語の運用がまるで不統一で雜駁なのに、私はこの頃はじめて氣がついて驚いてゐる。一葉や樗牛などの云ふま



でもなく、藤村花袋秋聲など、現今の文壇の諸先輩の文章、あるひは青年諸氏の文章を、一二拔出して比較して見ると、直ぐに分ることだが、必しも文章の調子や色彩に關係はないのに、各人の用語が皆んな異つてゐる。日本でも以前はこれほど混亂してゐたことはなかつたのであらう。外國の言語學者の説によると、英語ほど文典で統一し難い、例外の多い、不規則な個性發揮の特色に富んだ言語はないさうだが、私は日本現今の文章ほど、思想や文意については兎に角、用語に統一を缺いた雜駁な文章は、世界に類がないのではあるまいかと思つてゐる。

△アメリカの映畫は、伊佛獨などの歐洲物に比べると、卑俗であるやうに云はれてゐる。アメリカ文學が平俗であることは、日本の文壇でも定評のやうになつてゐる。アメリカの宗教は俗惡だといふことも、内村鑑三氏などによつて屢々説かれてゐる。しかし、私は餘程前から、將來アメリカから新しい偉大な文學が現出するのではないかと空想してゐる。米國には歐洲のやうに、古くさい傳統的の垢がついてゐない。物質文明科學文明の盛んな國には傑れた藝術が起らないといふ理窟は、必ずしも全面を現はしてゐないのではあるまいか。

△晩秋のこの頃、私は、「菊の香や、奈良には古き佛達」と詠じた古詩人の心境を追想するととも

に、若くして死んだ異國の詩人シェリーの「西風に寄せた」詩の激情にも心が動されるのである。

「枯れつ葉を吹拂ふやうに死んだ思想を追拂へ。……冬來りなば春遠からじ……」(十月二十五日)

只今「中央公論」十一月號を手にするや否や、大山氏及び青野氏の所論を走り讀みした。前者は私のあの論文とは直接の關係のないものやうに思はれるが、大山氏は、あの譬喩を巧妙適切な譬喩と思つて辯護されたのであらうか。青野氏のは叮嚀に自己の心情を吐露してゐて、同感されるところもある。論客としての氏の前途の榮えんことを望む。(完)

## 文藝評論終

51  
47

昭和二年一月六日印刷  
昭和二年一月十日發行

版權  
所有

文藝評論

定價 壹圓八拾錢

著者 正宗白鳥

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

印刷者 松井勇

東京市芝區愛宕町三丁目十四番地

發行所 改造社

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地  
振替口座東京八四〇二番  
電話銀座一四七五八番

松井印刷局印

文藝評論  
正宗白鳥  
……  
……  
……

51  
47

正 宗 白 鳥 著

安 土 の 春

安土の春・勝頼の最後・ある文學者の心・柿の木・老醜・

四六判上製  
定價 一円三十錢  
送料 十 六 錢

あ る 心 の 影

ある心の影・人生の幸福・影法師・秘密・白壁・

四六判上製  
定價 一円六十錢  
送料 十 八 錢

歡 迎 さ れ ぬ 男

歓迎されぬ男・光秀と紹巴・わしが死んでも・さまざま不安・溺死者の鮑

四六判上製  
定價 一円五十錢  
送料 十 八 錢

517  
470

